皇學館大学研究開発推進センター紀要　第五号
平成三十一年三月一日発行（抜刷）

資料

神宮皇學館『修学旅行　伊賀日記』（明治二十九年）

―神宮皇學館修学旅行日記・満鮮旅行記（二）―

皇學館大学研究開発推進センター館史編纂

資料

神宮皇學館『修学旅行 伊賀日記』（明治二十九年）

―神宮皇學館修学旅行日記・満鮮旅行記（二）―

皇學館大学研究開発推進センター館史編纂

本科第三回修学旅行
期　間　明治二十九年十一月六日～十三日
目的地　伊賀地方
引率教員　二名（中西健郎助教授・藤堂憲丸舎監）
参加学生　十九名（四年：中村亀次郎・福舎基千代、三年：安藤正次・宇仁義一・大塚運象・近藤弘代・沢田米吉・松本昌三・宗村信喜・山川鵜市、二年：大北正吉・岡田隆吉・坂倉広胖・檜垣恒之・三浦千畝・安元久雄、一年：小串重威・平野直晃・山中栄太郎）
掲載資料　『修学旅行　伊賀日記』（安藤正次編、神宮皇學館発行、明治三十年八月、A5判一四七頁）

翻刻にあたっては、仮名遣いは原文のまま歴史的仮名遣いとしたが、漢字は常用漢字に改め、行頭を一字下げるなど体裁を整えた箇所がある。また適宜、句読点・濁点等を補った。明らかな誤植は正し、脱字脱文を補い、印刷不鮮明により判読できない箇所は□とした。文中に、今日的に不適切な用語が使用されている場合にあっても、歴史資料としての性格を鑑み原文のままとしたことをお断りしておく。

なお、本稿は、渡辺寛名誉教授（当時、館史編纂室長）が企画し、翻刻は大平和典（研究開発推進センター准教授）が担当した。

修学旅行伊賀日記

第三回修学旅行日記

十一月六日午前

本科三年生　近藤　弘代

消費すべき日数は幾日。七日。旅行すべき国は何処。伊賀。一時千金といふ貴重の此の時日、しかも七日の長時日を、この名所乏しき国、此の古跡少き国におきていかでか消失することを得むとは、発途以前往々諸友の口頭に上りたる言なりき。されどよく思へ。天武天皇の経過し給ひし道途はいまだ判然せざる所有るにあらずや。白鳳を出しゝもこの国にあらずや。就中鳳凰寺村なる古墳の如きは土人皆弘文天皇の御陵なることを信じて疑はざるにあらずや。弘文天皇の御陵は已に近江に定められたり。二ツあるべきにあらず。さるを猶かくの如く言ひ伝ふるは、またいはれなきにあらざるべし。吾人いかでか之を判せずして止むべき。これ伊賀を以て這回の修学旅行地と定められたる所以なり。尚馬塚・上廓塚等の大古墳もその何ものなるかを知らず。又国家乱麻のうき世をふりすゝて独身を清

くしたる文学者兼好が遺趾もこの国にあり。発句の宗匠と仰がるゝ芭蕉の遺趾も此の国にあり。第壱回修学旅行として巡遊せし大和の如く、五十余代の帝王の奠都地として名所旧跡を以て充満せられたる国とは日を同くして語るべからずといへども、又第二回の如く京都、大坂、神戸、須磨、明石など繁華の大都景勝の地なしといへども、穿鑿すれば吾人の研究すべき所まだ少しとせざるなし。されば伊賀旅行は全く無効には有らざるべし。否、鳳凰寺村の古墳取調等に至りては、よし我々浅学輩の及ばざる事にもせよ。有らむ限は力を竭し、其の正否の壱片をだに弁別することを得て、聊世人の疑惑を解くべき壱分子となしたらむには、其の時こそ好果を奏したるなれ。今此の日記を草するに当り、聊この国の建置沿革を略述せん。

伊賀・伊勢はもと壱国なりき。往古、猿田彦神この国を開拓し、伊勢加佐波夜之国と名づけたまひき。後、猿田彦神の女吾娥津媛命領治らしたまひし所を吾娥郡と謂ひき。即後の伊賀郡にて、伊賀は吾娥の転じたるものなりといへり。孝霊天皇の朝に、皇太子国牽尊奏したまはく、神風の伊勢国は伊勢津彦の国なり。而して伊賀津媛（吾娥津媛）の知らしゝ国は吾これを領治らむと。天皇これを許し給ふ。因りて伊賀国を建つ。成務天皇の御世、伊賀津別命を以て伊賀国の造と定めたまひき。これ国を分ち定めし初なれども今の壱国にはあらず。唯伊賀壱郡の地のみなりき。その後、孝徳天皇の御代にまた伊勢に隷属せしめられしに、天武天皇の御宇に至り、阿拝・山田・伊賀・名張の四郡を伊勢より割きて壱国を建て、伊賀と名づけ給へり。これ郡名より採れるなり。次いで国府を阿拝郡にたて、下国に列せらる。和銅中、阿直敬国守に任ぜられ、爾後交任せられし者、平宗盛に至るまで凡六十人なり。天喜の頃には、本国三分の二は公卿権家の庄園となりき。源頼朝、府を鎌倉に開き、六十六円の総追捕使と為るに及び、奏請して国守を廃し守護を置く。大内惟義・首藤経俊・平賀朝雅・大内惟信等、相継ぎて守護職に補せられ、大内荘（上荘村）に居たりき。足利尊氏、筑紫より京に上りし時、仁木義長を伊勢の守護となし、兼ねて伊賀を領治らしむ。而して子孫、世々此の職を襲げり。応永の初、将軍義満、名張・伊賀の二郡を北畠顕泰に与へたりき。永正の末に至りては、仁木氏勢漸衰へ、北畠氏も亦伊勢の多事なるによりてこれを制するに暇有らざりければ、柘植・服部・川合・島原・森田・長田・平野・矢具島・比自岐・大江等の諸族競ひ起りて、互に相呑噬すること数年なりき。天正九年、北畠信雄撃ちてこれを降す。十年、再乱れしかば、信雄又兵を率ゐて之を討ち、滝川雄利を伊賀の守護となし、丸山城（名賀郡下神戸村）に居て国事を知らしむ。十一年、信雄、秀吉と兵を搆ふるに当り、秀吉の臣脇坂安治伊賀に入りて、雄利を遂ふ。秀吉即安治に命じて、長田市場（阿山郡）に居て国事を管せしむ。明年、安治、大和の高取に転じ、筒井定次封ぜられて伊賀の守護となる。定次、更めて城を上野に築き、これに移る。徳川氏将軍となるに及び、慶長十三年、定次、失政の罪に坐して岩城に謫せられ、井伊直政・安藤与十郎、命を受けてかりに城池を管理せり。此の歳、伊賀を藤堂高虎に与ふ。爾来、藤堂氏代々伊賀を領し、城代を上野に置けり。高潔の代に至り、維新の改革に遇ひ、明治二年、版籍を奏還す。これより津藩に属す。四年、津藩を廃して津県となし、五年また三重県と改称す。因りて今、三重県の管轄に帰せり。二十九年、阿拝・山田二郡を合せて阿山郡とし、伊賀・名張二郡を合せて伊名郡とし、尋いで名賀郡と改む。

さて、修学旅行として伊賀国に出張すべきよし、命を蒙りしは十月三十日なりき。因りて翌日より平常学科の放課を請ひて其の筋の文書を繙覧したり。かくて名所旧跡等の取調も略ぼ結了したれば、翌くる月の五日には旅途の順序・日記の当番など定めて、いよ〳〵明日出発せむことを學館に届く。

汽車の旅路

十一月六日、星の光をたよりに門出せしは、午前三時なり。一行は本科生十九名と監督中西助教授及藤堂舎監の二名とすべて廿一名なり。出で立つ足いと軽き心地す。安元ぬし、

いざ行きてかよわき足をきたへこむ　上り下りの伊賀の山路に

余もまたしをれ一首といへば、安元ぬしかへりみて腰折などとないひそ。門出のあしたよりといふ。さらば跣足（第一回修学旅行のとき足の速きことに用ゐたる戯語なり）一首とて、

門出する足のすゝみもいさましや　山また山をこゑむと思へば

家々の炊婢はまだ夢を衾の中に結び、野山の鳥雀も猶眠を巣に□り、天寒く地静にして、鞋の音のみいと高し。宮川に至れば、暁告ぐる鶏の声かなたこなたに聞ゑ、飯かしぐ煙やゝたちそめたり。橋を渡らむとす。霜いとしろし。

旅人のまだふみ消たぬ朝霜の　おくいろさむしみやがはのはし

今は鉄橋工事の最中なれば、はや業始めむとにや。工夫等五、六人集ひて火を焚きゐたり。彼等が労苦もまた想ひやらる。五時やゝ前、停車場に着く。発車の期まだ至らざれば、しばし休憩し居たり。こゝに余煙草喫せむとしてかくしに手を入るれば、あはや煙管は何処にかある。うはぎより下着までかくしのあらむ限り、さては革提の中まで掻き捜せども、遂に捜り得ず。あはれこは早くも途中にて手巾を出しゝ時、外ざまに落しゝなるべし。かく物おとす事には常に馴れたる余が手なり。かゝる手もて執る筆なれば、書きおとす事もまた多からむ。批難を受くる事なくば余の幸甚なり。やがて一番発車の期至る。余等は列車の一室内に乗り込みたり。さる手続は監督教師にて為されたり。時辰器五時十五分を示すほどに、汽笛一声、宮川駅をふりすてゝ、軌道囂々の中に田丸につきぬ。夜はほの〴〵と明け行き、四方にたちこめたる朝霧もやう〳〵うすらぎ行きて、山々の眺望いとおもしろきに、麓の賤が屋よりたち登る煙のいとしろう松に懸れるが雲かと覚えて、

松が枝に雲やかゝるとながむれば　賤がかまどの烟なりけり

時にまた安藤ぬしのよみ出でたるは、

霜まよふ小□のほそみちしづがたく　野火の煙のむすぼゝれつゝ

是は右方の景色なるべし。松坂をすぐる頃、夜全く明け、しのゝめの空から紅にそめ渡し、黒くも四方に散り失せて、紫の雲かはりたつ。これ旭日の登らむとするを示せるなるべし。人々皆まどに倚り、瞬く暇も無く望み居たり。しばしといふも詮なき一瞬、千里の速力もて走るこの汽車の中、いかなる処にてか彼の豊栄登るえ顔に謁えむ。もしあやしの賤が屋、名も無き森の木蔭に遮られなましかばと思ふ心は誰しも異ならざらむ。とかくのゝしる間に所もあれ。香良洲のあたりより出でくるものか。金色の雲めでたく靡きて、浜の松が枝おもしろうさしかはしたるに、きら〳〵しき光を放ちてさし登りたるえも言はず。

さし登る朝日のかげに一しほの　けしきそへたる浜のまつが枚

小串ぬしも、

白雲のあけになりゆく東ゆ　あらはれそめぬあさひこのがけ（かげカ）

田面に波だつ稲穂はきら〳〵と閃き、賤がふせやのわびずまひさへ朝日の光に映づきたり。山川ぬし、

浜松の葉ごしにてらす朝日かげ　田ふせの庵ものどけかりけり

更に眼を山の方に転ずれば、今をさかりの紅葉をちこちに映え渡れり。

ときは木の松の緑もあするまで　朝日にはゆるもみぢ葉のいろ

里かげに入りぬ。安元ぬし、なごりをしげにて、

神風や伊勢のうらわの朝げしき　よしと見るまに過ぎ行くをしも

津駅につきぬ。こゝも田舎とはいへさすがは県下の都なり、下るゝ客乗る客いと多し。一身田もいつしか過ぎけむ。下の荘に至る。この夏みまかりし服部ぬしが家はこのあたりとかや。彼の快活男子は此の山川をふみならしゝ事もあらん。今其の容貌彷彿として思ひ起さる。平野ぬし、小串ぬし、彼がありし世の事など語る。とりわけもとの同級生の情、さもと思ひやらる。亀山にて下る。こゝにて関西鉄道の汽車に乗り移る筈なればなり。一時間許猶予あれば、あたりに散歩す。稲苅る翁に此のあたりの収獲はいかにととへば、翁は持てる鎌を砥に合はせむと

にや。傍の土堤に腰うちかけゆる〳〵と語り出しけらく、今年は農夫も殆困じたり、五・六月の頃にはためしなき豊年と喜び祝ひけるに、明日しれぬは此の世の常。いねの花ざかりてふ二百十日の頃に至りて、七日八日降りつゞきし雨に大水いできて大方はおしながされたり。僅に残れる此のあたりも其の後潮風といふものふきすさびて稲の葉末をこと〴〵に吹きからしたれば、熱さを凌ぎて耕しゝ昼の労も、露にぬれつゝ水せきし夜の辛苦も、一朝水沫と消え失せて去年のなかばにも及ぶまじ。されど美濃また桑名あたりの話を聞けば、まだこそよけれとあきらめても見給ふ如きこの穂ぶりなりとてうち歎く顔いとあへなき様なり。此のあたりの農夫だにしかり。まして吾が郷里のあたりはいかならむ。苅り取る稲は殆有るまじ。されば中には朝夕の煙絶えし賤がふせやもあらむ。余先つ日さる要ありて家にまかりし時詠みけるは、

民草のまちけむ秋はきたれども　苅りとる稲のたのみなの世や

思ひ起すだに哀なりかし。とかくするほどに汽車来れば、皆うち乗る。あきたる室なければ五人六人はなれ〴〵なり。乗り合ひたる田舎の老爺等、余等の姿を見て陸軍の御方なりやとさゝやくもをかし。中に一人の八字鬚ひねりつゝある男、彼は宇治山田町なる皇學舘の生徒なりと教ふる声聞ゆ。彼等は猶余等の頭をうち守りつゝあり。これ即余等の制帽は士官帽に象れるものなればなるべし。思へばチヤン〳〵と罵られて憤りし第一回修学旅行の当時とは余等の心中もまた異なりけり。関駅もすぎゆきて、加太にかゝりぬ。谷低くして水清く、山高くして樹木茂らず。鋭く聳えて天を衝くさまなるあり。長く横はり大蛇の渡るさまなるあり、行くも快しや。

いろ〳〵の姿をかしき山々を　坐ながら見つる汽車のたび路か

山鳴り谷応へ、天地震動の中に暗夜の街道を通り過ぐれば伊賀国なり。柘植駅にて下る。昨日は空を眺めて天気をきつかひしに、嬉しや今日は壱点の浮雲も無く晴れ渡りていと暖なり。余等の旅行は天も之を扶くるか。時も至り腹もむなしければ、伊勢屋といふにて昼餉くひつ。むすび包める竹の皮をば過き行く跡のかたみと此処に止めおき、これより芭蕉のあと訪はむとす。

勇みすぎ足なくぢきそ岩ね木根　ふみさくむべき国に来にけり

六日午后

本科三年生　大塚　運象

芭蕉塚　屋形塚　楊夫多神社　六鈴之古鏡

国府之趾　敢国神社

金殿瑤樓の中に人となりて、米のなる木もまだ知らぬ的の貴公子には、送迎に暇なき汽車旅行にても足りぬべし。朝に田畝に耘り、夕は隴上に稲を束ぬる田舎漢には、銅の如き鉄脚むきいだして膝栗毛的の旅行せむ必要もなかるべし、朝な夕な几席の間に兀々として読書三昧に耽る書生の身にこそ、かゝる旅行は必要なれ、さるは芭蕉翁が所謂「東海道の壱筋も知らぬ人、迚も風雅は覚束なし」といはれし如く、到底天然の美を知ることをば得難ければなりけり。

露の命をあかざの杖に托して、慣れぬ旅路に白雲をふみ、一ひらの椎の葉蒲団に一夜の寒を凌ぎかね、或は行脚僧と落ち合ひて南無念仏の声にうまいの夢を破られき、暮らして百五十文の宿に八ッ手の観音を拝み、在野の自称政事家と出遇ひては八方美人政略とか勲章政略とかの説法をきゝ、或時は白雪の皚々たるをふみ、或時は炎熱のとらかす土をふむ。斯くてこそ政治・風俗・人情且は宗教・教育、総べて社会上のあらゆる観察をも遂げ得べけれ。旅の本意もまた茲に在せむか。

誰かいふ、伊賀国は蕞爾たる一小国なり。山水の賞すべき所なく、歴史の徴すべき事なしと。嗚呼、これ無識者のことのみ。世の歴史家が国史家牒を六畳の書斎に繙くとも大概空想に了るは、その旧蹟を探究せざるが為のみ。地理家の机上に地図を画けども往々実地とたがふは、自山河を跋渉せざるが為のみ。さればにや。拙堂翁に鼓せられて月が瀬の梅に一枝の筆を弄ぶものはあれど、赤目四十八

滝・鹿落の紅葉に言葉を掛けたるものを聞かず。又右衛門の鍵屋の辻に一掬の涙を灑くものはあれど、鳳凰寺の古墳を吊ふものなし。紅塵雑鬧たる並が岡の兼好塚に珠数つまくるものはあれど、寂寞たる国見が岡に無常を観するものなし。信長が蓋世の英雄たることを知れど、彼が如何にこの一小国に困みしかを覈明せしもの少し。しかるに天下の人これを怪まず。却りてその然らざらむとするものを怪しむ。誰かいふ、伊賀国は蕞爾たる一小国也、山水の賞すべき所なく、歴史の徴すべき事なしと。

廿名の健児が各一枝の筆を携へて、此の歴史あり此の山川ある伊賀の国に踏入り、一週日をここに費さむとす。怪まんものは怪め。笑はむものは笑へ。毀誉褒貶は定めなきもの、浮世の波に漂ふごとき木葉書生にあらざるなり。

只家苞にせむものは熊にあらず。罷にあらず。王者の師にもあらねど、国民精神の萎靡を防がむ数個の興奮剤のみ。

貴公子の旅行はすでにをへぬ。八寸の草鞋ふみしめて出立つれば、芭蕉塚はかしこなりといふ。教へらるゝ侭に小径を辿る。丘陵甚高からず。一小刹あり。徳雲山万寿寺といふ。天正の乱信雄の為に灰燼となりて、今は規摸至りて狭し。寺房をとへば、翁の碑はこの山上にあれど、当寺には見るべきものなしとこたふ。山上に至れば山上一区劃をなせり。をちこちの眺いとよし。廓内広しといふにあらねど、梅桜桃など混へ植え、七重八重芝など敷きたるに紅葉のてれるなど画にかゝまほしきさましたり。山の北端に碑あり。「古さとや臍の緒になく年の暮」といふ句を刻せり。碑前一株の芭蕉、霜枯れてものさびしく葉は狭からねど、風雨にやぶられて骨のみいと高く、秋の扇のやうに「バサ〳〵」とそよぎて、碩布が「裏打のしたくなりたる芭蕉かな」とよみけるにもまさりぬべき風情なり。南鵬子、

排句(俳)しらぬわれに吟あり十七字
鵙なきて蕉翁の塚さびれたり

と打吟しつゝ行く。後なる聴磬子もまた、

極楽に芭蕉のそよく音もかな
バサ〳〵と音する方や芭蕉塚

と打誦しつ。鉄城くろがねなす冷かなる心にはあらねど、詩想はなければ只黙するのみ。

山の中らならんか、一基の紀念碑は立てり。

芭蕉塚者松尾右衛門君第二子生于上柘植村。翁没後二百年。松尾氏分為六家。未有標其里。乃相議立石福地伊予守址。刻故郷臍帯句。福地松尾蓋皆出於平宗清氏云。海内助工甚衆。其人亦可伝導。銘曰

翁之風雅。誰伝衣鉢。　爰新附驥。勒名此碣

正八位町井修撰　　柘植有尽謹書

明治廿六年七月建碑

山を下りて、松尾ぬしの後裔宇右衛門氏の宅を問へば、彼の森の中なりといふ。壁落ち柱傾き、住まふ人もあらぬげなり。さきかけしたる安藤ぬし、しまれる戸をうらめしげにながめて一際高く、「頼む〳〵」と呼べどいらへなし。失望の色は皆人の顔にあらはれぬ。おのれも材料の欠乏を歎ける折しも、額には浮世の波数多打寄せ、斑白の髪はおどろ〳〵とかかれる嫗あらはれたり。腰には梓の弓、満月にやはりぬらむ身にはつゞらなす衣をしどけなく着なしたる有様さへ一際目立ちたるに、この一行を打見やりていとわづらはしとおもひ入りたる体に小腰を曲めて「御役人様、わらはゝ一人にて侍るなり。桶もあらひて置き侍り。いざ見たまへかし。いざさせたまへ、裏に桶は洗ひおき侍り。いざ案内仕らむ」とて、歯黒めの白く落ちたる惜気もなく打出して笑へば、安藤の君、不意を打たれていらへにこうせられたるものゝごとく只打守れるのみ。一行も、桶を洗ひぬなどいへる狂女にやあらむ、白痴にやあらむとて、顔見合するのみ。折柄、後の方よりいで来りしは向の主ならむか。今日はいまはしき収税官とやらの検査日なりと

か。昨日区長殿より触廻られぬ。されば御身達をしかおもひてなむ嫗はかくいはれたるといへば、皆人忍びかねて哄と吹きいだしつ。安藤の君、已に失敗したり。中西の師君代りて今度の旅行の梗概をのべ、且古記録やあると問ひたまへば、嫗はいと気の毒げに且は安堵やしけむ。疑やはれけむ。ます〳〵笑を含みて見せまゐらするほどのもの一つも侍らず。これなる家は翁が住まはれし家にて、いと古びて侍れど、昔を忍ぶ形見にとて残し置き侍りしなり。妾は御身達を検査官と誤りぬ。さてはあらざりしかとていたく謝せられぬ。一行もよしなきことにていたく驚かしゝ事を詫びていとまをつげぬ。

嫗は狂女にも白痴にもあらざりけり。今年六十八歳とか、柱傾きたるは形見に残されたるものにて、氏の宅は傍に大なる建物あり。また土蔵などもありて、この近在屈指の家なりとか。農繁の為髪も結ばず、歯ぐろめもせず、粒々辛苦せらるゝまことに感ずべきなり。おのれらも今は実に智識拾得の秋なり。いかで優々自適してこの一大季節を過ごすことを得べき。

四方白の士官帽に小倉羅紗打混ぜての背広金鈕の光いかめしく、廿名の青年が揃ひに揃ひたる扮装、一個の鞄、一個の製図盤、あはれさきには支那人チヤン〳〵と大和地方の童にのゝしられ、第二回の旅行には抜刀隊なりとて誤られて神戸士民の心を強うせし己等は、身に寸鉄を帯びざれど柘植駅にては陸軍測量部隊と誤られ、今また収税官と誤らる。幸か。不幸か。時と場所と服装とは斯のごとき相異の見解を下さゞるにいたりぬ。

皇學舘が母胎に宿りてより、大和魂の練磨、国家的観念の養成、骨成り肉満ちてここに十余年の長日月を経て、秀霊なる神路山の麓、清冽なる五十鈴川の上に漸襁褓を脱却せむとす。文部はおどろき、警視はまもり、僧侶はねめつけ、邪教はをのゝく。豈独この嫗のみならむや。されど虎狼にあらざれば、妄に人を食まず。鷲鷹にあらざれば、妄に無辜をつかまず。敵とする処はなけれど、只わが本領は腐敗せる社会を医するにあるのみ。柔軟なる人間を強硬ならしむるにあるのみ。手術器械はこれ文明の利器。三寸の舌と四寸の筆と八寸の鞋とにあり。憂ふることを止めよ。杞憂を止めよ。皇學舘は実に天下有要の人材を陶冶する処なり。

収税官と誤られたる一行は、あやしみいぶかれる村人に目送せられて茲を去りぬ。柘植川を渡らむとする頃、後より呼ぶものあり。顧みれば近藤・三浦の二君なり。いかにしてといへば、おのれらはよき材料を得つ。見むとおもはゞ返りたまへとすねられて、引返さんとおもへど、既に三・四町もかへらざるべからず。さきなるは已に一・二町も行けり。詮方なく哀願すれば、二君はいふ。

おのれら二人、住職に面して事の由を述べければ、住職この寺の後に墓ありといふ。行きて見れば一基の塚は立てり。桃青庵主芭蕉翁の碑とあり。又寺には翁の自ら作られし陶器の像もありき（これ翁の作られしものにあらず）といふ、されどこの墓はまことの墓にはあらざるべし。そは翁は浪花の花屋にて入寂せられたるを以て江州義仲寺に葬りしは動くまじきことなればなり。こは翁の族が追尊のあまりうつしまつれるものならむ。さるにてもかの坊主は見せまつらむもの一つも侍らずといひしを。かれもまた検査官と誤りて体能く断りしにはあらざりしか。

とかうして楯岡村にいたれば、田面に立てる松の一もと高く聳え幹低く垂れて、鶴や宿れる神や住まへるなどいひしろひつゝ行けば、その下に屋形塚てふ三字ありけり。こは江州の佐々木某の戦死せし処にて、安和元年九月、六世の孫なる大井源大夫守良之建つる処なり。

三浦・安藤・近藤の三君と余とはこの碑文を写したれど、苦むし画おちて弁ずべからざるもの多ければ、中らにして止めぬ。さきなるは十四・五町も行きぬらむに、四人はいまだ屋形塚にあり。遅れながら歩み〳〵て円徳院村に至りて道しるべを鞄より出せば、河合村楊夫多神社は取調ぶべき命をうけたる社なり。おどろきて何処ぞと里人にとへば、今四・五町もとの道にかへり、夫より十四・五町も西に街道にそひて行きたまはゞ山の麓に社あらむ。これ楊夫多神社なりとい

ふ。今まで待ちたまへりし一行の中より「かへらむはいと便なし。日もやがて入りぬべし、行きね〳〵」といふ声きこゆ。云々のあやしきことありやととへば、ありといふ。一行は已に服部川を渡りて佐奈具に向はむとて橋を渡れり。返えせかえせと呼べば、急ぎね〳〵といふ声も已にい□(とカ)幽なり。詮方なければ三浦ぬしと二人は一行をはなれて河合村に向はんとす。四・五町も逆戻りしたる上、更に十四・五町も行かむはいとたはけなり。稲も已に収めあれば、これより三角形の斜辺を取らむは如何にといへば、三浦ぬしもうべなりといふ。溝ふかき所泥ふかくして踝(踝カ)を没する所などありて、急かばまはれてふ諺思ひいでらる。急ぎ〳〵て河合村に着きぬ。村は東北の方、稍田野の横はるもあれど、西南の方は河合山連峯の相抱けるを負ひたり。神田忠雄と門札かけたる家あり。その一際かど立ちたるさま、村長にあらずば社司社掌などならむとて入りて刺を通す。この人すなはちこの社の神職なり。おのれこの度の旅行のあらましと目的とを述べ、この社の井戸につきてとへば、即説明す。三浦ぬしは専質問の労をとられ、余は偏に筆記す。今その要領は、

祭神　素戔嗚尊　高松神と称す

祭日　旧六月十四日なり。先年新暦にせしこともありしかど、今又旧に復せり

井戸　拝殿と鳥居との間にありて通常は一滴の水だになけれど、大抵祭日前十四日頃より湧き初む。神事の水のみならず。日夜絶えざる参詣者はその数一・二万にも上らんか。或はみそぎし、或は清めなどすれど、尽くることなし。深は大概二尺位より深きことなし。斯くして漸次に減して祭日後十四・五日に至れば亦全く涸れて、一滴の水をも見ることと能はず。

清水　湧きいづる清水をば人皆神水といひて、瓶に盛りてこれを遠きに送る。これを貯ふること四・五年に及ぶも決して腐敗することなし。先年警官非常に怪みて、こは必神職等の所業ならむと日夜警戒して検査せられしかど、素より吾人の関する所にあらねば辛労損のくたびれ儲にてやみたり。

古記録　天正の乱に悉烏有に帰したれば一ひらも残れるものなし。

以上は談話の要領なり。おのれらは氏に導かれて社に詣うづ。神さびたる森、神々しき宮居、紫朱渥丹の装はなけれど自壮厳なり。井は社務所を去ること十四・五間位の所にあり。深三間にもあまりなんか。径は二尺余なり。俯してうかゞへば涸れて一滴の水なく只学校生（傍に尋常小学校あり境内をもて運動場とす）の投げ入れたる木片小石などの堆積するを見るのみ。同社は文明五年、兼良公の美濃に下られけるときに、

わたりえぬうき世の浪におほゝれて　河合の橋をふむぞあやふき。

ゆふかけて猶こそきかめ郭公　手向の声のたか松の宮。

とよまれし所にて、高松の宮とはこの楊夫太神社なり。永閑名所記に、

阿拝郡河合里〔社記曰高松宮と申なり〕河合社は素戔嗚尊にましますとあり、又清和天皇紀に、

貞観三年夏四月十日甲寅、授二伊賀国正六位上、高松神従五位下一

とあり。高松宮といへるは高松神を合せ祝れるが故ならむ。

あはれこの神水ははたして如何なる水か。常には乾涸して一滴だになきに、その祭事に用ゐざるべからざるに至りてはじめて湧く。そも〳〵如何なる源因ぞ。神職これを知らず、村民しらず、警官知らず、理学家知らず、知らざるにあらず究めざるなり、究めざるにあらず究むることあたはざるなり。茲に於きて世に常識と学理とを以て究め得べからざるものあり。仏者の所謂不思議にして普通これを神業といふ。疑はむものは行きて試みよ。理学家も哲学家も夏期休業を利用してその因をさぐれ。

神田氏は更に馬場のはづれなる御旅所の前の石窟に案内せらる。歴史の考ふべきものなく、古器物の発掘せられたるものもなければ、如何なる人の塚とも別ち

がたけれど、その内部の構造といひ、石の天然といひ、車塚など、時代を均くせるものならむか。史家は来れ。伊賀国は歴史国なり。古跡をふまざれば真然は得べからず。

鄭重なる取扱と明晰なる説明とは余輩をして一時間を費さしめぬ。氏を辞して径路を辿り、佐奈具村に向はんとす。蓋一行は或は西条村の国府の跡を見、夫より千歳村の六鈴の古鏡をしらべたる上、上野へ向ひしか。或は佐奈具より千歳村に至り上野に向ひしか、何れとも弁へかたし。里程を里人に問へば、今日の中には迚もむつかしかるべしといふ。されば詮方なく千歳村に向はんと談もとゝのひぬ。暫しが程ならば待たれけむものを。あまり遅さにすてられたりけむ。佐奈具村には影だになし。古鏡を服部氏に見むとて至れば、主なる人不在なり。さきなる人々は直に上野に向はれぬといふ。いと甲斐なし。日頃志ざしゝ古鏡は遂に見ることを得ず。一行は既に発せり。いでやこれより駆足もて追着かむとてかけいたす。時に太陽西山に光を収めて暮靄幽に横はれり。この千歳村は古千座村といひし処にて、度会の行量が頓阿を伴ひて、

ちはやふるあまのぬほこもめのまへに　人の手にこそふれる白雲

とよみたる処なりとぞ。

走りに走りて小さき岡一つ越ゆれば田野遠く連りて道垣々たり。遙の彼方を眺むれば、一行は敢国神社に詣でたるものと見えて、今彼方の道を急ぐもの、如し。後れを取りては遺憾なり。おのれらも引返して参拝せむ。さても服部氏に欺かれたるか。たゞしは聞誤りしかなどいひ〳〵いそぐ。

今年十五・六にもなりなむか、身装賤しからぬ一人の童の身に負へるものは何か。いと重げなり。振返りて敢国の社は彼の森なり。この近道をきたまへ、おのれ案内仕らむとて路なき松山に攀つれば、二人は顔見合はせて神の使か。はた曲物か。

こごしき岩根、さかしき坂路を行けば、立田姫の織りなせる錦はうすくこく常盤木のみどりなるに楓のはざまよりあらはれたる一入の見はえあり。行くこと六・七町にして鳥居の前にいでぬ。ぬかつきて社務所に云々の由をのぶれば、一行は今行かれぬといふ。一宮社記恭々しく開き見す。

この社の祭神に至りては先哲已に滔々と論ぜられしものなれば、鈍才のおのれら足らはぬ識もて彼是いふべきにもあらねど、筆の次に聊かきしるさむ。

或書には、

南宮大明神、少彦名御神也

といひ、またある物には、

所レ祭金山比咩也

とあり。また南宮山を小富士と称し、その社を浅間社といふといへり。富士とは其の形を以てし、浅間社とは富士山麓の浅間社によれるものなりとか。斯かる別号は往々後世をして依憑考証する処を失はしむることあれば、心すべきことにこそ。さて金山比咩神と少彦名神との混合の事は既に諸書に弁明せり。伴信友翁は、敢国神社の名称は三代実録によりて敢国ツ神と訓むべしといへり。敢は所謂阿倍にして、記に其兄大毘古命之子建沼川別命阿倍臣等之祖とあり。又垂仁天皇紀にも阿倍臣遠祖武渟川別、又天武紀にも詔下在二伊賀国一紀臣阿閉臣等壬申甲労勲之状上而顕寵賞とあり。又光仁紀にも尾張国中島郡人外正八位上裳咋臣船主言。己等与二伊賀敢臣一仝祖也などありて、その大彦命は四道将軍として東海道に向はれぬ。崇神天皇は大彦命の女御真津売命を娶りて伊賀比咩命を生めりとあり。さればその子孫、大彦命を祭りて社を建て、阿倍国つ神と仰ぎ奉りしにはあらざるか。姓氏録にも左京皇別阿倍朝臣・阿閉臣・名張臣・阿倍志斐連あり。右京皇別にも阿閉臣・伊賀臣・阿閉間人臣ありて山城・河内等にも亦阿閉臣あれども、孰れも大彦命の系統とせり。阿倍氏と伊賀国との関係は既にかくの如し。阿倍氏の祖大彦命を祭りて氏神とせしことも明かなり。その氏神は即敢国神社なり。しかれども祭神少彦命とあるにいたくことなるは如何にといふに、記に大倭根子国玖

琉命云々生御子、大毘古命、次少名日子建猪心命云々とあるより、大彦命の御弟なる少名日子建猪心命を少彦名命と誤りしか。或は御兄弟を合せ祀りたりしに、後世にいたりて御弟君をのみ伝へたりしか。天正の乱にあたり兵火の為に社記等灰燼に帰したるをもて証すべきものなければ疑をかく外詮なし。

日は全く暮れぬ。行くべかりし南宮山も西条村も後日を期して上野に向ひぬ。尋ね〳〵ては八百新てふ宿に至れば一行は已にゆふげの膳に向はんとするところなり。

宿所の有様はことなりたることもなし。只一枚の木葉蒲団を二人引張りて寒きことよと一夜を明かしことのみ。

この夜、佐野度会郡高等小学校長の紹介をもて阿山郡学務課長野村甲子郎氏を訪ねたれど留守なりければ、その旨を通しおき、更に上野天理教会所及耶蘇教会堂に至りぬ。その宗教上に於ける観察は別にかきしるさむ。

伊賀に於ける豪族割拠

本科三年生　安藤　正次

朝廷の紀綱漸弛廃して政令地方に及ばず。文弱に流れたる弊として地方官を卑しめたる結果、国司その任に赴かずして、家人の輩をして代りて之を領せしむるに及び、地方の紊乱また理すべからざるに至りぬ。此に於きて、土人にして其の族の大なるもの各一方に割拠して擅に土地人民を支配し、復政令を奉ぜず。所謂豪族の割拠といふ状態を現出せり。是実にかゝる世に於きて当然の順序たるなり。而してその幾多の豪族、強は弱を合せ大は小を呑み、終には厳然たる封建諸侯の姿を現出するに至る。是亦自然淘汰の法則なり。而してその地勢亦大に之に関係することあり。広袤千里、山岳大河、是が自然の境界をなさゞるときは、其の一帯の地方は終に最大強力者の支配の下に属するに至れども、山岳起伏し河水縦横しておのづから小区画をなせる地にありては、勢分裂して幾多の小豪族の拠る所となるは、蓋勢の免れざる所なり。亜細亜の平原に於けるバビロン　アッシリアの勃興、成吉思汗　タメルランの一統の如きは、前者の好適例と認めうべく、希臘の小邦がその民族の祖を同じくし、その風俗習慣を等しくしつゝ、猶三拾余の小区画に分裂したるは、後者の好適例となしうべし。

伊賀国は実に後者に属す。今其の地勢を按するに、四面皆峨々たる山を環らし、一歩国境を出でむとするにも必嶮山峻岳を越えざれば能はず。是先二百余年の間外敵の併呑を防ぎたる天与の城壁なり。而して国境諸山の余脈蜿蜒として延きて国中に及べるは、即国中に小区画を施したる自然の分界線なり。されば国司の勢力一旦地におちしより国内の諸豪族各一方に拠有し、正慶の頃に至りてはその威益盛になりゆき、宛然として一小封建諸侯の有様を呈しき。而して其の族の大なる者は、服部・柘植氏の如き是なり。今是等の諸族の由来及その占拠せる所を左に略述し、併せてその変遷の大概を示さむとす。

服部氏一族

服部氏は本州に於きて最大なる氏族なりき。佐那具を北端とし、羽根比土を南端とし、東は友生に至り、西は猪田に至る間、阿山郡より名賀郡に亘りて南北凡五里、東西凡二里の地を占領し、天正の乱に没落せしまで連綿として各其の武を輝したる一族なり。今この氏の祖を尋ぬるに、系譜・古文書等の確証とすべきものなきが故に明に知り難し。口碑には種々の説を伝ふれとも、要するに秦酒君の後よりいでたるなるべし。三国地誌是が説をなして曰はく。

按、本国服部の氏族、滋蔓して郡邑に散在す。神別蕃別自異なり。呉服造は蕃別にして、其の子孫猪の爪を紋とす。猪の爪とは機の梭なり。服部連は神別にして、其の子孫矢羽を紋とす。爾来各服部を称してその原因を審にせず。概して平内左衛門が子孫にして平氏の侍より家を起すと云ふものは不思の甚しきなり。応神の御宇、織衽の為に西土より貢するものは皆婦人にして、その種胤をのこすものは之を統率する酒君一人なり。これ本国の服部を領す。其の後女工本朝に輩出するを以ちて、允恭御宇、其の棟梁として服部連を命

ぜらる。是より先、酒君及其の部下の士、皆服部を称し、服部連及其部下、亦皆服部を称するを以ちて、譜系生出各別にして一統系の如く皆服部氏となる。不可不分。

と。記して参考に供す。

河合一族

此の一族は阿山郡河合・友田・波敷野より以北凡二里地方の地に散布せる者なり。然れどもその所出明ならず。伊乱記といへるものには、河合郷に住せる平信兼の末流なりといひ、河合一族の系図といへるものには御道（堂か）関白道成（長か）の後にして、南、田屋、藤田、薗川、平敷の諸氏にわかれたりと伝ふ。然れども其の系図亦うたがはし。何れか是なるを知らず。

柘植氏一族

柘植氏もまた本州の大族にて阿山郡の東北部柘植附近に割拠せり。柘植宗清よりいづといふ。然れどもその先詳ならず。

今その家譜を閲するに、柘植宗清を平宗清となす。乃説をなしていはく。

平氏亡びたる後、頼朝、宗清の嘗て己を救ひたるを徳とし之を招きしかど、辞して応ぜず。伊賀に逃る。頼朝乃安達盛長を遣し、阿拝・山田二郡の内三拾三邑を与ふ。盛長亦宗清にすゝめて室を搆へて居らしむ。宗清因りて戯に柘枝を折り、一枝を地にさしていはく、此の枝蕃茂せば則わが居成らむと。然るに明年果して花を開きしかば、宗清之を奇として和歌をつくる。よりて柘植を氏とす、云々。

と。三国地誌は之が断案を下して曰はく。

然東鑑等書無レ所レ見且考二平氏系図一柘植宗清少納言平信実子而非二季宗子一也。蓋同姓名謬為二一人一也故不レ取

と。その柘植の地名の如きは倭姫命の大神を奉戴して遷行し給ひし間に起れることにて、こゝに記せるが如きは素より俗説採るに足らねど、猶その他の記事は之を遺跡等に徴するに幾分か捨つべからざるものあり。暫記して後考を俟つ。

宗清、三子あり。長子宗俊家をつぐ。次は次郎清春。福地氏の祖なり。次は五郎俊忠、北村氏の祖なり。而して猶この支族として日置、西川、松尾、山川、等の諸氏あれどもその所出を詳にせず。

他の諸族

以上はその著名なるものを挙げたるに過ぎず。此の他、現今の阿山郡に於きては、島ヶ原附近の島ヶ原一族、長田郷の長田一族、本興浅宇田の大辺一族、名賀郡に於きては、神戸上林なる矢具島の一党、予野治田白樫の山間なる予野の一族、名張附近の名張一族、比自岐より阿波附近を占有せる比自岐一族の如き、枚挙に暇あらず。而してその南方国境の地は亦紛々たる小族の拠る所たりしなり。

かく是等の諸族の割拠せし遺趾は今日到る所にみることを得べし。かの天正の乱に信長の軍を導きたる福地伊予守の城趾の如きは実に巌然たる要害の地なり、当時の状態推して知るべし。

山国の人、由来武勇に富めり。而して文学なき武勇は蓋乱逆に畢らむのみ。伊賀の武士の如きも亦然り。幼より山谷を跋渉し野獣と馳駆して筋骨おのづから逞しく武勇に秀でたりしかども、文学行はれず世道人心を維持すべき教なきにより て倫常の重ずべきを知らず。鬱勃たる私慾の念を制裁すること能はざりき。かくの如くにてその為す所暴逆に陥らざらむと欲すとも得べからざるなり。

かゝる輩が郷土を占有し傲然としてその下にのぞみしことなれば、配下の人民こそ実に迷惑のきはみなりけめ。その塗炭の苦を遁れて早く明君の治下に立たむと希望せしはまた人情の常なり。然れども近隣諸州の領主は各中原の事にいそがはしく、且この国を征することの困難なると、この国の小にして領すともさまでの利なく統治に不便ならむとの故によりて、之を顧みるものなかりき。

遡りて南北朝の際をみるに、当時北畠氏の伊勢にありて南朝のおもきかためと

して吉野を掩護せるにあたり、隣国伊賀をも併することは政策上必要なりき。是を以ちて北畠顕能の女婿大舘氏清、武勇の資をもちて紛乱せる伊賀に入り、関岡城に拠り南朝の為に大に力を奮ひたり。而して彼が武勇は元より武を好む豪族の歓心を得、彼が仁政は暴威に苦める人民の歓心を得て、容易に之を統御せり。然れども猶豪族の上に臨みたる壱国主たるに過ぎざりき。かくて氏清の没後はその威大に衰へ、氏隆を経て氏則の世に至り関岡家は遂に亡びぬ。是に於きて国はまた依然たる豪族割拠に復しぬ。

降りて天正の初年に至りては、しのび〳〵に他国に亡命するものあるに至りたれば、神官僧侶等大に之をうれひ、国内の諸族にときて漸その同心を得、仁木友梅を江州より迎へとりて国主と仰ぎぬ。

恰共和政体の有様なりけり。（何故に仁木友梅を迎へしかは考へ得ず）かくて暫は静なりしかど、素おのれ等の擁立したるものなれば、やゝもすれば是を軽んじまたその下知にしたがはず。こゝに上下の軋轢を生じ、友梅はまた国に止ること能はずして逃遁し、国内はまた元の如き状態に復しぬ。

此の後此の国に着眼したるは北畠具教なりき。彼は伊勢志摩を領して多気の御所にあり。理に於きてまさに着眼すべき地位にありしなり。彼は伊賀を攻伐しておのが領地となさむとせしかども、徒に兵革を動かすことの不利なるを暁り、遠慮をめぐらしてひたすら仁恵を施し、人民をしておのれになつかしむべき政策をとりき。然る後、徐に運送の為と称して要害堅固の地を撰び丸山に城を築きて攻伐の便とし、時機をまちて併呑の策を実行せむとせり。此の計策は充分の結果を収むべかりしに北畠氏の滅亡と共に画餅に属しぬ。

次ぎて天正六年の頃、伊勢松ヶ島にありし織田信雄、亦此の計画を継ぎ上比奈知の住人下山甲斐の案内により此の国を領せむとし、先滝川雄利（雅俊とも勝雅とも雄親ともいふ、皆同じ）をして士卒を率ゐて丸山城を築かしむ。然れども此の度はその策略あらはれて、終に豪族の為に国外に撃退せられ、略成功せむとせし丸山城は全く一炬の下に付せられ畢りぬ。此の時にあたり国中の諸族は分裂の時にあらずとなし、各私怨をすてゝ相結合し、評定人拾壱人を撰びてすべて国中の政務をとらしめ、以ちて外敵にあたれり。

かくて信雄は此の敗を聞きて大に怒り、天正七年九月、軍勢を催し、自将として阿波口、鬼瘻越、伊勢地口の三方より侵入したり。されども素より地理にくらく、嶮岨に疲れたる兵のことなれば、国武者の武勇にきり立てられて、終に敗をとりぬ。信雄憤懣せしかども止むことを得ず。軍を還し時機を伺ひたり。その翌天正八年に至り、織田信長の大軍と合してこれを討つ。この時国内の諸族多くは滅亡に帰しぬ。

信長の軍は、上柘植の人福地伊予守・耳須弥次郎等を嚮導として織田信雄・織田信澄・丹羽長秀・筒井順慶・堀秀政等の諸将凡四万余の兵を率ゐて伊勢地口、柘植口、玉滝口、笠間越、長谷口、多羅尾口の六方より侵入せるなりけり。是より先、柘植氏の一族柘植宗能、その弟清広と共に三河国に至り、徳川家康に謁し説きて曰はく。伊賀の兵士等皆織田氏に叛き、その国を挙げて君に属せむことを希へり。願はくは書をたまへと。蓋徳川氏の軍を請ひて信長にあたらむとせしものゝ如し。然れどもきかれざりき。家康はきかざりしのみならず信長にしたがへとの勧告をあたへたりといふ。されど国人はあくまでも信長に従ふを肯せず。終に各所の神社仏閣の要害の地又は各自の居城に拠り、滅亡を期してぞたゝかひける。されど元より烏合の勢なれば脆くもうちやぶられ、島ヶ原の一族の織田氏の軍に降りてその族を全くし得たる外、国内の諸族大方離散してまた昔時の有様を見ざるに至りぬ。乱平らぎて後、織田氏は滝川雄利をして之を治めしめ、つぎて脇坂安治に与へて治めしむ。爾来国内静謐に帰し、復豪族の威を振ふものなく、所謂豪族割拠時代はこゝにその終結を告げたるなり。

因にいはむ。今日伊賀の国、到る所の神社仏閣、一も古記・古物の存するものなく、一も昔ながらに存在せるものなきは、実にこの乱によりてなり。

当時の軍は一国一城の戦にあらず。村落里閭の戦にして、信長の軍至りし時、国中の諸族は至る所の神社仏閣に倚り、到る所の要害に堡寨をかまへて之にあたりしかば、信長勢は勢所在を焼きて之に対せざるを得ざりしなり。まして先年の敗をとりし怨あるをや。こゝをもちてその神社仏閣はすべて兵燹を蒙り、その村落民家は皆蹂躙せられたりしなり。

おのれ才鈍く識低く、加ふるに参考書の乏きがゆゑに、得る所僅に此の如きのみ。初思の拾の壱をも達し得ず。他日を須ちて将に補正せむ。

丙申十一月、風冷かに霜白き頃、寄宿舎南窓の下に於きて之をしるす。

松尾芭蕉翁

本科三年生　大塚　運象

平氏にあらざるものは人にあらずとまで誇唱せし平家の一族も、槿花一朝の栄にことならず。翁がいはゆる「道ばたの木槿は馬にくはれけり」といはれけむやうに、源氏の光にけおされて、清盛は暴死し、敦盛は一の谷一碗の蕎麦となり、知盛は壇の浦一介の蟹となりて、空しく残りしは弥平兵衛宗清のみ。

勝ちほこりたる源氏は、隈なく遺類をきりはふらむと求めけるに、厳島明神の加護や厚かりけむ。宗清の武運や強かりけむ。遂に年頃領せし柘植庄に隠れ潜みて僅に露の命を繋ぐことを得たり。頼朝もまた深く責めざりしは、宗清に救はれしことを徳とせしにやあらむ。その後六代を経て、清正といふ人に数多の子ありき。山川・勝島・西川・松尾・北川なんどゝ名乗りて代々此の庄に住みけり。その松尾の子孫に与左衛門といふ人ありけり。この人はじめて上野の亦坂に住みけり。これすなはち翁の父なり。母は伊予の産といへれど姓氏も詳かならず。

その嫡男は儀左衛門命清といふ。後に半左衛門と改めたり。二男半七郎宗房は通称を甚七郎といひ、童名を金作といへり。これ即翁にして、後改めて忠右衛門といひきとぞ。翁の名は世間伝ふる所一ならず。杉風秘記抜書には甚四郎といひ、綾錦自悞文集には藤七郎といひ、高野山報恩院過去帳には忠右衛門といひ、十論為弁抄には金作といひ、或は甚太郎といひ或は半七などいへり。猶この外にも多かり。されど古今墨蹟鑑定便覧には、桃青、名は宗房、幼名金作、後甚七郎と改むといひ、本朝文選には、芭蕉翁者伊賀之人也、武名松尾甚七郎、奉仕藤堂家とあれど、金作、甚七郎といふはたしかなる名なる名にて、幾種の名は類字類音にて誤写或は誤伝せしものにはあらざるか。茲に聊疑を存す。（芭蕉正伝には、翁は其第三子にて正保元年の生なりといへり）。他の諸書概第二子と記せり。孰れか信なるを知らず、翁は実に正保元年を以て上野に生る。桃青はその号なり。類聚名物考には

芭蕉　はせを　伊賀国の産なり。その国に桃池党あり。翁は初は桃井を名のられたり。太平記の頃に見えし舞の家なりとぞ。故有て後に松尾となられしが、後に桃井の昔を忘れずして桃青と号せしとなり。

といひ、また黒露は、

桃青の名は、昔京都儒医に桐山正哲といふものありしが、それへ桃の字を名付たまへと翁の頼まれしかば、詩経の姚夭の篇より桃青と名付けたるとかや。

といひ、また、

本所原底桃青の近傍に寓居せしかば、その俳名をあらためて夭々軒桃青といへり。

といへり。その出処は定かならねど、またふかく探らむ必要もなかるべし。承応元年、翁は九歳を以て伊賀上野の城主藤堂新七郎の臣となり。明暦の頃、新七郎良精の嫡子良忠に仕へられぬ。良忠は蝉吟と号しき。弓馬の業の暇には詩歌管絃の道をまなび、また好みて俳諧を玩はれて時の宗匠北村季吟翁に教を受けられぬ。されば翁もともに随ひて俳諧を学ばれきといふ。

寛文六年、秋風もやう〳〵稲葉を渡る七月半の夜半ばかりに、無常の風は其の主を帰らぬ旅にさそひいだせり。翁が忠実に仕へし主、且は共に教を受けし同窓の友は、翁をのこしてかへらぬ旅にいでられぬ。翁の悲いかばかりなりけむ。

生とし生けるもの、何かは死なからむ。誕生の祝は鳥部山の烟、母胎をいづるは墳墓に入る階梯なりと誰しも知れる所なれど、生を亨けたるもの誰かは死を冀はむ。只夫れ生きむと思ふが故に草根木皮をもなめ、名利の慾に命を賭し、瞋恚の炎をもやし、或は富貴を百年につゞけむと欲し、或は槿花一朝の栄を知らずして名聞の街に狂奔し、或は嘲罵をさけむが為に爵位を無功にあたへ、一寸距たれば闇の世の中と知らずして三千の宮女を身辺に翳せしもあり。彼等は殊に知らず、三寸息絶ゆれば身は己におのが有にあらず、霊魂遠く去りて骸骨空して留り、四肢腐りて復土となることを。人もしおもひて茲に至らば、誰か厭世観を抱かざるものあらむ。翁は実に主の死に臨みてこの無常を観し、人生は一介の蜉蝣たることを悟りたりけむ。且は哀別離苦の情にたへずやありけむ。遂にその主の遺骨を負ひて高野山に登り、報恩院に納めて帰られき。これ実にその年の末つかたなりとぞ。

一旦きざせる無常観は翁を其極点に達せしめつ。されど文武の達人なれば、遁世のこと容易に許されず。さればとて俗事に鞅掌して塵埃の中に一生を送らむも実に堪へがたし。翁の心は既に清浄無垢となれり。今は詐偽と煩脳とをもて充されたる塵俗界にはしばらくも止ることあたはず。遂に宿直の夕城塀をこえ、隣にすめる城孫太夫が門の柱に、

雲とへだつ友かや雁の生別

の一句を押して、真如の月に無明の闇をてらし、法の嵐に煩脳の塵を払はんとて、再高野山に入りにけり。これ翁が廿三歳の血気充満せる頃なりき。未だ浮世の波に漂ひて辛酸苦難を嘗めず、現世は果して苦か楽かをも究めずしてこの志を起せるこそあやしけれ。これ翁の経歴の第一段落なり。

翁はその後如何なる事をなし、か。詳かならず。或は読経三昧に日を送りしか。或は俳諧修練に六・七年の長日月を費やししか。寛文拾三年秋もやう〳〵たけて、雁の一つら二つら鳴き初むる頃、一箇の破れたる笈とたより細き一本の杖とをたづさへ、浄境を見捨て、紅塵雑閙たる江戸に遊びぬ。

塵俗を厭ひし翁が俄かに俗界に出でられしは何の為か。家康が政略的に謀りし文化の隆盛は垢極盛に達し、千代田の城より吹き来る華奢の風は物の哀も知らざる無骨もの、心を蕩かし、腰によこたふる大刀は人に誇らむ飾太刀、伊達に鍬めたる金銀の鞘小尻の外、寄らばきらむと大路練り行く武士もなく、天正・慶長の風は見む術もなし。只見る艶卑靡猥の姿。彼の談林の宗匠たる宗因は、難波江のよしあし草に身をまかせ、談林の旗旆あざやかに翻へしつ。されば翁の江戸に入られしはこの宗因と対抗せむ志なりしか。或は廟堂の上に立ちて、くさりにくさし濁りに濁りたるを救はん志なりしか。世の伝ふる所によれば、或は水道の官吏となれりといひ、或は普請奉行となりて其功ををへずして薙髪せりといひ、或は官金を使用して遁れたりといふ。世説は信ずるに足らねど、主の死を悲みて高野山に墨染の衣をまとひし無常観はいかに消えさりしか。俗事に鞅掌せむとの志は如何にして萌ししか。嗚呼、翁は一たび浄境に入りて、また俗界に出でられたり。これ実に翁が経歴の第二段落なるべし。

翁、江戸に止ること九年の久しきに及びたり。門弟非常に進み、延宝八年（三拾七歳）には門弟独吟廿歌仙といふさへいでぬ。廿歌仙とは杉風・卜尺・巖泉・一山・緑系子・仙松・卜宅・白豚・杉化・木鶏・嵐蘭・揚水之・嵐亭・螺舎・巖翁・嵐窓・嵐竹・北鯤・岡松・吟桃らなり。この書、一時大にもてはやされき。

これよりさき、翁は駿河台の芭蕉庵に舎りて山口素堂等と江戸三百韻を合吟し、大に天下の耳目を驚したりき。翁の名声を頓に斯流に噴々し門弟は大に進めり。さるを翁は何故にか。天和元年といふに深川の六間堀に移れり。市中の紅塵を避けてか。生業のたつき立たざりしが為か。「紫の戸に茶を木葉かく嵐かな」と吟せられしを当時のものとすれば、翁は慥に貧困に陥られしならむ。

陶潜は五斗米の為に腰をまげすして高逸なる菊を愛し、屈原は放たれて欝を幽芳なる蘭にやり、菅公大宰帥に貶せられてます〳〵皎々たる梅花を愛せり。この

三子が好む所はその懐抱の異る処なり。門弟は芭蕉一株を樹ゑて翁の志をなぐさめむとせり。翁はこれによりて憂悶をまぬがれたり。されど天は翁に天真の快楽の外一物をも恵まざるにや。やうやく露を凌ぎし茅屋も一炬の為に焦土となりて、残れるものは只灰燼のみ。翁は再無常を観したり。功名心を擲ちたり。家あればこそ火もおそろしけれ。金あればこそ盗防ぐ心つかひもすなれ。天地至る処何くか家にあらざる。何ぞ心をいため志を困しめて徒に二間四方の破れ屋にこの六尺の身を置かむ。死なばもとの土ならむを、何故に形骸を外にして心を宇宙に放たざるとは翁の常時の心なりけむ。されば翁は一節の杖に命を托し、八寸の鞋にあしを任せ、六拾余州を順歴して天然を歌ひし西行を敬慕し、遂に一蓋の菅笠に雨露を凌ぐことゝはなれり。これ翁の再悟道せし時なり。蓋翁の経歴第三段落ならむか。

「西行の庵もあらむ芝の奥」翁は実に西行を慕ひて天下を行脚せんとていでたゝれぬ。翁を死より救ひしものは実に死せる西行なりき。貞享元年、翁は四拾一歳、秋風蕭々露滴々たる時、五拾三駅を行脚して故山に帰られぬ。間もなく木曽をすぎ、甲斐に行き六祖五平が家に宿らる。門人其角翁を江戸に招き、再深川の焼原に庵を結ばせたり。門人大に喜び又芭蕉数株を植ゑて翁の心を慰めつ。

芭蕉

野分してたらひに雨を聴く夜かな

夏衣はまだ虱を取りつくさず

これ翁が帰庵後門弟等と悞楽の折よまれしものにして、自も芭蕉と名乗られし初なりけり。

元禄元年、大神に詣でむとて、伊勢の白子に来て、

橙や伊勢の白子の店ざらし

と吟じ、むかし西行の庵結ひし西行谷にいたりて、

芋洗ふ女西行ならば歌詠まむ

と詠じ、朝熊の嶽に妻こふる鹿の音をきゝては、

びいとなく尻声悲し夜の鹿

とよみて仝情をあらわし、芳野・南都に行きてあれはてたる陵の前に一掬の涙をそゝぎ、須磨・明石の寒月をながめてさすらへたまひし源氏の君をおもひ、更に木曽より江戸に入りたり。四拾六歳の時、日光・白川を経て松嶋の幽邃を見舞ひ、高館に上りて感懐の情にたへずやありけむ。すなはち、

夏草や兵どもが夢のあと

と賦せられたり。夫より北越をへて伊賀にかへり、五拾一年夏、深川の草庵を出で、京師・近江の間を往来し、山水明媚の境に俯仰して、九月、木津川より扁舟に乗り大阪に至られたり。翁が第四段落はまさに来らむとし、翁が一生は茲に終らむとす。無常を観したる翁の眼下には無常の風まさに起らむとす。行脚の半ばいまだ為終へずして、茲に頻迦陵仙の域に至らんとす。あはれ人生は朝露の如く蜉蝣の如きか。芭蕉翁絵詞伝に、翁の入寂の有様を記して、

三十日の夜より泄病といふ夜にいとつよくなやみたまひつゝ、物のたまふ力なく、手足こほれるごとくなりたまふと聞より、去来太刀もとりあへず馳くだり、大津よりは木節薬嚢を肘にかけて徒より来つと、丈草をはじめ正秀・乙洲が輩まで聞にしたがひて難波に下り、病の床にいたりつかへ奉る。もとより心神のわづらひなければ、不浄をはばかりて人を近くも招きたまはず。十月五日の朝より南の御堂の前静なる所にうつしまゐらす。八日の夜ふけて、かたはらに居ける呑舟と云ふをしてこを召して硯に墨する音のしけるをいかならむと人々いぶかりおもふに

旅に病て夢は枯野をかけめぐる

夢心ともせばやとなむ。是さへ此世の妄執ながら、風雅の道に死せむ身の道を切におもふなり。九月拾日、ことにくるしげなるに、拾日の暮よりその身ほとをりて常にあらず。いよ〳〵たのみすくなく、人々心ならず思ふ。夜に

入りて去来を召してやゝ物語あり。みづから一通の文したゝめたまふ。兄の許へ送らるなるべし。その頃其角は人と伴ひて、紀の路まで上りし道、さるべき契ありてや此の地にかくなやみおはすと聞きて胸さわぎよく尋ねまゐりて病床をうかがひ、ちからなき声をきゝて言葉をかはせりとぞ。拾壱日夜、木節を召してのたまひけるは、わが往生も明暮にせまりぬとぞおぼゆる。もとより水宿雲棲の身のこの薬かのくすりとてはかなく求むべからず。願くは老人の薬をもて唇をぬらしさふらはんとふかくたのみおきて、のちは右左の人をしりぞけて不浄の身を浴し、香を焚て安臥し、ものいひたまはず。拾二日申の刻ばかりに、ねぶれるを期として死顔うるはしく笑を含みたまふ。行年五拾壱歳なり云々

とあり。あはれ翁はいまだ五拾路をこゆといふにもあらぬに、はやく黄泉におもむかれたり。天何ぞ此の人に年を仮さゞる。もし翁をして寿長からしめば、翁はたゞに俳諧の一芸に止らず、当時の文学界に目醒ましき一大打撃を与へたりしならむ。さるをにくむべき二竪は翁の前後に翁なき翁を奪へり。誰か一掬の涙をそゝがざるものあらむ。独翁の為のみならず。寧元禄文学の為に惜まざるべからず。をのれ今茲に聊翁の吟詠の二、三を摘録せむ。

夏草やつはものどもが夢のあと

何ぞ勇壮にして且豪宕なる。万葉以下実朝に於きてこれを見ることを得むか。実朝は、

武士が矢なみつくらふこての上に　あられたばしる那須の篠原

と詠せり。彼は三拾にして斃れ、此は五拾にして二竪に犯さる。文学界の為此の種の人の早世は深く惜むべきなり。

その悲壮なるものは、

塚もうごけ我が泣く声は秋の風

猪も共に吹かるゝ野分かな

あはれ翁は平民文学の鼻祖として嘖々せられしもの。而して門弟子の多き六拾余州に蔓れとも壱人として翁の後を継くべきものなし。蓼太といひ其角といひ去来といひ、或点に於きてこそ優れたらめ、壮勇大の点に於きては遙に壱歩をゆづれり。換言すれば形に於きては或は翁の上に出でたるものなきにしもあらねど、その想に於きては月鼈の差あり。翁以後その陋醜よむにたへざるものあるは、平豪民文学に於きて想の低さその因たらずはあらず。

翁嘗て歌ひけらく、

青くてもあるべきものを唐辛子

青くてもあるべきおのれよしなきことかきしるして翁の経歴をけがしつ。翁の地下ににらまへられむことをこれおそる。

七日（上）

本科二年生　檜垣　恒之

午前八時いでたつ、今日はこたびの旅行の主眼たる鳳凰寺村の古墳を尋ねむつもりなれば、人々われこそ千古の発見をなしてめざましき考証をかきいでめと搆へたるもをかし。上野町をすぎて中瀬村にいづ。大字を荒木といふ。こゝに式内須智荒木神社あり。傍にいと大なる灯籠たてり、裏面に天保十亥年云々と刻せり。石階を上りて絵馬堂あり。次に拝殿あり。こゝよりをろがみまつる。額面に式内須智荒木神社岡吉胤敬書と見えたり。祭神は猿田彦命にて武内宿禰・葛城襲津彦をも配祀せり。また白鬚明神ともいふとぞ。誌に曰ふ。

社域七百六十坪。祭は五月五日・十月二十九日。創建年月詳ならず。末社三座。氏子百三十戸なり。本社は旧藩主藤堂氏の時より国中旱魃或は疫病の災害あるときは州中の大社五を撰びこれに祈願参詣する例あり。此の社は即其の五社の一にして今に之を通称して五社参といふ。毎年正・五・九の三月は州中の人民之に詣づる者甚多し。

と。又伊水温故には、従五位下伊賀守藤原仲教新に造立のよし云伝へたりと記せ

り。又同書に、著聞集第一の文をひきて、

伊賀荒木白鬚明神の相殿にまします。葛城襲津彦は武内の御子なり。いみじき武士にてありけるを、此の相殿に定られけるに、後三条院御位にましませし時、鹿の皮にて拵へたる革袴をあまた夢中に此の神さづけ給ひしに、御獵の時に鷹部の者をめされてきせしめられければ、其のわざよかりしより、其の拵の如く荒木の里人にこしらへさせられ、終にみつきとなりしなり。それより伊賀袴とて今に御獵に用ゐらるゝ事なり。是も帝の位のふかきゆえとぞ。

とあり。いやちこなる御社といふべし。こゝを出づれば道の辺に一小祠あり。里人荒木又右衛門の念珠仏なりといへど如何あらむ。

そもこの村はかの人口を膾げせる荒木又右衛門吉村の郷里なり。又右衛門、本姓は菊山氏。人となり膂力衆にすぐ、剣道を柳生但馬守・宮本無三四等に学びて其の奥義を極め、殆諸流の剣法に通ず。郡山城主本田甲斐守、めして剣術の師範役となす。身一村の農よりいでゝ諸侯の師範役に任ぜられ、其の名天下に喧伝せられたるは、武術の非凡なりしによることもとよりなれども、亦其の性行の美なりしによらざるべからず。妻の弟渡辺数馬の復讎にいづるに当り、又右衛門義として傍観するに忍びず。仕を辞して相携へて諸国を周流す。寛永十一年、数馬がその仇敵河合又五郎を上野城下に殪す事を得たるは、実に又右衛門の助力ありしによれり。

其の義といふ一字を重んじて食禄を見ること恰も塵芥の如くなりしは、真に武人たるに恥ぢざるなり。これより又右衛門の武名はいよ〳〵世に輝きて、今に至る迄三歳の童児も猶能く之を知る。又右衛門の行まことにしたふべし。

こゝに又右衛門の塚ありといへどゆき見ず。服部川にそひて漸上り行けば、道もせに咲ける千草の花に露のおきそひたるもあはれなり。見下せばさま〴〵なる石流に横はり、水之に激して浪の花をさかせたるに、対岸の山には巨岩聳え立ちて紅葉のこれを覆へるがもとを樵夫の行きかふなど、寔に一幅の好画題なり。進むに従ひていよ〳〵佳境に入らむと思ふに惜むべし。此絶景は既に尽きむとするにや。やう〳〵怪岩奇石もなく、水は平に流れて又趣なくなりぬ。彼方に渡りて川に沿ひて進む程に、早くも山田村大字平田につきぬ。郷社植木神社の傍に平田尋常小学校あり。こゝにて暫休憩す。校長木下豊三郎氏は吾等を校内の樓上に請じて茶菓など饗し、いとねもごろに待遇せられたり。聞く、この校は嘗て文部省三等賞励品を受けたりと。校長其の人の薫陶宜しきを得たるによるなるべし。時午に近きを以ちて、わりごをひらきぬ。こゝに後発の両助教授も来あひ玉へり。これより鳳凰寺村に行くに付きては地理の疑はしき所もあれば、これを質しなどして頗る時を移したり。かくては授業の妨にもやとて、辞していでぬ。校長自中途まで案内せられたり。余らは深く其の懇切を謝す。

七日（中）

鳳凰寺村古墳発掘物を見る

本科一年生　山中　栄太郎

休憩の後、平田尋常小学校を出しは正午を過ぎし頃なりき。同校職員諸氏が我等の一行を遇して懇切なること、云はむにも言葉なく、記さんにも文字なし。校長木下氏を始め平田神社々司和田氏の案内によりて鳳凰寺村区長森口氏の家に到りぬ。其の間四、五町もやありけむ。田舎には稀なる構造なり。案内せらるゝまゝに前門をいれば左右に小池を廻しあたりに花の頃ゆかしき草木を植ゑたり、さる程に当所有志総代の諸氏三、四人集り来て、余等の一行を待遇す。通り玉へなど進められければ、草鞋ぬぎすて座敷に上りぬ。折しも旧塚より掘出せりといふ器物は美しき辛櫃に納めたるまゝ此処に持ち出されぬ。

此は鳴塚より出し物なりと指さゝれければ、立ち寄り見るに、

霊鏡　二個　　管玉　七個　　勾玉　二個（白紫）
花餅に似たる物（大小）　二個　　忌瓮　壱個　　盃めきたる物　二個
高抔　壱個　　短刃錆身（大小）　二本　　土器蓋附　二個

等なり。

此の鳴塚は本村の東方字生賀といふ所にありて、独立の一小丘なり。又此の器物は近世に至りて暴風雨の為に崩壞したる節、其の内より取り出し、物なりといふ。曩に此の器物及び口碑によりて考証したる某氏の言によれば、此は天智帝の侍女伊賀采女宅子姫の陵墓にして、共に弘文帝を葬り奉りし処なりといふ。されど確証とすべき書類なければ、実否は容易に判定しがたからむ。後日動きなき考証の出づるを待たむより外なし。稍ありて此は経塚より出し物なると示さるゝを見るに、

高抔　一個　　瓦欠　二個　　轡　二個　　鍬先　壱個
輪鐙　二個　　花鉼　壱個　　鋒先　参個　　矢鏃　数本
盃　壱個　　土器蓋附皿　壱個　　大刀鋙身大小　七本
仝土柄　壱本

等なり。

此の経塚は本村の東北隅字轟といふ処、経ヶ峯の山腹にあり。即此の器物は此処より出し物なりと云ふ。曩に鳴塚を考証したる某氏の言に、此は天智帝の皇女阿雅皇女の陵墓なりと考証したる由云へど、それもたしかならず。今、三国地誌に記する処を見るに、

経塚ハ按ズルニ鳳凰寺村ニアリ。里俗是レヲ天智帝ノ御陵ト云フ。其ノ兆境甚ダ帝陵ニ似ズ。本邑宅子姫ノ事蹟アルヲ以テ若シ天智帝ノ薦福ノ為仏経ヲ此処ニ納ムルヲ以口碑トナルカ。

とあり。されど此も亦確証あらざれば後考をまつこと、せむ。其の発掘したる短刀・大刀の如きは金属に属するを以て錆を来し、或は三段或は四段に打ち折れたり。鞘のま、納めたるならむと思はる、物に至りては、殆ど其の鞘身の判別すら付き難き物ありて、僅に其の面影を存せるのみ。其の全体を見るべき物は実に数品にすぎず。此を扱ふごとに其の部分多少破損すといへり。是に反して管玉及び勾玉の如きに至りては、いさ、かも変形したる処を見ず。其の光沢の華麗なること貴人装飾に用ゐたりし物なること疑ふべからず。又土器に至りては、或は破れ或は缺け、其の全体を残せる物とては僅に二、三に過ぎず。其の焼方に至りては、実に固有の窯法を用ゐて近世器物の比にあらず。よりて思ふに、我が国美術の稍進みて質素と堅固とを旨とせし中古時代の物ならむ。中にも忌瓮の如きは、一きは実用を旨とせし物にて今に其の形を変ぜず。又古鏡は、一は三寸計なる正方形にて、一は直径三寸五分計なる円形の物なり。こはいづれも錆を生じて少しも光輝を放たず。思ふに此の二鏡は藤原時代の前後に造られたる物の如し。裏面に彫刻などしたるを見れば、美術の進みたる時代の作にやあらむ。要するに是等の器物は皆中古以前の物にあらず、中古以来の物たること疑ふべからず。斯る数ならぬ愚考を加ふるはをこがましかれど、いさ、か思ふがま、を記したるなり。斯くて一通りを見終へたるに、午后第二時も過ぎたりけむ。其の塚の現場に案内を請はむと思ふ折しも、森口氏より酒肴など種々取り出でいたく進めらる。其の外茶菓を饗し菓物を分つなど、注意いとよく行きとゞきたり。いざ現場にとて有志総代を始め木下・和田両氏の案内にて森口氏の門を出づ。時に時針は午后第三時を示せり。抑も鳳凰寺村は往古竹原村といひ、又は城内村ともいひきとぞ。元本村に一の大迦藍あり。鳳凰寺と称せり。又一社あり。大友皇子の霊を祭りて愛子権現と斎き奉れり。歴代崇敬の処なりき。然るに屢々の変を経て、天正九年に至り、北畠信雄の兵乱に罹り、社寺とも残りなく焼失せり。故に里人相計りて一宇の草庵を建て、燃余の薬師如来を安置して、寺号を薬師寺と改称したり。然れども村民は旧鳳凰寺の域内に住居す。よりて村号の竹原を改めて鳳凰村と称したりと云ひ伝へたり。又本村の古伝に、中臣の鎌足公此里に暫時住み給ひきと云へり。此の故にや、現今中臣垣内・藤原垣内及淡海公山・宇合・耳面刀自などの地名存せりといへり。且中臣氏の子孫中古迄残りしこと衆人の知る所なり。又本村には当郡司の住みし所と伝へて西城と称する旧堡を存せり。此は御所の内とて大友皇子

の住み給ひし所なりともいへり。又東城と称する城趾あり。又十市屋敷或は親王屋敷など云ひ伝へて前山城といふ所あり。或は葛野屋敷・与多屋敷と称する地処もあり。又経ヶ峯陵山の巽位の麓に大友皇子の霊を祭りたりといふ無格社愛子神社あり。又本村の婦女子は更なり、他村に縁付きたる婦女子も往古より決して難産を患へしものなしと云ひ伝へたり。されば近郷の婦女子、出産に苦む者は、縁を求めて本村に来り、出産するに安らかなること不思議といふも余りありといふ。既に国中の人の熟知する所なり。是即本村は往古后及皇子皇女の住み給ひし所なれば、今に至りて冥護を垂れさせ給ふなりとぞ。斯る理由もあるべきものにや。

又、接するに天武天皇の御学に白鳳の年号ありしは本村より白鳳の祥瑞を出したるに由るといへり。志料通信叢誌の載する所を見るに曰はく、

按、年号祥瑞ニ由ルモノ、白雉・朱鳥・慶雲・霊亀ノ類、皆国史実録ニ載セズ。竊ニ惟、壬申ノ乱兵ヲ挙ルノ始、黒雲ノ祥ヲ見ルモノハ本国ノ横川ニシテ当時駐驛ノ地処々ニ伝フ。是時尚伊勢ノ分内ナリ。而シテ山田郡鳳凰寺村古名竹原郷ト云フ。此ノ地白鳳ヲ出ズト云ヘドモ分争ノ世国瑞ヲ奏スルノ時ニアラズ。史ノ文ヲ欠クコト宜ナルカ。定鼎ノ後九年ニ至テ勢賀分割ノ時白鳳ノ出ズルハ西賀ノ地ナル以テ爾後冠辞トシテ此国ヲ称スルナルベシ。鳳ノ訓止里ニシテ戦功ノタツ是国ニ始リ時ニ此ノ瑞アルヲ以テ紀元トナレルナルベシ。

とあり。此を思ふに伊賀に白鳥といふ冠辞を用うるも亦本村より始りしものならむ。

七日（下）

本科三年生　松本　昌三

鳳凰寺の古墳を吊ふ

今回旅行の大目的は実に此の古墳取調に在り。疑問は弘文天皇の山陵が或は此の古墳の内に在らずやと言に有るなり。寡聞浅学の吾等、元より判断の力は無けれども、やゝ其の自の疑を闡き得ば足らむのみ。村に一老翁有り。歳七旬余。能く古伝を知れり。吾等を導きて鳴塚より経塚に到る。岡塚は道遠くして到る事能はざりき。共に村を去る事四、五町なり。鳴塚の大さ東西二十間、周囲五十八間、高三間ばかりなり。形は東西に流れて南面す。老松雑木甚しく繁れり。口碑、一に車塚といふは、前方後円の状恰牛車に似たればなるべし。周囲の湟、今は埋没して田畑となせり。然れども尚その形は残りぬ。経塚、一に陵山といふ。南面の坂路より登る。東西四十間、南北凡二十五間。廻らすに湟を以ちてす。中央に一小塚あり。蓋是墓趾ならむか。古松老杉翁欝として天を覆へり。先に観し森口藤七氏が蔵せる古器物は此の雨塚より発掘したるものなりといふ。抑是何人の墳墓なるか。其の何れかは或は弘文天皇の山陵には有らじか。時の歴史、時の風俗、特に時の皇室、其の地理、其の発掘物は之を如何に説明するか。

故御巫清直先生、曾て此の古墳を訪ひて考証せられたるもの有り。議論頗詳細、不肖の吾等又曰ふべき処なし。先生の言ふ処は鳴塚を以ちて弘文天皇の山陵と断定し、経塚を以ちて母后宅子姫の山陵とせられたり。吾亦必私に其の然ならざるかを疑ひしに、今全く先生の説と相合一する悦を得たり。此に先生の考証を借らむ。

陵墓考証

伊賀国山田郡鳳凰寺村の管地に陵墓の大なるもの三堆あり。又所管成塚山の林中に百有余の墳墓有りて、各千歳の旧制を具せりと言へり。今其の三大塚を考証して臆量説を述べむとす

一経塚。　一に陵山と称す。

経が峯の山腹に在りて南面の坂路より登り到（脱字）る。東西凡四十間・南北凡二十五間・廻りに湟有り。中央に一小塚有り。后の墓と言ふ。古来例年五月廿六日に里民陵祭と称して酒饌を供し祭事を営む。旱魃の年は此の塚に雨を祈請す。其の報賽は七月廿三日を式日として村民等踊を興行する例なり。其の踊を鳥飛山踊と唱ふ。されば伊賀国風土記に、鳥飛山、此山甚賤而又其形奇、昔大友皇子来二此山一暫休之、刀鋒（鉾カ）多残置給、今国俗謂鉾岡者此其縁之本也と載る、鳥飛

山は此山の旧名なるを以ちて今も踊の名に唱ふるにや有らむ。
三国地誌云、経塚、按鳳凰寺村に有り。里俗是を天智帝の陵と云。其兆域甚帝陵に似ず。本邑宅子姫の事蹟有るを以てもし天智帝の薦福の為仏経をこゝに納るを以て口碑となるか。と注せれど、宝暦十年六月本村旧跡字取調書に、経塚、天智天皇の皇子・皇女之御陵之由申伝候へ共、伝説不分明に御座候と載たれば、天智帝の御陵と村民は伝へず其帝の皇子・皇女の御墓或は后の墓とも称し来れるを伝聞に誤れるなり。
風土記に、昔大友皇子来二此山一暫休之と有る地は、三国地誌云、大友王城准后。伊賀記曰、城村の内山田郡に有り。大友御在城之所也。城村権現、大友を祭る所也。按に鳳凰寺村に有り。西東に城墟有り。其上に経塚山有り。其の山の梺を呼びて轟といふ。是至尊の御車の通し処なりと載たる地を謂ふならむ。宝暦十年旧跡字取調書に、御所の内東城西城の名を記す。其の東城は四面に土塁有り。東西凡二十五間。南北凡二十間にて南面に入口有りと謂へり。又城村権現と言は今経塚山の巽の尾に愛子神社と唱て大友皇子の神霊を祭ると言ふ有り。是を謂ふなるか。其社地東西十三間・南北三間、南面の小祠なり。七月廿三日に祭祀を行へり。
陽月斎永閑伊賀名所記に所引の信西国分に言はく。山田郡に御所の内とて大なるかまへ侍る。こゝは昔此の国より采女を奉まつりける。此国の郡司の娘なりけるに宅子姫といふ有り。天智帝につかへ奉りて御子三かたおはします。一かたは大友皇子、一かたは阿閉皇子、一かたは阿雅の皇子とぞ申しける。伊賀采女といひしも此事なり。郡司程なく徳つきて後にはいみじき長者のやうになりて此国には子孫も猶すえ々々までも侍るといふと引載す。其の御所の大なるかまへと称するは経塚の西に在る西城と唱ふる土塁是なり。然して采女宅子三皇子を生すといふ事疑ふべし。日本書紀天智天皇巻に、又有二伊賀采女宅子一、生二伊賀皇子一、復字曰二大友皇子一、又歴代編年集成に、天智天皇皇子大友皇子、母宅子娘、浄御原御宇謀及(反)見誅、又本朝皇胤紹運録にも、大友皇子、本名伊賀、母宅子娘伊賀采女と載て大友皇子一方は宅子の生坐し事は論なし。阿閉皇子・阿雅皇子二方を生給へる事は自余に所見有る事なし。然るに伊賀史に、元明天皇御宇和銅己酉五月廿六日、安雅皇女薨二杉坂駅一、六月廿六日、葬二于伊賀国一賜二封田一如レ例といへる、安雅皇女は国分に謂ふ阿雅皇子の事なるにや。不審しき事なり。但杉坂の字は宝暦十年取調書に見え、又東城の辺を今五六尾(上)と唱ふれば伊賀国に葬すと有る国は岡字の誤にて伊賀岡なるべく、五月廿六日に葬すといふは経塚の祭日に相合へれば、伊賀史には経塚を安雅皇女の葬所とするが如し。併其信西の国分、広房の伊賀史、共に後人擬作の書と見ゆれば全く信じ難しと雖、外に徴すべき者なきを以ちて此に(二記カ)説に依り熟考するに、国分に謂ふ阿閉皇子は惣国風土記に、阿閉山と有る閉を一本開に作ると有りて、永閑名所記に、所謂阿我山疑レ是と法(注)す。されば閉に作るは非にて一本の開に作るを是とし阿開山と訓ず。国分の阿閉も是と仝じく阿開にて阿開皇子なりけるならむ。又阿雅は元より阿雅皇子なり。其二の阿開・阿雅共に伊賀の通音なり。風土記に、吾娥津媛命、此神之依二知守国一謂二吾娥之郡一、以二吾娥郡一分(為)る二国之名一、後改二伊賀一吾娥之音之転也と有るを例とすべし。されば大友皇子本名を伊賀皇子と称し奉れる為(ママ)を通音に(二カ)字を易て阿開皇子亦阿雅皇子とも記せる者の在たるを謬て三皇子と伝へたるならむ、実は一方の御事と見るべし。又伊賀史の安雅の皇女は是亦同じく伊賀の通音、皇女の皇は采字の誤写とすべし。安雅(脱文)采女は即伊賀采女にて宅子姫を言なるべし。宅子姫は壬申乱後、旧里杉坂に退隠し卅年許存命せられて和銅二年五月廿六日に薨せられしを大友皇子の兵仗を留め置かれし鳥飛山の伊賀尾の鉾岡に埋葬したるを里人は后の墓と僭称して五月廿六日の薨日に祭祀を営むものならむか。
一岡塚。　一に赤穂と称す。
東西凡二十間・南北凡二十間、南面に道有り。西方より登り到る。其塚の西に

前山城と謂ふ土塁有り。是を十市屋敷とも親王屋敷とも称す。其の北の田に葛野屋敷・与多屋敷等の字有る由を元禄七年四月十五日田畑水帳・宝暦十年六月旧跡字（脱字）取調書等に載たり。

日本書紀天武天皇巻曰。天皇初娶二鏡王額田姫王一、生二十市皇女一と有りて、扶桑略記に、大友皇子之妃、是天武天皇皇（脱カ）女也、水鏡・愚管抄・宇治拾遺物語にも同じく載す。其妃と称するは此十市皇女なる事は懐風藻に、葛野王者大友太子之長子也。母浄見原帝長女十市内親王と有るを以ちて見るべし。然して其皇女は壬申の乱発起の時近江の朝を逃出て葛野・与多の二王子と共に皇太子の湯沐邑に退匿し給ひ（日本紀に、是時近江朝聞三大皇弟入二東国一、其群臣悉愕、京内震動、或遁欲レ入二東国一或退将レ匿二山沢一とある、此の時に太子予て湯沐邑の地に建築せられし要害の別庄前山城へ退き匿れ給ひぬらむと想像せらるゝなり）其乱平定の後は浄見原の宮に入り坐しけむ。日本紀に、天武天皇四年二月丁亥、十市皇女・阿閉皇女参二赴伊勢神宮一（万葉集にも、明日香清御原宮御宇天皇代、十市皇女参二赴於伊勢太神宮一時、見二波多横山巌一吹黄刀自作歌を載せたり。）七年夏四月丁亥朔、欲レ幸二斎宮一トレ之、癸巳、食レト、仍取二平旦時一、警蹕既動、百寮成レ列、乗輿命レ蓋、以未レ及二出行一、十市皇女卒然病発、薨二於宮中一、由レ此、鹵簿既停、不レ得二幸行一、遂不レ祭二神祇一矣、庚子、葬二十市皇女於赤穂一、天皇臨之、降レ恩以発哀（万葉集にも、十市皇女子時、高市皇女尊御作歌三首を載す）と有るを以ちて乱後は浄御原宮に坐し事を推察し奉るべし（葛野・与多の二王子も供に遁て御母皇女と仝じく浄見原宮の朝に奉仕し坐せる事は扶桑略記に、天武天皇十五年、是歳大友太政大臣子、与多大臣家地建二御井寺一、又続日本紀に、慶雲二年十二月丙寅、正四位下葛野王卒と有り。以て乱後二王子の景状を察すべし。）然るに本村の前城山を十市屋敷又親王屋敷と称し岡塚を赤穂と唱ふる事、紀に十市皇女を赤穂に葬すと有るに相合へり。皇女大和なる浄見原の宮中にて薨去し給へとも伊賀に太子の別荘の在るに因して（みカ）其処なる赤穂に奉送し葬し給へるにて赤穂の岡塚ぞ十市内親王の御墓なるべき（伴信友の長等山風に、神名式大和国添上郡赤穂神社あり。其社の有る地の赤穂ならむかと言ひ、又津久井清影の首註陵墓一隅抄に、十市皇女赤穂墓在二大和国広瀬郡赤部村一今不レ知といへるなどは考索の伊賀に及ばざりし故なり。）

一車塚。　一に鳴塚と称す。

東西二十二間・周囲五十八間・直立三間

村民口伝に言はく。此の塚車の形容なるが故に車塚と称す。中古此の塚の廻を田地に開墾せし時、塚の西南を少しく崩壊せしに石槨破れて一穴をなす。其穴の風に応じて鳴声を発す。故に鳴塚と唱ふといへり。今猶其穴有りと雖風に鳴る事なし。鳴といふに附会して口伝するなり。又一説に往昔は天子御譲位有る毎に此の塚鳴るを以ちて鳴塚と言ふと。是亦附会の伝説にて信ずるに足らず。宝暦十年旧跡字取調書に成塚に作れり。鳴の意義有るに有らず。

例年三月六日・七月廿三日には里民此の塚に酒饌を供して祭祀を行ふ事今に絶えず。

三国地誌云、山田惟之墓、俗呼曰二鳴塚一、按鳳凰寺村の東に有り。東西廿間・南北十間ばかり松生ず。洞穴有り。深二十三間。横九尺。相伝ふ、山田小三郎惟之墓、疾病有るもの此に禱て弓矢を以て賽すと載たれど、其山田惟之の履歴を按ずるに、保元物語云、保元々年七月十一日、官軍既に院の御所に押寄する折節、東国より軍勢上り合て、清盛に相従ふ人々には伊賀には山田小三郎惟之云々、爰に安芸守郎等には伊勢国住人山田小三郎伊行と言は又なき剛者かたかは破りの野猪武者なるか云々、是行許只一人ぞ引へたる安芸守には召仕るれとも御恩なければ乗替一騎も具せず。冠者原だにも見せざりけり。山立海賊の訴訟は無実か実犯かそれをめむせらるゝを以て御恩にしたり。郎等ともなく舎人ともなく馬の口に附たる一人ぞ有ける、夫に向て言けるは、己を年来召使ふ情は只今にて有るぞ。死たらば骸をも掘埋し妻子にも子細を語れ。生たらば後の証人にも立て。人もなきにも言ければ云々。門前に馬を懸居物その者には有ら

ねども安芸守郎等伊賀国住人山田小三郎伊行、生年二十八、堀河院御宇嘉承三年正月廿六日対馬守義親追討の時、故備前守殿の真先懸て公家にも知れ奉りし山田庄司行末が孫也。山賊強盗を搦取事は数を知らず。合戦の場にも度々に及て高名仕たる者ぞかし云々。為朝能引て兵と射る、山田小三郎が鞍の前輪より鎧の草摺を尻輪懸て矢先三寸余ぞ射通したる。同京師本に曰ふ。爰に伊賀国住人山田小三郎惟之と言荒者有り云々、惟行一騎すご〳〵とぞ控たる。身の分限なかりければ乗替までは思ひも寄らず。はか〴〵しき徒立の一人をだにも具せざりけり。僅に馬の口に附たる舎人一人ぞ在ける云々、間近く打寄て名乗けるは鈴鹿山の立烏帽子を搦捕て奉り帝王の見参に入たりし山田庄司行季後胤、伊賀国住人山田小太郎惟高が嫡子、小三郎惟行と言者也云々と有りて山田庄の下司たりし行末（一に行季）の孫にて郎等仲間をも具せざりし程の分限なり。籠者に死後瘞埋の事を依詫する如き人の墳墓、豈千歳前に貴重の人を葬れる車塚の体をなすべき。陵墓の制度をも弁知せぬものゝ云伝へしならむ。惟行に係るは無稽の妄談といふべし。其妄説の因て起る所を考ふるに、三国地誌に、山田庄司行末・同小三郎惟之を鳳凰寺村の居民なりと注す。実に然らば山田庄は本村にて立たるなるべし。宝暦旧跡取調書に、生賀成塚前の田字ありて今も塚辺をシヤウガと唱ふ。生賀は荘家の仮借にて即山田の家荘の旧地を謂ふならむ。荘家の旧荘（ママ）称なりどころなり。荘に有る塚なるを以ちてなりづかと謂ふなるべし。庄司行末、其子惟重、其子惟行、累世此の庄を司れるが故に庄司の所有のものゝ如く思て右の如く俗伝するにぞ有るべき。

宝暦十年旧跡字取調書経塚の下条に曰はく、天智天皇の皇子・皇女之御陵之由申伝へ共、伝説不分明に御座候と有るを以ちて推考するに、天智天皇の皇子と称するは伊賀皇子大友帝を申すなるべし。依て其皇子壬申の乱に崩御の事を記載する者を捃拾し葬所を弁明せむとす。さるは日本書紀曰、天武天皇元年秋七月庚寅朔辛卯、村国連男依等到二瀬田一、時大友皇子及群臣等共営二於橋西一而大成（脱文）レ陣、大分君稚臣抜レ刀入レ陣衆乱而散走之、則大友皇子・左右大臣等僅身免以逃、将軍吹負既定二倭地一、更越二大坂一往二難波一、以余別将軍等各自二三道一進、至二于山前一屯二河南一。壬子、於レ是大友皇子走無レ所レ入、乃還隠二山前一以自縊焉。乙卯、将軍等向二於（脱字）不破宮一、因以捧二大友皇子頭一而献二于営前一。又持統天皇巻云、秋七月、美濃軍将等与二大倭桀豪一共誅二大友皇子一、伝レ首詣二不破宮一。宇治拾遺物語云、清見原天皇大伴皇子を追給に近江国大津といふ所に追附て戦ふに皇子の軍破れてちり々々に逃げるほどに大伴皇子つひに山崎にてうたれ給ひて頭を取られぬ。水鏡云、六・七月日より所々にして大友王子と戦ひ給ふ。廿一日せたにせめより給ひしに皇子の方いくさやぶれて皇子も大臣もわづかに命をのがれて山に入き。廿三日に皇子みづから（脱文）つひに命を失ひてしかば、廿六日にぞ其のくびを取てふはの宮に立てまつりし。歴代編年集成云、七月率二数万兵一到二勢田一、時大友皇子・左右大臣等僅脱レ身逃去（走カ）、同二十六日捧二大友皇子頭一献二天皇一。此等の書を併考するに、皇子瀬田の軍営より敗走し大津に脱れ朝家に入らむとせられしかど入べき所無かりしかば、乃東に引還し山に逃入りて山前に隠給ふ。敵軍其所にも逼りしかば自ら縊れて崩し給へるなり。日本紀を按ずるに、大伴連吹負倭家に在て変心し不破宮より将軍に拝せられ諸豪傑を招き別将及軍監として、六月廿九日己丑に倭京を襲ひ留守司高坂王を降らしめ、興兵使穂積臣百足を殺し軍衆を散走せしめて倭地を平定し、七月廿二日辛亥、将軍吹負は難波に往き以余の別将軍等は各竜田・大坂・石手の上中下の三道の屯を解て進て山前に至り河南に屯すと有るを以ちて見れば、山前といふ地は近江にては有らじ、近江大津の辺ならば美濃より近江に打入て勢田にて戦争したる将軍等こそ皇子の御後を追ひ奉るべけれ。其当日に倭より進み来れる別将軍等いつの間に近江に入て河南に屯すべき。其上大津朝家の南に川有る事なし。古今の変転は有りとも川の有るべき地勢に有らず（但日本紀通証に、河南蓋宇治川の南と注し、長等山風には、その山前の河は今それならむとだにおも

はる、処もあらずとぞ。されど古ありし川の後世には涸せはてたる、亦古と後とはいたく革りたるなど諸国に多かる例なれば、山前なるも既く涸れはてゝ知らずなりしなるべし。されど今試に言はゞ今時山上といへる処の北に湖に入る川有るを、そのかみ山前宮前面に廻して北より南さまに鑿通し湖に入りて、宅地の結構とせられたりしにや有りけむと言へるなどは山前の地を探りかねて牽強せしなり）されば山前は近江にあらず（ぬカ）地名なる事知られたり。然るに前王廟陵記に曰。近江軍破皇子隠二山前一自殺、今按、山前長等山前、今謂山上者訛歟、千載寥々不レ聞二終焉之地一可レ歎と言へるを、日本書紀通証に之を引て曰はく、今按、千載集所謂狭々浪也、長等山是也、三井寺号二長等山一在二滋賀郡一として山前を直に三井寺の地と判断す。是を主張して長等山風に曰はく、其御井寺建られたる処すなはち謂ゆる太政大臣之家地にて天皇皇子にまし々々ける時の宮地なり。其ところ長等山の山前なれば其のかみ山前といへるは決して此地なるべし。紀に、乃還隠二山前一云々と記されたるは軍場より山前の故宮に還り給ひ隠ひ坐して遂に崩給へる由なれば、此の地にて御事有りし事明なり。紀に、廿二日辛亥、別将進至二山前一屯二河南一と記されたるはそのかみ三井寺の前を北より南さまに流れたる河の在らむを其の南に屯み居りて逼め奉れるなり云々。其山前は天皇皇子におはしける時の家地なりけるか御軍の敗に堪へたまはで其地に還り隠ひ坐まして遂にゆゝしき御事の有りしなり。其期に天皇皇子与多王に遺詔たまひけるによりて其地を陵所として葬奉り、また後公家に奏して其地に園城寺を建立たりける云々。其後其伝をわすれゆきてつひには天皇の遺詔によりて建られたる御寺なる由来をも陵所は此の地なりと言事だにもたえて知れずなりにしものとこそは思はるれと謂ひて山前を園城寺の地と決定し御陵も其地に在すべく記載したれど、園城寺は旧大友皇子の故宮の地にて遺詔により与多王大友の氏寺として建立有たる旨は長等山風に弁明する如く古書に顕然たれど、其所を山前と謂ひ御陵も其地に在りと謂ふ事は旧記・口伝等一も憑拠とすべき者有る事なし。然るに首註陵墓一隅抄に曰はく、大友天皇長等山陵在二近江国志賀郡園城寺一、御在所不レ詳、或云、北院林中一円丘称二亀塚一者是陵乎と註せるは長等山風に随従したる臆度なりけり。さるを明治十年八月十一日日々新聞云、東海道大津駅の傍に亀丘といふ古き丘有り。古老の口伝には大友皇子の御墓なりと言ひ伝へ来れど、是と言ふ証拠もなければ年久しく荒果て草木生ひ茂れり。されど何となく由縁有りげに見ゆれば此丘の上に登る者なく昔より其尽にてありしを、先年此丘脇に在る明地を大津鎮台軍営とせられしとき、境内に囲ひ込みに成居しに、先比其筋にて御取調ありたるに此の亀岡こそ全く弘文天皇の御陵なりと定められしに附、其丘の四方五十間の地所を滋賀県へ引渡すべき旨を太政官より鎮台へ達せられ、県庁にて不日に陵墓造営に取懸らるゝといふと記せる亀丘は一隅抄に所謂亀塚の事なるか。又別に在るか。何れにもせよ証拠なしと有るからは可否を論すべきに有らず。

右如く皇子の崩所及陵墓を旧来詳に考証せし者の無きは遺憾恐歎の至なり。依て熟按するに、山田郡鳳凰寺村辺は其昔大友皇太子の湯沐邑なりしにこそ（大海人皇太弟の湯沐邑美濃国安八郡に在りたる事日本紀に見ゆ、それに準ずべし）日本紀に、運二湯沐之米一伊勢国駄五十匹遇二於菟田郡家頭一、仍皆棄レ米而令二乗歩一者と有るはこの湯沐邑より倭京へ運送せしを謂ふなり（但伊勢国駄と有るは、当時伊賀は伊勢に属して一国に建たざりし時なればなり）其湯沐邑は即皇子の田荘にて後には山田郡に有るを以ちて山田庄と謂けらし（村東の田字にシヤウガといふ有りて生賀と書けり。生賀は荘家の仮借なり。保元物語に山田庄司行末有り、本村の西城といふに居住たりし由、三国地誌に注せり）されば其荘内に別荘の仮宮を作らせ給ひ（皇太弟の湯沐邑の美濃に野上・和（脱カ）・不破等の行宮を興されしこと日本紀に見ゆ、それに準ずべし）妃十市皇女並御子葛野王・与多王の別業をも興立せられけむ（元禄七年四月田畑水帳・宝暦十年旧跡字取調書等に、御所の内、東城伊賀記には、城村之内とし、大友御在城之所也と載す。是皇子の別荘行宮の古蹟にこそ、又十市屋敷・前山

城・葛野屋敷・与多屋敷の字有り。皇妃二王の別業の旧跡ならむ）

天武帝避難の為に湯沐邑の美濃に入御せるが如く、大友帝も予て其叡慮有りて湯沐邑なる山田の庄に行宮を造られたるにぞ有べき。因て其行宮の在所、各山上にして東城・前山城など唱ふる程の結構にて土塁・石垣等を廻らせる形状今猶存し要害の地にして常の行宮の趣に異なれり。其機密に出しものなる事推察し奉るべし。然るに壬申の七月二十二日、近江勢田の争戦不利にして諸軍敗走せし時、皇子は大津の朝家に引入らむと為給ひしかど入る所無かりしかば、物部連麻呂と三人（一・二カ）の舎人とを従へて僅に御身を脱し給ひ引還して山に入り、伊賀に越て湯沐邑なる別荘御所の内なる東城に入御し給ひぬらむ（風土記に、鳥飛山、昔大友皇子来二此山一暫休之と有るは此の時の事なるべし）然るに倭京を平定したる別将軍等、同じ廿二日に皇子の湯沐邑をも襲はむと為て伊賀に進み来り山前に至り河南に屯して湯沐令を責むとしたりしならむ（但本村に今山前といふ処なしと雖村東の山谷に寺谷の字有り。其の西なる山を堂山といふ。其処に旧「さんぜん」寺といふ古刹の在たる事を口碑に存す。其山前寺は即堂山の旧称山前なりしなるべし。今本村の西なる平田駅に山崎氏なるもの数戸有り。本村より出たりと謂へり。又本村の南に東西に流るゝ山田川有り。服部川とも云。其河岸に今河北と号する村邑有り、それにむかへたる河南の地に屯せるを謂ならむか。猶前山城と謂ふ地も水涯に近く有り。山前の倒せるにや。）此の時に当て皇子は鳥飛山の東城に逃入り給ひ暫休ひ坐せるに豈料（科カ）らむや。倭の別将軍兵数多にて其所を取囲みたりければ遁る所なくや思召けむ。兵仗を解き置て（風土記に、大友皇子来二此山一暫休之、刀鉾多残置給、今国俗謂鉾岡と有るは是時の事なるべし。其鳥飛山の鉾岡たるべき経塚より明治十六年十二月一日に掘出したる太刀・鉾・簇・轡・鎧等の如きは此の時の御遺物を埋めて丘塚としたるならむ）猶奥深く匿入給ひ、終に堂山の山前にして自縊れて崩去し給ひぬ。廿六日に至て倭の将兵等稍く是を探求し意外の事状ゆえ忝くも御頸を賜て美濃に向ひ不破宮の営前に献して真偽を叡鑑に任せ奉りけむ。其後御頸を本の崩所に還し奉り尊体と一つに瘞埋し奉りて御陵を作られたりけむ。其御陵は本村の字荘家に在る成塚、即是なるべし（古来例年七月廿三日、此山陵に酒饌を供して祭祀を営むは皇子崩御の日なるを以ちて式日とす。又日本紀大化二年三月甲申の詔を詳にするに、親王・諸王の墓地は地上に石を積みて槨を作る事、長九尺・広五尺、其中に棺を蔵し土を以て封する事、高五尋・方九尋、隍を掘て域とす、人夫一日に百四十人余。七日にして造畢せしめよと有り。成塚の制、前方後円宮車の状に作る、其寸度、大化の詔に載る所に概略相合へり。但廻隍は後世埋て田となし、稍く西南隅に少しく其形を遺して坊主池有り。又此御陵の守戸三烟なるにか。後世迄も存して字寺谷に住し陰陽師を業としけるもの三戸有りき。諸陵の例に准ずればこゝにも亦置きし守戸の存する者ならむ。明治十六年十二月一日、里民等其陵の壌穴より石槨内に入て探求し三寸五分の円鏡一面・璜玉二顆・琚玉七顆・小刀子一口・土器三口等を拾ひ得たりと謂へり、御体に着られし御物にや有らむ。）

因に曰はく、元禄水帳・宝暦取調書等、田字の中に耳面刀自の字有り。今もしか呼びて車塚の西生賀の南に在り。是亦耳面刀自屋敷にて別業の旧跡なるにか。其耳面刀自は懐風藻云、皇太子者淡海帝之長子也、嘗夜夢云々、覚而驚異具語二藤原内大臣一、大臣嘆曰云々、臣有二息女一願納二後庭一、以充二箕帚之妾一遂結二姻戚一、以親愛之とあるに、本朝皇胤紹運録に、大友皇子――従四位下（脱字）壱志姫王（母大織冠女耳面刀自）とあるを併考するに、内大臣藤原鎌足公の女にて大友皇子の夫人となりて壱志姫王を生給へる娘子なり。此夫人の名を此処に唱ふるも皇子の所縁なる事十市屋敷・葛野・与多屋敷に准ずべし。

（脱文）

宝暦取調書に載る薬師寺縁起に云く。当寺は人皇四十九代光仁天皇御宇、大友王子の百回忌追善のため帝一寺を建立し寺号を白鳳の出し地称を以て鳳凰寺と号し、本尊に薬師医善如来を安置し歴代崇敬之処、豈図らむ哉、天正の兵乱に罹り堂宇・坊舎等悉く焼失す。慶長三年、僧清存堂宇を再建し薬師寺と改称す。尚当寺の柱石等は旧鳳凰寺の柱石にして大石を用ゆ。此盤石を古諺に光仁

の礎と云。旧北八大寺の内にして七堂伽藍地にて御座候と云へり。大友帝崩御の壬申年より百年に当るは宝亀二年なり。此年の勅立と謂ふなり。然して白鳳の出し地といふこと異聞なり。歴代編年集成には、白鳳十四年、備後国献二白雉一、仍為レ瑞改元。水鏡にも、あくるとしの三月に備後国よりしろききじをたてまつりしかば朱雀といふ年号を白鳳とぞかへられにしとあり。備後国より出たる祥瑞にて伊賀にはあらず、鳳凰寺といふに依て附会するならむ。されど是の造寺の来由を大友皇子に係奉るは考証補助の一端とやなるべき。

三国地誌云、一品親王墓、山田郡坂下村に在り。地名王塚と云、大友王粟津の敗、山前に殂し給ふことを記す。外戚の所由を以ちてこゝに奉葬する歟、一品親王墓とは土俗の口碑なり。又云、天皇大友駐蹕の事馬野村土俗の口碑に在りと載せたれど、大友皇子を一品親王とは称すべからず。坂下の王塚は別に考証する所あるべし。馬野の口碑は皇子伊賀に駐蹕ありしといふ考証の一助たるべきか。或云、近江湖水の瀬田より南して宇治に注ぐ流の内、開津といふ村の辺にて漠漫たる深淵に暗礁のあるを大友皇子馬にて其処を渡り給ふ、因て大友のかちわたり（けカ）と唱ふる由、土人の口碑に存せりと謂へり、瀬田の陣営敗軍の時、皇子は南の山に遁て石山寺辺より奥深く入り、平津南郷の辺より其激流を東に渉り信楽郷を経て伊賀に入坐し日の事を口伝するなるべし。今昔物語集に、皇子田獵を好て常に弓箭を帯び軍を引具して山を籠纏て獣を令レ狩（脱文）といひ、又皇代暦天智天皇の条裏書云、皇子才学抜萃、殊好二文書一、詩賦之興始レ自二此時一、兼好二遊獵一、於レ是王子乗二飛雲之馬一、備二法駕一率二群臣一、従二山代国道崎一漸踏二笠置山之峰一、王子就二鹿足一馳二行駿馬一、控レ弓向二高岸鹿一矢離二引手綱一不レ留二四蹄一一所直下七丈許云々とあれば、予め其辺に遊狩して弓馬をも熟練し給ひ、山川の案内を能く知し食たりしにこそ。此口碑も亦伊賀に逃れ給ふと言ふ考証の一助たるべし。（おはり）

夫人類は必死す。死しては只一堆の墳墓のみ。此の間、男も女も老も幼も貴も賤も豈差あらむや。若し神の人類を造られし時より今日に至る骸骨の数をかぞへなば幾何の無量数をかなさむ。世界陸地の幾部分は人類の骨土に依りて成りたりと言ふも空言ならざるべし。春風秋雨幾星霜。桑田碧海の変、岡丘池沼の化、世界の表面は時々刻々変化の働をなせり。幸に此の災を免れて現存する墳墓ありと雖、田畑の下、家屋の下、道路の下、鉄道の下、豈幾多の墳墓なきを保せむや。其の何れを失ひ其の何れを残せる亦知るべからざるなり。

且墳墓の制度古来詳ならず。只従来の所説によりて円形の者は神代より鎌倉時代に到る者。瓢形の者は人皇後二、三代の頃より奈良朝時代に到る者なる事。石室は大石のみを用ゐて造りしものは吾が国最古の墳墓なる事。墳中の遺物は土製物の埴輪土偶は概純粹の日本固有物なる事。墳の外部に樹木の存在せざるものは最古に属する事。又此の種の墳墓に限り雨風の害荒廃の状も永かりし形迹ある事等を知るに止るのみ。然れども文字は之を記さゞるなり。只僅に孝徳紀に、

凡王以下小智以上之墓者宜用二小石一

と記し、大化二年の詔に、

朕聞西土之君戒二其民一曰、古之葬者因レ高為レ墓不レ封不レ樹、棺槨足二以朽レ骨衣衿足二以朽レ宍而已、故吾営二此丘堀不食之地一欲レ使二易レ代之後不レ知二其所一、無レ蔵二金銀銅鉄一、一以二瓦器一合二古塗車芻霊之義一、棺漆レ際三過、飯含無レ以二珠玉一無レ施二珠襦玉押一、諸愚俗所レ為也、又曰葬者蔵也、欲二人之不レ得レ見也、迺者我民貧絶専由レ営レ墓、爰陳二其制一尊卑使レ別、夫王以上之墓者其内長九尺濶五尺、其外域方九尋高五尋、役一千人七日使訖、其葬時帷帳等用二白布一有二轜レ車、上臣之墓其内長濶及高皆准二於上一、其外域方七尋高三尋、役五百人五日使訖、其葬時帷帳等用二白布一担而行之、下臣之墓者其内長濶及高皆准二於上一、其外域方五尋高二尋半、役二百五十人三日使訖、其葬時帷帳等用二白布一亦准二於上一、大仁小仁之墓者其外（内カ）長九尺高濶各

四尺不レ封使レ平、役一百人一日使訖、大礼以下小智以上之墓者皆准二大仁一、役五十人一日使訖、凡王以下小智以上之墓者宜用二小石一、其帷帳等宜用二白布一、庶人亡時収二埋於地一、其帷帳等可レ用二麁布一、一日莫レ停、凡王以下及至二庶民一不レ得レ営レ殯、凡自二畿内一及二諸国等一宜定二一所一而使二収埋一不三得汚穢散二埋処処一、凡人死亡之時若経レ自殉或絞レ人殉及強殉二亡人之馬一或為二亡人一蔵二宝於墓一或為二亡人一断レ髪刺レ股而誄、如レ此旧俗一皆悉断、縦有二違レ詔犯レ所レ禁者必罪二其族一

と載せ、喪葬令に、

凡墓者皆立レ碑記二具官姓名之墓一

と有れども、或は地方豪族の貴族の墳墓に僭越して模造せし事なきを保し難し。況や令に、

凡喪葬不レ能レ脩レ礼者貴得レ同レ賤

と曰ふ。落魄流浪の貴族、時に広大の墓を経営する事能はざるものも多かりしならむ。曾て第一回修学旅行の際、大和多武峯神社に詣で、彼の荘大華麗の鎌足公の塔廟を仰ぎ、第二回修学旅行の際、京都泉涌寺にます歴代帝王の塔陵を拝し、相比して心私に血泣したりき。かくの如くなれば、墳墓の形状は只時代を示すのみ。到底貴賤を知る事能はざるなり。発掘物に至りても又斯の如きを如何にせむ。鏡・剣・曲玉・土器の四種は常に古墳中に発見するものなり。もし人類の階級に依りて此等副葬品に差別あらば可し。然れども只其の者の美麗高尚と醜悪卑賤とは文明の程度に関して其の時代を知り得るのみ。所謂貧亡華族も下賤の生活を為しては副葬品亦美麗高尚のものならず。百姓上りの豪族にして栄華を極めし者は副葬品豈必しも醜悪卑賤の物ならむや。発掘物的判断は又到底貴賤上下を別つこと能はざるなり。今夫兵庫海浜なる平清盛が塔下を発掘して其の遺物を観畏けれど、佐渡の小島にまします真野之陵の御遺物を拝し、両々比較せば、誰か直に甲乙を断定し得むや。夫斯の如くなれば、単に古墳につき単に遺物につきては此等鳳凰寺山間の古墳は決して判断し能はざるなり。余は其の歴史に観察し、其の地理に観察し、特に其の皇室に観察せむ。

壬申の乱は奇怪の変といふべし。二代大津朝亡びて飛鳥浄見原宮代り立つ。単純に之を見れば、天津日嗣一旦雲に隠れて復顕れたるに過ぎず、然れども事は骨肉の争なり。大海人皇子、先帝の庶福の為剃髪して吉野に入る。流言次ぎて興れり。曰はく、近江の官兵吉野に至らむと。忽にして吉野山川に旗幟の挙るを見たり。戦端の機は実に不可思議と言はざるべからず。豈意外の原因なからむや。

大海人皇子・天智天皇の相善からず。一は婦女の争を以ちて、一は政綱の意見相合はざるを以ちてなり。始大海人皇子、額田女王と通ぜらる。情交最密なり。然るに天智天皇は皇兄の威を以ちて、特に君皇の権を以ちて、額田女王を妃と為し給へり。是愛を破られしなり。愛を奪はれしなり。人生企図の最大動機は愛と名誉とにあり。而して寧名誉を捨てゝ愛を全くせむと欲する心中といふものが世上属みらるゝを以ちてすれば、愛は実に名誉の上位ならずんばあらず。いま人にして愛と名誉とにして奪はれむか。彼は死したるなり。否彼は殺されたるなり。復仇は敵を殺して始めてなる。大海人皇子は実にかくの如き境遇に陥られぬ。皇子は何を以ちて死より我を救ひ給はむか。

元来天智天皇は非凡の政治家にませり。推古朝の末より蘇我馬子専横にして大政を紊乱し、皇極天皇の代に到り蝦夷・入鹿等の専擬益甚し。天皇、藤原鎌足と協力し遂に蘇我一族を滅して国難を救ひ給ひき。彼の大化の新政は中古の維新なり。大々的進歩の改政なり。然も是悉天皇の画策に出でたり。近江朝二代の施政は大化の政を振張したるものなり。然れども天皇の御行政は急激に過ぎ、改進に過ぐ。往々曲を矯めて直に過ぎたるものなきにあらず。是大海人皇子の御意に満たざる所なり。天武あはれ皇子は失意落魄の悲境に陥り給へり。夫如何なる奇計を以ちてか此の境遇を変し給はむか。彼の愛を全くせむ事、是通常手段のなし得る処に在らず。頼むは腕力の外ならむ、反対の政治を廃して自己の政見を行はむ

と欲す。是亦通常手段のなし得る処に在らず。腕力を以ちて反対党を亡ぼすの外なし。天皇が二大目的は戦争に依らざれば達する能はざるなり。壬申の乱の来る処を尋ねれば斯くなり。単に主権者たる位置を欲して近江朝廷を撃ち給ひたるに在らず。もし皇子にして単に主権者たるを欲しての事ならば、己が骨肉とます弘文天皇をして何ぞ惨憾の境に至らしめ給はむや。されば天武天皇は二個の失望によりて近江朝廷、否、特に其の宗家を恨悪し給へり。怨恨は意に弘文天皇に帰せり。此の怨は即弘文天皇の御陵をして遂に秘密に附せざるべからざらしめたり。

壬申戦争地の内、伊賀国は近江軍の最頼みし処なり。弘文天皇が母后伊賀采女宅子姫は伊賀国司の所生なり。当時湯沐の離宮をも今の鳳凰寺前山城に経営し給ひたり。されば伊賀一国は特に天皇の鴻恩を蒙りて、近江朝は彼等のよろこぶ所なり。今回の戦乱に於きても近江軍に向ひては充分の同情をか表したりしならむ。然るに戦勝は吉野軍に帰せり。

諸将軍皆死して天皇等に扈従するものは只物部麻呂と三人（一・二・カ）の舎人とのみ、天皇は夫何れの地に向ひて逃れ給はむ。近江全国はまさに修羅場となりて、天武天皇は御自ら不破関を守り給へり。伊勢・美濃は早く敵軍の奪る処。鈴鹿の関門はいかで破れむ。山城には天皇のよるべなし。大和は敵の根拠地なり。只夫伊賀なる哉。天皇を迎へ奉らむとするものは母后一族の在る伊賀国をおきて又何れの地か有らむ。天皇は近江より伊賀に到る間道を経て今の鳳凰寺に落ち給へ、湯沐の離宮におきてともなひ給へる舎人と共に自尽し給へり。文字は是を記さず。然れども時の歴史と時の地理と特に時の皇室は斯の如くいふ。御巫清直翁の考証は実に卓見といふべし。

是に於きて経塚の宅子姫の陵墓なる事、岡塚の十市内親王の御墓なる事は明なり。舎人塚は弘文天皇に扈従せし処の舎人三人（マヽ）が墳墓ならむ。鳴塚はそれ弘文天皇の山陵には有らざるか、千歳の昔は茫として知るべからず。人事亦復雑にして直に虚有り。虚に真有り。況や弘文天皇は蒙塵の天子なり。畏けれども敗軍の大元帥なり。大和朝廷の忌む所なり。内心はともあれ、表面に於きて当時の社会は天皇の御事を口にするを憚らざるべからず。鳴塚の陵小にして完からず。御遺物は華麗高尚のものならず。然れども思へ。当時天皇の余党は決して宏大の御陵を興すこと能はざる事を。当時天皇の境遇は美麗高尚の副葬品あらざるを。此の事情有り。記紀其の他の古典、又直に信を置くを得ず。況や。勅撰の書筆を曲げ、辞を屈し、信偽を顚倒して大和朝廷を庇保し記したるを保し難きに於きてをや。疑問を開くは学問の道なり。鳴塚の主人公は一の疑問に属せり。寡聞浅学の吾子、元より判断の脳なけれども、只自ら心私に会得しうるのみ。昔は柴野栗山、曾て畝火山陵を過ぐるに、其の荒廃壊亡の状を見慨然として一詩を賦す。

遺陵纔向里民求　半死孤松数畝邱　非有聖神開帝統　誰教品庶脱夷流
厩王像設専金閣　藤相墳塋層玉樓　百代本支麗不億　幾人来比一回頭

噫有にうたれ風にやぶらるること二千歳。これら三、四の古墳は今は草木みだりに生して岩石顕れぬ。暁嵐木の間を渡れば落葉雨の如く、経が峯一片の暮雲暗乎として起れば服部河上不断の常灯月明滅せり。余は此等墳下の人が過去一代の悲運を哀むと共に、未来永劫の不幸を悲みてやまず。

さもあらば有れ。滋賀の潮きよき処、長等山崎の山陵は厳然たり。皇室の祭り給ふ処、人民の拝し奉る処。弘文天皇は此処に神あかり給ひしなりけりな。

かへりぢ

古墳をみてのかへり路、坂倉君の影先にみゆ。うしろより声をかけて「すこし待ち給へ」と呼べば、旅のつかれは君にのみしるき顔にひやゝかなる笑をうかべて、ふりかへり様「急ぎたまへ」との瘠、吾慢づらにくゝ「なにとや。まて骨皮の瘠髄、今蹴たをしくれむ」と一走り走りたれどあはれや。空腹の底に力なく、足はうかれて靴の紐ふつと切れぬ。「まゝよ。はき更たるももどかし」と、過ぎし大和めぐりの跣足思ひおこして破草靴踏みすてながら再走りかくれば、是は又小石原の田舎道。昨日つくむし豆こたえて、痛さは痛し、腹立しき折から、「松

本君すさまじき勢かな。さのみ急ぐにも及ばじものを」と呼びくる声は師の君なり。昨日より靴のみめし給へば、足の痛みは色にこそ出し給はね。それとは御姿に見まゐらせぬ。「足は強うはべれど腹むなしうて」ときこゆれば、「吾も足はいと軽けれど」ゝの給ふ。かゝる君に御供仕へまつるうれしさはさすが言葉には出さねど、心のよろこびは抑へがたくてほゝゑみがてら行くほどに、友の一群こゝに待てり。「過ぎし茶屋にて久しう息ひければ、かくはおくれぬ」。とさきをとれば、知らぬものはしほらしく、「しか。吾等もいたくまち詫びたり」といふにしなしたりと、心ひそかに悦びし的ははづれて、坂倉君、つと顔さし出しながら「是より先に茶屋有りしにや。あないぶかし」。とひとりごちながら松本君、先程は失敬と打こみたる矢は、慥に満力の弓勢のどをさゝれし心地して、吾に一句の音も出でず。平田村を過ぎて黒田川の堤を渡るほど、薪はこぶ賤山男が車二つ三つ先に見ゆ。わだちなづみてうごきかねたり。さてもいとしや。いざ助けくれむとは誰いはど、血気の壮士互にさそひさそはれて、勇みの諸膚はチヨツキの姿。ゑいやそらまけ。まいた々々々と声をそろへて押し行く。山男かしこしとていなび申すも耳に入れず、勢つきてひた走りに走れば、男、かしらをかきながらつゝしみ給ひてよ車かへりで御身ばしそこね給ひては翁が迷惑になむと手をもみながら願ふ様にいへど、車はいかで止かべき失(矢カ)の如く行きて一里も来にけむ。山男、汗をあびて走り来て、口もおろ々々いかで渡し賜はらばやと頭あまたゝびさげて言ふに、をかしさよりはにれあはなりて、さらばぼつ々〻来よと行ひ捨てゝ行く。日は早くくれて暮色をちこちの山をつゝみ、炊煙上野町に数立ちて、汽笛の声夕の六時をつげぬ。

弘文帝御陵に付きて

本科二年生　三浦　千畝

帝の御陵に付きては、古来確然たる所未絶ゑて世に知られず、其の自縊の地といふ山前といふ所すらさだかならず、極ておぼろけにのみありつるを、今上天皇の明治三年、縊号を弘文と申上げ御歴代に数へ奉りきて、仝年、奏す人ありて御陵を近江国滋賀郡三井寺の麓なる亀塚に定められぬ。穴かしこ。吾が神聖なる天津日嗣を知食せる天皇におはしましながら、御不幸にも長く皇統の数にもれ給ひ、甚しきは反逆者のやうにまで後人の誤認を受けさせ給ひにき。在天の聖霊いかに口惜くおはし坐しけむ。いかに憤しくおぼしめしけむ。

よき事に禍事いつき、禍事に吉事いつく神随の理は、仮令至尊とましまし御身の上にも得免れさせ給はざりけむ。既に時至り、水戸の義公、其の撰史に於きて天皇大友と大書し此を帝皇本紀に入れしより、靡然として世の史眼を動かし、学者和し、志士和し、遂に千歳の今日、此の如き国家の慶事を見奉るをえたり。此に到り誰か　今上天皇の至徳を仰慕せざらむや。

然るに近来、帝の御崎を疑ひてこゝにあらじと論ずる学者往々にして出て来ぬ。若この説をして信ならしめば恐けと、竜を画きて点睛をかきたらむが如し。実に聖代の恨事といふべし。是余が敢て匪才を顧ずこゝに学者の考説を掲げ、且聊か余の卑考をも言はむと欲する所以なり。人その言の不遜をとがめず、以て愚哀を尽さむことを得しめば幸甚なり。

明治廿九年十一月、吾が皇學館本科生、修学旅行を伊賀国に試む。余も幸その後にある故を以て一行に尾するを得たり。行程凡て一週日。

国見山の兼好塚、この国の優物なり。詩人は宜しく行きて一滴の涙をそゝげ。上野の芭蕉庵、亦此の国の特物なり。誹家は須らく訪ひて一掬の閼伽を手向けよ。

然り。余は元来詩人と云ふにはあらねど、此たび一日を分ちて国見山を尋ねたり。誹味亦余輩の解せざる所、しかも芭蕉庵には半日を費しつ。然れどもこれらは道次手の見物のみ。申さば今回旅行の要点で帝にてはあらざるなり。さて其の要点は何。これ余が現に言はむとしつゝある弘文帝の御陵、即土人は伝への陵墓也と称する古墳この伊賀国にありといふをきゝたればなり。

此の古墳は伊賀国山田郡（今、阿拝・山田の二郡を合して阿山郡といふ）鳳凰寺村

字轟にあり。余は想へり。若土人の言の如く果してこの古墳が帝陵の一として多少徴すべき証跡の存するものならば、余は飽くまで之を世に紹介し、敢て躊躇せざるべしと。

余等同村に入りてよりは、可成正確なる証跡を捕へむと勉めたり。先村人をあつめて余等の来意を告げ、且これに付きて彼等が伝聞せる限りの口碑と、有する限りの文書とを求めたり。彼等は喜びて諾せり。かくて余等の得たる材料は、同墳より発掘せりと云ふ鏡・剣の破片、曲玉、土器の数個、及伊勢の碩学御巫翁の詳細なる考証文、此等はその重なるものなりき。偖て此の古墳の信偽考証の適否は姑之を捨き、先山前の地を近江の亀塚に定められたる故由及其考説といふものより漸々に論ぜむとす。（学芸志林に、或人が掲げたる在近江説のいと細しき論文あれども、此本今左右にあらず。遺憾ながらこゝに掲ぐること能はず。されど大体の論は左にいへるが如し。）今在近江説を見るに、日本紀に、

大友皇子之走レ無レ所レ入、乃還隠二山前一以自縊焉

とあるこの山前の地を近江粟津の辺りなりと云ふにありて、此は前王廟陵記・長等山風及首註陵墓一隅抄などの所説を根拠とし、土人が帝の御陵なりと云ひ伝へたる亀丘を発掘して鏡・剣の破片を得たるを証拠として言はれたるもの、如し。併此等の書伝と発掘物とのみを捕へて、直に山前は此の地なり、帝陵は此の丘なりと定めむこと頗る難きわざなるべし。よし長等山風は大家のものせる考証なるにもせよ、其の説必しも誤謬なしとはいかで云はむ。（御巫翁は、長等山風の説を山前の地を探りかねて牽強せしなりと評せり）其の他、前王廟陵記といひ、陵墓陵記と玄陵墓一隅抄といひ、其の首註といひ、皆附会あり。杜撰あり。悉信ずるに足らず。且つ古墳を発掘して鏡・剣などを得ることは敢て珍しきことにあらず。日本紀標注は已に之を論じて曰く、

三五年前近江国滋賀郡に此皇子の墓地を覓る時、或人、三井寺の麓に亀塚と云へるあり。是皇子の御墓ならむと密に発きつるに、破鏡と断刀とを見当り。是ぞ其証ならむと聞え上げ修繕を加へ給へるは覚束なし。何れの古墳にても鏡・剣・曲玉等の埋れをる、それ其証なりとは抱腹に堪へざる業なるぞかし。

実に所論の如し。（書紀を一通り見たる処にては、山前といふ所は近江粟津辺にあるもの、如くに思はるれど、猶熟続（読カ）しもて行くに、いかゞと疑はるゝ点甚少からず、そは論ぜむとす）つぎ〳〵に亦我が朝廷におきても断然こゝなりと信じて定められたるものにはあらじ。他にその地をえ探めざるより強ひてこゝとせられしものと想像せらるゝなり。さて仝標注が山前の所在に付きて云はれたるは、

山前は粟津に近き辺にやと誰も思ひ寄りてはあれど、かゝる地名を聞かざればおほつかなし。今熟按ふるに、次将軍吹負既定二倭地一便越二大坂一往二難波一以余別将軍各自二三道一進至二于山前一屯二河南一とある河南は淀川の南なれば、北河内にして、其地を求るに、同国茨田郡枚方より東南十五・六町許、交野郡門村分郷福田に字山崎と云ふ凡四・五町四面の地あり。此地に凡百四・五十坪高三間許の荒陵あり。土人は丸山と称し、是を此皇子の御墓なりと三松俊季云へり。続紀卅二に、河内国山崎院捨二二町一とあるも、此地なるべきに、志に在二茨田郡三矢村一院址僅存と記せる三矢は枚方なるに、彼地に然る地名あるを聞かず、云々。

この標注のいふ所、やゝ当を得たるものに近し。いかにも近江粟津あたりに山前などいへる地名絶えて、あることを聞かず。彼の前王廟陵記に「近江軍破二皇子一隠二山前一自殺、今按、山前長等山山前、今謂山上者訛歟、千歳寥々不レ聞二終焉之地一可レ歎」といひ、日本紀通証に之を引証して「今按、千載集所謂狭々浪也、長等山是也、三井寺号二長等山一在二滋賀郡一」といへる如き、又長等山風に「其御井寺建られたる処、すなはち謂ゆる大政大臣之家地にて、天皇皇子にましましける時の宮地なり、其ところ長等山の山前なれば、そのかみ山前といへるは定てこの地なるべし」といへるが如き、首註陵墓一隅抄に「大友天皇長等山陵在二近江国志賀郡園城寺一、（御在所不レ詳）或云、北院林中一円丘構二亀塚一者是陵乎」といへる如き、皆一向に山前の地を近江の内粟津の辺りのこととのみ思ひひかめたるより起れる臆説にて、共に附会のものなりと云はざるべからず。（この論、御巫翁の考証には甚詳に論ぜり）

余は伊賀国山田郡鳳凰寺村といふ所に古来帝の陵墓なりと土人の口碑に伝へたる古墳あることを云へり。又この古墳に付きて御巫翁のものせる詳細なる考証文あることをいへり。今余は此の古墳と此の考証とに付きて一言せざるべからず。

宝暦年間の同村旧跡字取調書といふものを閲するに、

経塚　天智天皇ノ皇子・皇女之御陵之由申伝候へ共、伝説不分明ニ御座候。

とありて、顕には大友皇子と御名を申さゞれども、天智天皇の皇子とあるは大友皇子を云ふなること論なし。さて土俗、何によりてか此の経塚をさしてかく大友皇子の陵墓なりと云ひ伝へたるにかと考ふるに、蓋全く無根の事にはあらざめり。御巫翁の考証ありしよりのことか、土人、今は経塚を云はずして鳴塚の方を専皇子の御陵といへり

伊賀名所記に曰はく、

御所の内　国分にいはく山田郡に御所の内とて大きなるかまへ侍り。爰は昔此国より采女を奉りける此の国の郡司の娘なりけるに、天智帝につかへ奉りて御子三かたをこの腹に出しまゐらせて、一かたは大友皇子、一かたは阿閉皇女、一かたは阿雅の皇女とぞ申しける。伊賀采女といひしはこの事なり。郡司程なく徳つきて、後にはいみじき長者のやうになりて、この国に子孫も猶すゑ〳〵まで侍りけりと。

と載せたり。大友皇子の外に二方の皇女おはせしよしの伝は史上に見えざれども、御巫翁の考証に此を詳論せり帝のその伊賀の采女の出におはしましゝことは、正史たる日本紀を始め諸書に載せて明なり。日本紀に曰はく

又有下宮人生二男女一者四人上云々、有二伊賀采女宅子一生二伊賀皇子一復字曰二大友皇子一

歴代編年集成にも、

天智天皇皇子大友皇子、母宅子娘云々

又本朝皇胤紹運録にも、

大友皇子、本名伊賀、母宅子娘伊賀采女

とありて、御生母の伊賀の采女なることは異論あるべくもあらず。されば伊賀国がこの帝にはいかなる関係あるかと云ことをも知るべきなり。又伊賀国風土記には、「鳥飛山この山は即経塚なること御巫翁の考証に見ゆ此山甚賤而又其形奇、昔大友皇子来二此山一暫休之云々」とあり、又三国地誌にも、「大友王城准后伊賀記曰、城村之内山田郡にあり、大友御在城之所也云々」とはいへれど、終焉の地とはいはず。かりそめの御在城と見えたり。帝の未皇子にておはするほどは、御生母の国として御該翁は、伊賀は帝の湯沐邑なりといへり時々には御出遊ありしことも御滞留ありしことも強ちなしとは云ひがたし。蓋しその御旧跡か。土俗、これによりて其の経塚をさして帝の御陵なりと云ひ伝へたるにはあらざるべきか。

こゝに余は御巫翁の考証をかゝげ、而して此を熟読吟味する必要を感ぜり。即是を概記すれば、但翁の考証は経塚の外に鳴塚・岡塚の二をも共に考証せるものにて、伊賀国山田郡鳳凰寺村所在陵墓考証といふものなり（翁の考証全文既に松本兄の日記中に見ゆ。依りて余はこゝに略して載せず）

右に依りて見る時は、翁は鳴塚を以て帝の御陵なりとし、経塚をば単に御生母宅子娘の御墓なりとせり。而して山前の地を伊賀国山田郡鳳凰寺村辺にありと論断し、以て縦横無尽に在近江説を反駁したり。さすが大家の考説とて、議論綿密、引証該博、人をして敬畏せしむ。然れども余は一一その説に扈従すること能はざるものあり。かく云はゞ頗不遜の言ひざまなめれど、併又愚者の一得といふ諺もあれば、こゝに卑考をのべむも強ち無用にはあらざるべし。

翁は経塚をもて単に宅子娘の御墓なりといはれたれど、彼の宝暦十年該村旧跡字取調書をみるに「経塚、天智天皇ノ皇子・皇女之御陵之由申伝候云々」とあり。又三国地誌に「大友王城准后伊賀記曰、城村之内山田郡ニアリ、大友御在城之所也、城村権現大友ヲ祭ルトコロナリ云々、其上ニ経塚山アリ云々」と書し、又村民が七月廿三日（帝自縊の日）を式日として此の山に踊をなすが如き点より考ふるに、土人の口碑には単に宅子娘の御墓といふのみに止らず。猶帝の御□（陵カ）もこの山なりと云ひ来れるもの、如し。さは云へ鳴塚をもて山田某の塚なりと云ふ旧説をとるにはあらず。余も一見してこの塚の古代貴族のものなるを知る

こは兎も角も次に山前の地を在伊賀とせることに付きてはいさゝか言なきを得ず。翁の考証に曰はく、

但本村ニ今山前ト云フ処ナシト雖トモ村東ノ山谷ニ寺谷ノ字アリ。其西ナル山ヲ堂山ト云フ、其処ニ旧クさんぜん寺ト云フ古刹ノ在タルヲ口碑ニ存ス。其さんぜん寺ハ即チ山前寺ニシテ堂山ノ旧称山前ナリシナルベシ。今本村ノ西ナル平田駅ニ山崎氏ナルモノ数戸アリ。本村ヨリ出タリト謂ヘリ。又本村ノ南ニ東西ニ流ルゝ山田川アリ。服部川トモ云フ。其河厓ニ今モ河北ト号スル村邑アリ。ソレニムカヘタル河南ノ地ニ屯セルヲ謂フナラムカ。猶前山城ト謂フ地モ水涯ニ近クアリ。山前ノ倒セルニヤ。

今これを分解すれば

（一）堂山と云ふ山に昔さんぜん寺と称する寺ありしを伝ふ。サンゼンは山前にて堂山の旧称山前なりしならむ。

（二）隣村に山崎氏なるもの多し。而して本村より出たりといふ。

（三）本村の南に山田川あり。其の河厓に河北村あり。依りて此に対する所即河南なり。

（四）水涯に山前城と云ふ地あり。これ山前の倒せるならむ。

以上の所論、細密は則細密なれども、然も山前の地を定むる効力の点に於きては比較的薄弱の論なりといはざるを得ず。いかにとなれば、仮令サンゼン寺は山前なるにもせよ。今日旧記口伝の片端にだに存せざる事実を捕へて堂山の旧称山前なりといふは、頗牽強の論なりと云はざるべからす。翁、先には在近江説を駁するに「其所ヲ山前ト謂ヒ御陵モ其地ニ在リト謂フコトハ旧記・口伝等一モ憑拠トスベキモノアルコトナシ」といへる自論と撞着することなきか。又山崎を姓とするもの全国至る所に多し。平田駅の山崎よしこゝより出てたりとすとも村名山崎なりといふこと甚おぼつかなきをや。又三、四の項に付きては元より云ふ迄もなからむ。

次に翁は山前の地近江にあらずして正に伊賀にありといふ理由を陳べて曰はく、

七月廿二日辛亥、将軍吹負ハ難波ニ往キ以余ノ別将軍等ハ各竜田・大坂・石手ノ上中下ノ三道ノ屯ヲ解テ進テ山前ニ至リ河南ニ屯ストアルヲ以テ見レバ、山前トイフ地ハ近江ニテハアラジ、近江大津ノ辺ナラバ美濃ヨリ近江ニ打入テ勢田ニテ戦争シタル軍将等コソ皇子ノ御後ヲ追ヒ奉ルベケレ。其当日ニ倭ヨリ進ミ来レル別将軍等イツノ間ニ近江ニ入テ河南ニ屯スベキ。其上大津朝家ノ南ニ川アルコトナシ。云々

いかにも大和・河内の諸道より進み来れる別将軍等が当日近江に入り山前（近江なりとすれば）に到り河南に屯すとは地理上あり得べきことにあらず。又山前の地、近江大津の辺ならば、当日倭より進み来れる別将軍等いつの間に近江に入りて河南に屯すべきといはれたるも、事実上さることなり。故に余は、翁の非近江論に対しては全々賛同するものなり。然らば翁が在伊賀説はいかにといふに、こは中〳〵に賛し難し。今その理由をいはむ。日本書紀に、

初将軍吹負、向二乃楽一至二稗田（大和添上）一之日、有レ人曰、自二河内一軍多至。則遣二坂本臣財・長尾直真墨・倉墻直麻呂・民直小鮪・谷直根麻呂一、率二三百軍士一、距二於竜田（大和平群）一、復遣二佐味君少麻呂一、率二数百人一、屯二大坂（大和葛下）一。遣二鴨君蝦夷一、率二数百人一、守二石手道一（通証河内石川郡）。是日、坂本臣財等、次二于平石野一（河内石川有平石村）。時聞三近江軍在二高安城一（河内高安）而登之云々。会明、臨二見西方一、自二大津（通証和泉国和泉郡標註河内国河内郡）・丹比（河内国今分丹南丹北二郡）之両道一、軍衆多至云々。財等自二高安城一降以渡二衛我河一（河内国古市郡）、与二韓国一戦二于河西一。

とあるを見れば、倭将軍吹負及その別将等進路の方向は倭の乃楽よりして漸々河内の方面に向ひたるものにして、伊賀は全く其の背後に当れり。故に若倭の別将軍等進行を転じて伊賀の方面に向ひしものなりとせば「各自二三道一進至二于山前一」とはかゝじ。かならず「自二三道一還至二于山前一」などもあるべからむ。然

るを還とはなくて進みてと書けるは、やがて山前の地決して伊賀にあらざることいと明かなり。（伊賀は帝の湯沐邑なりしことはさもありなむ。されど別将軍等轡をならべて殊更に攻め来るほどのものにあらず）又「倭京ヲ平定シタル別将軍等同廿二日ニ皇子ノ湯沐邑ヲモ襲ハムト為テ云々、軍兵数多ニテ其所ヲ取囲ミタリケレバ云々、猶奥深ク匿入給ヒ終ニ堂山ノ山前ニシテ崩去シ給ヒヌ、廿六日ニ至テ倭ノ将兵等稍ク是レヲ探求シ云々」と翁は云はれたれど、帝が山前に自縊し玉ひしは廿三日（壬子）にして、諸将軍等が悉く篠浪に会せしは廿四日（癸丑）なり。故に御首は自縊の日、即廿三日に別将等のとり奉りしものなること云ふも更なり。さるを廿六日に至りて倭の将兵等稍く是を探求し云々といはれしは、書紀に「諸将軍等悉会二於篠浪一」とある悉の字を見落されたるにや。はた水鏡に「廿六日にその首を取りてふはの宮にたてまつりし」とある文を見誤れるにや。こは次手なれば弁じ置くのみ。

若果して山前の地を伊賀鳳凰寺村辺とすれば、帝は何れの道より走り給ひけむ。翁の考の如く、石山寺辺より猶奥深く入り、平津南郷辺より信楽に入り、それより伊賀に出で給ひしこととすれば、極めて嶮岨なる山路をたどり給ひしこと云も更なり。又その里程を算ふるになか〳〵近き道にあらず。かゝる嶮難の長路をしかも敗軍の将が人目を隠れて一日にも足らぬ時間もて到り給はむこと、頗おぼつかなき業なるをや。今一歩譲りて帝その日の内にて到り給ひしものとすとも、その日は既に夜に入りてのことならざるべからず。さて翁が「倭ノ別将等軍兵数多ニテ其所ヲ取囲ミ云々」といへる出来事は事実上決して夜中のことなりとは思はれず、然るときには帝が未近江の堺を出で給はざる時に当り、既に伊賀にてはこの軍兵に取囲まれたりと云ふ如き奇怪を生ずるを免れず。大家の説としては余りなる疎漏と云ふべし。かくも在伊賀説が、時間の上に於きても事実の上に於きても将又地理の上におきても已に不当の説なること到底蔽ふべからず。これ余の大胆にも大家の説に反して喋々する所以なり。

以上、山前の所在に付きての考説は、在近江説（已に今日認定せられたる説）・在河内説（標註の）・在伊賀説（御巫翁の説）の三種に別れたり。而して余は已に標註の説を以て比較上最近き説なることを云へりき。然れども余は寧此等の所説に同せず。別に在山城説を唱ふるものなり。即かの山崎合戦を以て有名なる山城の山崎の地、茲をもて慥に帝が自縊の地也と断言する者也。如何となれば、帝の近江より逃れて茲に出で給はむことは事実上且地理上最も至当也と考ふれば也。今其理由をいはむ。此の時に当り近江軍の最勢強也し者は、何処の地にて有しか。四面楚歌を聞く日までも烈乎として節を持し敢て屈せざりし者は、何処の兵也しか。倭の敵に向ひて克之と戦ひ数々賊勢を挫屈せしめし者は、何処の将也しか。若余をしてこの問に答へしめば、余は只一個の河内を挙げむのみ。書紀に、

初将軍吹負、向二乃楽一至二稗田一之日、有レ人曰、自二河内一軍多至云々。是日、坂本臣財等、次二于平石野一。時聞三近江軍在二高安城一而登之云々。会明、臨二見西方一、自二大津・丹比之両道一、軍衆多至云々。是時、河内国司来臣（来目臣）塩籠、有下帰二於不破宮一之情上、以集二軍衆一。爰韓国到之、密聞二其謀一、而将レ殺二塩籠一。塩籠知二事漏一、乃自死焉。経二一日一、近江軍当二諸道一多至。即並不レ能二相戦一、以解退。是日、将軍吹負、為二近江一所レ敗、以独率二一二騎一走之。

とあるを見ても、いかに河内軍の強勢なりしかを知るべし。帝をして若も再挙を計らむ御心あらしめば、河内をおきて他に何の地かある。帝をして若も玉体を愛せむ御心あらしめば、亦河内をおきて他に何の地かある。帝が衾龍をぬらさせ玉はむ地は只この好河内あるのみ。（伊賀の如きは兵力の一も頼むべきなく、且伊賀の方面に向ひて出で給はむとせば、瀬田より打入りし男依等が軍路を要塞し、逃れ給はむこと頗難儀なりしこと、元より言を待たず）今近江大津辺よりして河内に入らむとする当時の行路を按ずるに、必山城の宇治に出て紀伊乙訓を過ぎ、こゝより淀川を渡りてさて河内には入りしものならむか。左すれば帝が山崎に来坐せることは全く河内に入り給はむとしての御心なりしことを想像し奉るを得べし。書紀に「於是大友皇子無レ所レ入乃還隠二山前一以自縊焉」とある山前は全くこゝなること又何の疑かあるべき。嗚呼唯一の頼みと深くも思ほし給へる河内の地は、意外にも悉く敵の占

領に帰し、今敵将等は凱歌を奏して三道よりして来らむとす。此の時の帝の御心やいかに口惜き限りにおはしましけむ。又いかに慨き限りにおはしましけむ。想ひ奉るもなか〳〵に恐しや。

「千里ゆく駒をむくいて渡舟　のらすなりにし人ぞかなしき」、これ契沖阿闍梨が彼の項羽の末路を詠したる悲歌にあらずや。余は敢て帝の御事をもてかれが末路に比し奉るにはあらねども、事去り命尽きて遂に地下に入る。当年の恨事恐けれど彼我曾相異ならざるを見るなり。帝御製あり。曰はく、

道徳承二天訓一塩梅寄二真宰一羞無二監撫術一安能臨二四海一

今この御製に対せば、いかに帝が才学の非凡なりしか。又いかに帝が謙徳の高潔なりしかを見ることを得べし。而して古人はこの安能臨四海の結句遂に讖となれるを痛歎せりき。噫。

世人は、この山崎の地の今日著名なるは単に山崎合戦以来のことなりとのみ思へるはいかにぞや。この地の古代に於きていと著名なりしことは、かの山崎橋のことに合せても猶知らるべきなり。山崎橋興廃といへるものに、

行基伝云、神亀二年九月、将二諸弟子一行到二山崎河一、不レ得レ船仮掩二留河中一見二一大柱一、大菩薩問云、彼柱有二知人一矣、或人申云、往昔尊船大徳所レ度橋柱云々、爰大菩薩発レ願、従二同月十二日一始度二山崎橋一

扶桑略記云、神亀三年丙寅、行基菩薩造二山崎橋一、故老相伝云、造レ橋畢後、菩薩於二橋上一大設二法会一、洪水俄至橋流人死、粗有二其数一云々、

水鏡云、聖武天皇神亀三年、行基菩薩山崎の橋をつくりてそのうへに法会をまうけて供養し給ひしに、にはかに大水いで、ながれ死ぬる人おほかりき。

続日本紀云、延暦三年七月癸酉、仰二阿波・讃岐・伊予三国一令レ造二山崎橋一断材（料カ）、文徳実録曰、嘉祥三年九月丁酉（脱文）、先レ是、七日（月）大水、山崎橋断、帝以為、河橋易レ壊依二水浸噬（嚙カ）一得二其便地一自無レ附（所カ）レ害、是日、詔遣二中納言安陪朝臣安仁・源朝臣弘・参議滋野朝臣貞主・伴宿禰善男等一就二山崎一以察二利害一求二其便地一乃定置レ橋、

延喜式曰、山崎橋、摂津・伊賀等国各六枚、播磨・安芸（脱字）・阿波等国六十枚（各）長各二丈四尺　弘一尺三寸　厚八寸

惺窩文集山州八幡橋本之橋銘云、前博陸侯将レ有レ事二于大明一命二諸国一開二道路一作二舟梁一而欲レ得二往還之便一、事絶二古今一慶伝二遐邇一矣、時哉山州八幡橋本之艣華夷出入之咽喉也云々、

都名所図会云、山崎の橋云々、今は舟渡しありて孤川の渡しといふ。

拾芥抄大橋部云、山崎（今大渡歟）

山城名蹟志、山崎橋断絶ス、此橋山崎ノ方ハ今ノ観音寺ノ前川畔也。其向所ハ淀ノ大橋ノ南河内街道ノ内八幡山ノ坤ニ当テ片方ハ人家茶店アリ云々、此所今ハ舟渡也。孤川右舟渡ノ所ヲ云。流ハ即淀川南一河ノ別名也。此渡山崎ヨリ八幡及河内等ニ到ル。又孤川ノ名義未考。

余は未此山崎の地に入りて親く聞見せざれは、果して此の辺に帝の陵墓とも見るべきものありやなしや、又帝の事に関する口碑今日土人の間に存せるものありやなしやを断言すること能はず。此余が頗遺憾とする所なり。（これに付きては他日を期し更に研究すること）そは兎も角も、山前はこの山崎なること地理上事実上決して疑ふべからず。（日本紀標註にいへる、河内の字山崎は茨田郡枚方より東南十五・六町計云々とあれば、山城の山崎とはいと近き所にて淀川一つ隔て鈔に相対せる地なり。又今橋本とある地は淀川の南岸に近く河内の堺にのぞめり、よりて按ふに屯二河南一とあるは今いふ橋本辺のことなるべし。未郡国の制充分明ならざる上代には、郡郷の分堺何れに属すとも定かならぬ所なども多かりけむ。されば上代にはこの橋本辺をも広く山崎と称せしものなるべし。とまれ角まれ山崎といふ地名にして分郷福田に字山崎と云凡四・五町四面の地ありといふにかゝはりて著名なる山崎その近き所にあることを忘れたるなりけり。実にをしむべし。）

以上の理由によりて、余は飽くまで帝の自縊の地を此の山崎なりと信ずるものなり。さて山前の地に付きては右の如くなれども、猶この外に考へ置くべきことこそあれ。そは他にあらず、帝の御首何処の地に奉葬せられしかの疑問是れなり。若これにして明瞭ならざらむか、いかに山前の所在に力を労すとも必竟徒労の業なるべければなり。（御崩去の地はよしいづくにもあれ、実の御陵は御首の奉葬せられし地をもてそれと定め奉るが至当なるべければなり）書紀に、

乙卯、将軍等向二於不破宮一、因以捧二大友皇子頭一而献二于営前一

この事は水鏡・歴代編年集成等の諸書にも記されて、御首は敵将の手に依りて不破宮に到りしことは明かなれど、猶御首は長くそこに止まりしか。いかに甚をぼつかなきことなり。然るに書紀標註に左の如く記せり。

大友皇子頭、按に一年にても後ノ大津宮を知食シ天皇の御首に刀を触シ奉しこと、穴かしこ、古今例を聞かざる悪(マカ)ことにて、誰か長歎息せざらむ。今其故由を尋るに、不破郡藤下村と云ふに自害ヶ峯と云ふ地あり。其処に凡廻リ一丈五尺余の一本杉ありて山神と称し、土人は大友皇子の御首塚と伝へ云へり。其より東南一町許にして若宮八幡社と申、皇子を祭れるよしなり。其隣村を松尾村と云ひ、村神は天武天皇を祭れりとぞ。しかるにこの二村、古来をり合はず、若嫁娶の結びありても障リを生じ必離るゝに至るといへり。是は彼土人清水某より書きておこせる侭をしるしつ。

余は未この辺に付きて親く見たる上ならざれば、そこの土人が帝の御首塚なりと伝へ云ふ自害峯はいかなる所なるか、又帝を祭れるよしなる若宮八幡社はいかなる社なるかは明に知ること能はず。御首を不破宮に献りし由は事実なれば、土人がかく云伝ふるもげに理りなめれど、自害ヶ峯とはいかなる故の名にかあらむ。帝の御自害の地なるは此処にあらざること云ふも更なり又若宮八幡社といふ神社は諸所に見ゆれど、大友皇子を祭ると云ふことをきかず。猶これは他日したしく見たる上、更に論はむ。又美濃辺は元より天武帝の湯沐の地にて、皇子の為にはこよなき敵地なり。かゝる所に御首の長く止らむこと頗疑はし。しからばいかなる所にか御首は移されしぞと熟々考へもてゆくに、必帝の為に最ゆかりある所にぞあるべき。

伊賀国山田郡は帝の御母の生地なること、帝は数々こゝに御出遊ありけむことは余已に云へり。依りて帝の為に最もゆかりある地は蓋こゝならむか。御巫翁が、

忝クモ御頸ヲ賜リテ美濃ニ向ヒ不破宮ノ営前ニ献シテ真偽ヲ叡鑑ニ任セ奉リケム。其後御頸ヲ本ノ崩所ニ還シ奉リ尊体ト一ツニ瘞埋シ奉リテ御陵ヲ作ラレタリケム。其御陵ハ本村ノ字荘家ニ在ル成塚即チ是ナルベシ

といはれたるぞ中〳〵に趣きある考説なりける。若しこれをして事実ならしめば、誰か御首を奉りて伊賀には葬(カク)し奉りし。此又帝に対して最もゆかりあるものの一人なることを知る。而して余は之を帝の大仇敵におはする天武帝の御計ひなるべきを想像す。

帝と天武帝とは政権上に於きてこそは既に仇怨相容れざる御中らひなれ、人倫上より見るときは叔甥なり。舅婿なり。又持統帝に対しては姉弟の御中におはしませり。此の骨肉の関係より察すれば、仮令生前はいかなる悪感情に閉ぢられ給ひしにもせよ、此の感情長く死後にまで続くべき理りなし。そは帝の御子なる葛野・与多の二皇子、又御兄弟なる施基又芝基とも書せり・川島の二皇子が天武・持統の両朝にありての景状を見てもしるべし。書紀云（持統三年）「以二皇子施基……等一拝二撰善言司一」、又云（天武八年）「天皇詔二皇后及草壁皇子尊・大津皇子・高市皇子・河島皇子・忍壁皇子・芝基皇子一曰、朕今日与二汝等一俱盟二于庭一、而千歳之後欲無事奈二之何一云々」、又云（持統五年）「浄大三川島百戸通二前五百戸一云々、其余増封各有レ差」、又云（持統朱鳥元年）「川島皇子・忍壁皇子各加二百戸一、癸未、芝基皇子・磯城皇子各加二百戸一」、扶桑略記云「天武天皇十五年、是歳、大友太政大臣子与多大臣家地建二御寺一」、元亨釈書云「大師薨、其子与多承二顧命一奏二天武帝一創之」、懐風藻曰「葛野王者、淡海帝之孫、大友太子之長子也。母浄御原帝之長女十市内親王云々。高市皇子薨後、皇太后引二王公卿士一於二禁中一、謀レ立二日嗣一。群臣各挾二私好一、衆議紛紜。王子進奏曰、云々。皇太后嘉二其一言定一国。特閲授二正四位下一、拝二式部卿一。時年三十七」（猶天武帝の諸皇子に比すれば位階などもや、低く、始終其の下にありしことは争ふべからず）さて天武帝の乱平ぎて後、不破宮より大和の京へ還り給ふときの御通路を見るに、書紀に「九月己丑朔丙申、車駕還宿二伊勢桑名一。丁酉、宿二鈴鹿一。戊戌、宿二阿閇一。己亥、宿二名張一。庚子、詣二于倭京一而御二島宮一」とあり。山田郡は阿閇と名張との間にて、その鳳凰寺村は平面駅の近傍なり果して帝の御首陵が伊賀の地にありとすれば、葬り奉りしはこの還御の時のことにもやあらむ、帝自縊の日は七月廿三日にして、天武帝の阿閇に宿らはれし日は九月十日なれば、此間の日数殆ど五十日なりた此より前のことなるにか今かと定めがたし。余は山前の地伊賀とする御巫翁の説には全々反対するものなれども、此れをもて御首陵ならむかといふ問題に付きては頗こゝに望を属せざるを得ず。以上余の所論甚不完全なるを免れず。こは全余が不学の罪なり。他日これを補足して以て大に謝することあるべし

明治二十九年十一月　　神宮皇學館寄宿舎にて識す

三浦千畝識

上野町に菊輪正修氏を訪ふ

安藤正次記

七日の夜、大塚氏と共に菊輪正修氏をその寓に訪ふ。氏はこのわたりにての読書家にて、歴史につきても多少の智識を有する人なりとききたれば、就きてその意見を叩かむとてなりけり。実に当町の阿倍神社の如きは、氏の熱心なる唱導によりてあらはれたるなりとぞ。

氏の家は醸酒家なり。先入りて刺を通ず。須つ事少時、鬚髯茫々たる一士いで来りて余等を延く。即ち氏なり。之に随ひて座し、寒喧叙し畢へて徐に来意を述べ、先鳳凰寺村の古墳につきての高見如何にと問ふ。氏曰はく、君等討査の結果如何を知らねど、余は固くその弘文天皇の御陵たらむことを信ずるものなり。然れども是等の事、既に御巫清直翁等の考証せられたるものあり。豈余の呶々を用ゐむ。且情の上よりするも、鳳凰(ママ)村は実に御母宅子媛の御生地なれば、弘文天皇に深き由縁を有する地なり。天皇もこの所を深く頼み給ひしなるべく、土民も亦深く庇護し奉れるなるべし云々。顧みるに、従来当国には帝陵なし。今若茲に鳳凰寺村の古墳が果して弘文天皇の御陵なりとの確定を得たらむには、蓋当国の面目なり云々。余等因りて更に問ふに、このわたりの旧道をもちてす。氏暫く沈思して転じて傍人に計る。然れども明答を得ず。猶問ふこと二・三、更に余談にうつる。

氏、快弁縦横、古をひき今を論ずること詳なり。談たま〳〵藤房卿に及び、更に南朝に及ぶ。即亦語らぐ。余、先年吉野宮の宮号宣下ありし時、参拝せりき。然るに吉野の土民の当時後醍醐天皇に従ひ奉れる者の裔なる所謂南朝の遺民、亦麻上下を着して式場に参列せり。扨祭式進みて勅使の宣命を読むに至り、之をきゝゐたる彼の遺民、皆声を放ちて泣き沈みぬ。列その嬉しさにたへかねてなりけり。はれこれを見て深くその忠誠の心を感じ、南朝五十年の間、神器をこゝに擁し給ひて賊臣空しく手を束ねたりし所以を悟りぬと。辞気慷慨なり。氏、亦楠公自筆の幅を出して示さる。その一は即ち左の如く記せり。

当寺衆徒可令守護宇治路并伊賀路之由先日被仰下候也。但田原路最要害也云々。於伊賀路者分遣少々守護可足振勢。向田原路可令守禦之由可令下知給。逆賊已着洲俣当時企合戦云々。仍尤可有用意候也。不廻時刻令発向候由可令下知給者。院宣如此仍執啓如件。

二月七日　　正成

謹上興福寺別当

信正御房

追申

伊賀路三方相分有路云々。仍笠置方ヲハ被仰東大寺候也。今二方ヲハ猶可為当寺沙汰候也。いかさまにも田原路へ不日可令発向候由可令下知行候由候也

此の文中院宣と記せるは如何。一幅には梵字にて○の如きものを画き、傍に「大唐有山名崑崙山彼山似是磐石沙玉多尤良将可籠所也欺敵事眼下有利」など記せり。又小楠公自筆の感状めきたるもの一幅あり。余等古文書学に暗けれど、幸に観心寺の極め状の添へるありて、是等の幅の観心寺にある文書の真蹟と同一の筆蹟紛れなき事を証せり。

猶古文書いと多しとの事にて、唐錦たゞまく惜しき心地せられしかど、夜既に更けにければ、今はとて暇を告げぬ。

余等一介の白面書生に向ひて懇に待遇せられたる事を氏に謝す。

野村甲子郎氏を訪ふ

大塚運象記

菊輪氏の訪問は已にをへつ。昨夜訪ひたりし野村氏在宿なりや。否や。これより程遠からねばたづねみんとて、安藤ぬしと共に方向を転ぜり。夜寒の風は「カブロット」とほして凜烈たり。饂飩・蕎麦・酒・「ビーフ」の看板は赤く青くはた緑にゆくての衢に異彩を放てり。暖簾一たびくぐらんには以ちて常人を暖むるに余りあらむ。されど以ちておのれらを暖むるに足らず。只暖むることを得むも

のは野村氏の教育・宗教に於ける議論ならむとて勇み行く。

請せらるゝ侭、書生を楯に無遠慮にも座敷の一隅を占めつ。一客の已に至れるあり。己らは今回の旅行の概略を述べ、更に主なる目的は鳳凰寺村の古墳にあり。その如何なる人の陵墓なるかを究め得ざる間は幾年を費さむも必修学旅行は此の国へ命ぜらるなるべしなどのべて、教育・宗教に関する意見を叩けば、氏は徐に説きいだされぬ。

余はあへて誇るにあらず。されど三重県中最多数の就学生を出すは飯南郡にて、其の次はわが管内なることは、本県調査表によりて明なり。女学生も他に比しては或は多数ならむ。されどいまだ多しとは一概にいふべからず。学校は高等小学以上の程度のものは殆どなしといひて可なり。経学は町井修氏の私塾あれど、いまだ天下に称道するに足らず。されど高等小学を卒ふるもの、中の一部は津の中学に入り、或は四日市の商業学校にいる。武官に志す人は皆無ともいふべきか。一の海を有せざれば航海事業に志す人も皆無なり。其の中の最大多数は農業にて、其の次は丁稚なり。元来旧藩時代には、伊賀の文明はすべて大阪より木津川を溯りて輸入したりき。故に今も尚商業などの取引の尤多きは大阪にて、その次は京都なり。丁稚見習もまたこれらに因せるか。

〔頭注〕評　余が曾て聞ける所によれば、伊賀国を出で他郷に遊学するものは範校生第一位を占め、中学生は其の半に達せず、東京に遊学するものは医学生の一部のみ、夫も僅に一両人にすぎずときけり。従記して参考に資す。

といひて一碗の茶を喫せらるゝまに、かたへの客、待設けたるもの、ごとく、氏の後を奪ひて説きいだせり。いはく。

余は教育家にもあらず。また村夫子にもあらず。されど特に憂ふるは今日教育家の其の器にあらざるものこれなり。師範学校卒業の諸氏が血気の勇を奮ひて教育に従事せらるれども如何にせむ。四ヶ年の修業期に於きて充分呼吸せる器械的管理は第二の天性となれゝば、動もすればこの器械的教育の第二の国民を誤らせむとするかたぶきあるを。

師範学校の官費は実に生徒の独立心を喪失せしめ、元気を失はしめ、天真を破らしむ。されどこれ官費の罪にあらず。才能なき校長・教員・舎監がこれを利用して壓伏せむとすればなり。

当局者、口を開けば中学生は監理し悪く範□(校カ)生はをさめ易しといへり。これ蓋怪むべきにあらず。をさめ易しとは生徒に活気なきを代表せる隠語なり。誰か斯かる甬を作らしむるに至らしめけむ。只百年後の国民の頭脳には卑屈「六オンス」諂諛「三オンス」知識「一オンス」の「テン□」（底本、以下一行欠）

といひ終りて意気軒昂眉宇頗あがれり。彼は尚つぎていはく、

諸君はいまだ羽翼成らざる鵬烏なり。世界に雄飛すべき時期は既にせまれり。而して諸君の務むべき将来の職務は神聖なり。されば諸君の職と拮抗せんとするものはあらず。否、拮抗することあたはざるなり。諸君は眠らむと欲せば眠れ。遊ばんと欲せば遊べ。浮世の嵐は諸君をよきて吹かむ。されど幸に聴け。孟子は敵国外患なきときは国恒に亡ぶといへり。諸君幸に猛省せよ。方今世界の宗教はわが国に集れり。いはく仏。いはく耶。いはく猶太。いはく回々。わが国は文明の媒介者にて宗教競争の焼点なり。まさに来らむとするものは宗教革命なり。世界広しと雖いまだ血をもて争はざるものはあらず。わが国にはいまだなきが如くなれど、已に仏教と神教とは欽明帝の朝に小波瀾を起しゝにあらずや。故に諸君の任は重且大なり。世界のあらゆる宗教の為にわが神聖なる日本国を攪乱せらるゝことなからしめむは諸君にあり。諸君勉めよや。

姓名をとへば答へずして他をいふ。已にして辞し去る。残る二人は手を拱きて茫然たり。野村氏咳一咳していはく、

この頃天理教を酢の蒟蒻のと今更起りたるやうに攻撃する人あれど、彼が親方なる神道本局の稲葉正邦氏に就きては論ずるものなきがごとし。天理教が害毒を流しつゝあるは諸君の知らるゝ所なれば、また余が贅言を要せざるべし。只諸君が疑問は郡役所は何が故に斯かる淫靡の邪教を部内に侵入せしむるかにあらむ。されどこは余輩の罪にはあらじ。余輩は寧当局者の不問に附するを怪むものなり。乞ふ。暫く余が言を聴け。

天理教が管轄内にその教会堂を建てむとするに方りては、願書を必郡役所に差出さゞるべからず。またこれを受取りたる余輩は果して許すべきか許すべからざるかの意見書を添へてこれを県庁に差出すなり。もとより斯かる害毒を流すものなれば、安寧秩序を乱すは火を睹るよりも明なるをもて、その旨委しく記してこれを差出すなり。しかるに県庁にては、稲葉管長にむけ許可して可なりや否を照会せらるゝことをもて常とす。管長はこれに対し、決して国家の秩序・生民の安寧を乱すことなき旨を回答せらむ。素よりその部下のものなれば、誰か許可すべからずと回答するものあらん。県庁にてはその回答を得て許否を決せらる。今まで許されざる所なきをもて見れば、知事は有害なるものと認められざるか。但しは稲葉管長の言に信を措かるゝか。これわが管内を以ていふにあらず。広く指せるものなり。かくいはゞ諸君に対して失礼ならめど、天理教の撲滅せむことを欲せば、まづその根本たる稲葉管長に向つて一矢をおくらざるべからず。諸君はかゝるものをも害なしといはるゝか。

と、蓋氏は神道本局と皇學舘とを仝一視せられたるものゝごとし。氏にして斯のごとし。田夫野郎の甥にも従兄弟にもあらぬ神道教を皇道と混同し、天理教も黒住教も神習教も実行教も大社教も皆神宮司庁の一部と誤認し、神宮皇學舘と親戚故旧のやうに思ふも亦深く怪むに足らざるべし。されど鄙声を悪むは雅楽を乱るが為のみ。彼の神宮教といふ神道教はいかに。もと神宮々司たりし田中頼庸が庁内の属吏を頤使し、なるべくそのけぢめなからむことを勉めたるが故に、識者も愚者も智者も匹夫もこれを混合せり、且その教名に附するに神宮の名称を以てし、神宮の御紋と類似の紋をこしらへて慢幕を染め、宮殿に彫鏤して衆目を懣着せり。さればにや、貴族院中錚々たる某伯爵のごときすらこれを同一視して、彼れが失態を神宮司庁に負はしめむとせられしことありきとぞ。

〔頭注〕評　世人が皇道と神道教とを混仝せるもの由来また久し、これを闡明して世人の迷夢を覚破すべきは実に諸子の任なり。

氏は尚語をつきていはく、

耶蘇教は十五年以前よりなきにあらねど、僅に上野市中三、四名のみ。村落にはたえてなし。されど一週間に二回位宛は必大阪・京都より宣教師来りて布教するは、実に感ずべきなり。只怪むべきものは仏教徒なり。而して最多きものは禅宗なるが、異教徒の競争なきが為か。学識の乏しきが為か。或は囲碁に、或は連歌に徒に月日を費すのみにて、門徒が如何なる意思を持つか。如何なる点まで宗教上の思想を注入せしかを知るもの少かるべし。古へは名僧智識もいでたれど、今は至りて微々たるものなり。彼等は狐なき鶏、猫なき鼠、只日夜眠れるのみ。

次は神道教なり。こは随分に熱心なり。その中最も多きは黒住教にて、其の次は神宮教なり。

とて、これにつきては委しき議論を聴くことを得ざりしは実に遺感なりき。こも亦氏が大に憚りて説かれざりしならむ。

宗教教育につきての氏の論は大概これを聞けり。洋服の正坐も已に退屈せり。伊賀国に遊ぶ、茲に二日。この間余は実に子供の少きを怪めり。もとより学校生活の児童もあらむ。されど余が視神経は非常なる小数驚けり。幸に城壁なき氏の心底に照されておのが疑をたゞせり。氏、眉を顰めていはんとして、黙し黙せむとしていはんとし、遂に、

余はこれをいふに忍びず。諸君に対していふことあたはざるなり。といひて笑を漏らされたるも、所謂苦笑ひなりけむ。おのれは遂に解することあたはず。然も今尚疑へり。談は古墳に進みぬ。夜もまた更けぬ。氏いはく、

諸君は佐奈具村の古墳を調べられしか。到らざりしならば聊物語せむ。素より考証学家にあらず。古墳取調係にもあらず。只余の頑癖がこれを記臆するなり。頑癖とは何ぞ、「たゞには死なじ」の一句なるのみ。

佐奈具は古実古の里といひし処なり。この里に墓あり。古来より御墓山といひ来れり。東西廿間・南北四、五十間もあらんか。高は六、七間ならむ。前方後円にて、四辺は平衍なる田面なり。その附近の殊に低きは陵を繞らせる池にはあらざりしか。古より庶民の登らざりしはもとよりにて、国守の威を以てすら憚りて登らざりき。且樹木を伐らざるのみならず、不浄をも忌めり。旧幕時代にはその傍に演武場ありて射術を学びたりしが、その矢それて御墓山に向ふときは暴風ありとて、いたく謹みきといへり。兎も角も高貴の人の墓には相違なけれど、何ともいまだ定まらず。大彦命といひ、伊賀日女命ともいふ。藤堂元甫氏は垂仁天皇または聖武天皇の陵かと疑はれたり。何にせよ大和に近きわが国が、神代の縁故、弘文天皇御一代、天正乱のごときは著しきものにて、その他歴史上価値ある国なれば、充分詮鑿して夫々幽魂を慰めたきものなり。

といひ終りて、憮然として太息するやゝ久し。

茲に於きて逃げ目を使ひぬ。宿に帰れば鼾声雷のごとし。監督の師の君たち「遅かりき」といふ。時に十一時鐘十五分。

夜陰を犯しての訪問、野村氏は如何に迷惑せられけむ。深く謝すといふより外は辞なし。氏は三重県下学務課長中の錚々たるもの、年齢四十二に満たざるべし。沈着にして其の議論は磐石のごとく、其の風采は一見して尋常の俗吏にあらざるを現はせり。

余は修学旅行に先つこと一日、嘗て上野丸の内高等小学校長たりし佐野氏を山田高等小学校（氏は故校長岩橋氏の後を承けて就任せられしものなり。）に訪ひ、氏の卓説を叩きき。氏、乃ち歴史・宗教・教育・風俗に関する概略を諄々として説き、且野村氏に紹介状を恵まる。故を以てこの一夜を過ごすことを得たり。伊賀国目下教育・宗教等のあらまし察するに足るものあらむ。聊記して後の記憶に備へ、且佐野・野村氏等の好意を謝す。

八日午前自上野出発至治田中飯　　**本科四年生　福舎　基千代**

早暁臥床を出でゝ窓を開けば、夜来の濃霧やう〳〵うすれゆきて、朝日子の影東の山の端に登らむとす。秋高く気澄みて、吹く風も暑からず寒からず。旅行にはこよなき時節なりけり。いとうれしくて朝げもそこそこにすまし、上野の旅舘を出立つ。二人三人打連れて、道すがら見聞したりしことなど語りかはすも旅行中の楽なり。一行のものには少し遅れて、藤堂舎監は名張町に、中西助教授は花垣村治田に車をきしらせ玉ひぬ。蓋し本日の行程は、治田に赴きて楠公の子孫を尋ね、転じて月ヶ瀬の勝地を探り、更に山道を辿りて名張に着せむとする予定なるを以て、旅宿準備の為かくは別路をとられたるなり。余は今朝の紀行を録する責任あるを以ちて、残る隈なく町内の旧蹟を観むとし、まづ足を公園に運ぶ。公園はもと上野城の旧趾なりしが、明治十九年、官に請ひて允許を得、庶民遊覧の所となしたりといふ。本町を下ること数町、西大手門より入る。外廓は全く破壊して、蔦茅萱もて掩はれたる石畳の上に、半傾きたる樓門のみ往事の面影を残せり。前面なる旧練兵場に郡役所・高等小学校・尋常小学校など甍を並べてたてり。その建築は宏壮ならざれども、園内の風致を添ふるに足る。迂面せる径路を進みて本丸に到る。もと牙城のありし所は、樹木雑生し石礎畳々として蕞爾たる一小丘となれり。予輩は歴史的に懐古の情を有せざれども、聊黍離の感なきこと能はず。一平石に坐して遠望すれば、竜蛇の蟠るが如く、怒濤の起伏するが如き山脈

は、伊賀を囲繞して一大平原を画し、服部川・黒田川その間を横流して殆山河襟帯の状をなす。頗山城の京都に似たる所あり。而して彼は狭隘なる地盤に幾多の美観を集め、此は四顧洞達の間素撲なる田舎の実景を載す。土地に広狭の別あり。景色に大小の差ありといへども、共に天然のパノラマたるを失はず。当城の起因を尋ぬるに、和州の刺史筒井順慶といふものとその甥平安坊四郎藤原定次を猶子として領地を譲り、国政を掌らしめき。順慶逝去の後、定次、豊臣秀吉の寵を受け、天正二年、伊賀国守となりて赴任す。即此の地を相して一の草館を造りたりしに、後数千の人夫を督し、三層の楼閣を増築して、文禄年中に至り遂に純然たる一城廓をなせり。

然るに定次、徳川家康の怒に触れ封を他に移さるに当りて、藤堂高虎、勢伊両国の守となりて此に居城せしより、大に輪奐の美を増し規模を宏大にしたりといふ。藤堂氏築城の際、前面の楼門を堅固にしたるにより、幕府命じて之をとゞめたりきと称す。かゝる要害の城跡たるを以て、今も尚旧時の壮観を存して塁高く堀深く、老松古杉雑然として天空に聳ゆ。しかのみならず近年大に開拓して、処々に桜樹を植ゑ亭榭を建て、旧来の面目を一新せり。園内の陵上に立ちて観望せむか。街衢井然たる上野町はその下に横りて人馬の往来織るが如く、田野遠く開けて村落処々に点在し、茅屋三・四、炊煙の朝風に靡くなど、閑雅なる景色も双眸の間に映し来る。眺めはつきせざれども、さのみはとて公園を出で、右に折れて行くこと六町斗りにして、鍵屋の辻あり。宝永年間、渡辺数馬・荒木又右衛門等がその讐敵なる沢井又五郎を伐ちたる所なりとぞ。今は十字路頭に一茶店あるのみなり。その事蹟は院本口碑に残りて世にもてはやさるれど、此の所にて彼等が終天の怨をはらしたりしか。そはいとおぼつかなし。その他町内に見聞すべき神社寺院いと多し。されど一行にいたくおくれたるを以て、心ならずもさしおきつ。大和街道に出で、田間の小路を横ぎり、木興といへる所にてやう〳〵先発の諸子に追ひつく。道花木村を過ぐ学友山中栄太郎氏の実家あり。氏が令兄は博覧強記にして、就中伊賀の歴史に詳しきよし博聞したるにより、その説をたゝかむと欲して訪問す。然るに氏は社用の為出張せられたるを以て面会することを得ざりき。竹島氏の厳父、予輩を迎へて慇懃に待遇せらる。法花村に今井兼平の墳墓ありときゝ、道をまげて茲に到る。村道の傍に今井山あり。此の山の麓なる民家の傍に、苔蒸して文字も定かならざる石碑立てり。里俗伝へて今井兼平の墓なりと云ふ。伊水温故の記す所によれば、

木曾佐馬頭義仲ノ郎徒今井四郎兼平、粟津ノ手ヲノガレ此ノ国ニ落チ来リ法花ノ里ニ隠レ住ミケルガ、終ニ此里ニテ終ル、古墳モサダカナリ、或説ニ兼平ガ子ナリトイフ、其名不分明ナリ。

とあり。こも亦信偽は保しがたし。行くこと半里にして治田に着す。志す所は小楠公の子孫を探求するにあり。果して公が苗裔なりとせむか。その顔貌はいかに、その態度はいかに。千載のもとまのあたり公に謁する心地やせむ。其の他公の遺物、公の石碑、見るべきもの必多からむ。予、大岡越前守の明なけれども、いでや天一坊の実否正して見むなど妄想を胸裡に画きつゝ、公の子孫と自称する市田家の門内に入る。導かれて別室の一間に通れば、煤にまみれたる天井は所々に雨滴の跡を印し、床の上に一段高くしつらひたる棚には仏像位牌をすゑて、一縷の香煙の登るさま、げに旧家らしく思はる。されど土壁を新聞紙にて張りつめたるは少しく不釣合の趣あり。先着の諸氏は、はや古器書類を陳列して、或は読み或は写し、ひたすら鑑定に余念なきが如し。予はまづ当今の主人たる長重郎氏に面す。蓬髪黏面、巧に漢語を用ゐて語る。徐に先代の歴史を説き出していふ。小楠公の遺子此の地に隠匿せしより五代を経て高成に至り、我が市田家を起せり。中頃、家運衰微して田畑家財悉他に売却することのやむを得ざるまでに至りしかども、血統は依然として相続せり。されば藤堂氏封を此の国に受けられしより時々訪問せられたりき。又公の遺子を奉じて来りしものゝ子孫、今に現存して主従の礼を守れり。世に楠公の子孫と称するもの多かれども、我が市田家の如く系

統の正しきものはあらず。甲冑刀剣の類夥多保存したりしかど、先代の時売却せり。当今現存するものは僅少なれども、亦以て公の子孫たることを証するに余ある品あり。諸君希くは明鑑せよと。言語縦横、説き去り説き来りて、意気頗る昂る。余は主人の由来を荒肝をぬかれたる心地してその証拠品たるべきものを取調ぶるに、

一　系　　図　　一　軸
一　過　去　帳　　一　冊
一　先代が神社仏閣に納めたる
　願文其の他の書類　　数　通
一　小楠公が所持せられし持仏三体　一　函
一　位　　牌　　一　基
一　鎗　　貳　本
一　軍　　扉　　壹　本
一　旗の断片（菊水の紋あり）　壹　流

余が見たりしもの、右の数品なり。是等の数品を以て公の子孫たる証とすることを得べきか。歴史上、地理上、実際上より考究すれば、或は信なるかも図りがたし。愚説なきにあらざれども、そは紀行の外に考証することゝせむ。聞く、当今の主人長重郎氏、度々書を宮内大臣に□（奉カ）りて栄典にあづからむことを懇願したりしに、今に至るまで何等の沙汰なしといふ。そはともあれ、担端の瓦には菊水を刻し、土壁石塁の構造、墓地の石碑等、大に普通民家のものと異り。真個に小楠公の子孫なりとせば、その埋没を悲しまずばあらず、従来歴史に明記せられずして湮滅するものその例多し。此の点に於きて市田家の系図は世の歴史家たる者の考究すべき充分の価値あるものと信ず。決して軽々に看過すべきものにあらざるなり。時機を検するに正午に近し。即主人に別を告げ、ある旅店に至りて午餐を喫す。里芋の味噌汁、ズヰキの煮染、空腹なるまゝに山海の珍味とも覚えしよ。

八日午后　冬枯の梅林

本科一年生　平野直晃

昼餉たうべぬ。やゝ疲れたりし足の頓に疲のやみたるは腹の充ちたる故。しばし休みしが為か。後れたりし福舎・安元・三浦の三氏、其の他の人々は、未昼餉たにたうべずとて市田が家に止りぬ。先一足にてもと出て立つ。目ざすところは月ヶ瀬の冬景色なり。此の先発は、かの第一回修学旅行に健足の誉ありし大塚ぬし、それに劣らぬ中村ぬし、その他七、八人、師の君には中西助教授なりけり。つゞら折りなる山坂道、収獲に余念なきかたへの農夫を煩はしつゝたどりゆく。坂はいよゝ険くなりぬ。やう〳〵にして登りをへて、半里許の小高き山を越え行けば、三々五々軒を並べたる所あり。何処と問へば、尾山なるといふ。梅の木こゝかしこに在り。月ヶ瀬は何処。春ならば風のしるべもなど語りあひつゝ、山の中腹なるやゝ広き道を下りざまに進み行けば、千尋の下深く奇石突兀として羅列せる間、碧水蕭々として流れゆく川あり。幾多の奇峰高く聳えて蜿蜒起伏するさへをかしきに、冬枯はてたる梅の樹は河岸をうづめ、岩ほをかすめて八尾八谷にみち〳〵たり。若し此の旅路の春ならむには、この清き流に棹さし、えならぬ匂ひに包まれつゝ、尾山八景とやらむをも一つ一つに尋ねめぐらむものをと、そゞろに思ひ続くる折しも、木枯颯と吹き渡りて梅の梢に声を残せり。松本ぬし、忍ひ難くやありけむ、

春やいつ木枯寒しうめの枝

とさゝやきぬ。われも劣らず、

秋風颯々梅の林に鵙一羽

などうらみあひつゝやゝ行くに、如何なるみやび男のしわざにか、幾もとの梅の樹の間を己が住家と定めし二、三軒の家ありけり。時ならねばにや。戸は皆閉ぢて、あるじは有りけなれど、いと静なり。やゝ隔りていかめしき家あり。近づき見れば、音に聞きし月ヶ瀬保勝会事務所なりけり。こも門はとざしたり。曾て聞く。此の地そのかみ土地いたく瘠せて野菜を植うるに由なかりければ、村人はな

りはひの為梅の樹あまた植ゑ付け、其の果実を取り、烏梅といふ染物の料とし、京坂地方さては筑前博多小倉のあたりまで遠く輸出せしかば、従ひて植うる者多く、遂に天下の勝景とまで成りしなり。さるを、世移り風変りて外国との貿易盛に行はれ、染料の類亦あまた輸入してより、此の烏梅の需用頓に少なくなりしかば、今は培養する者もなく、あはれ年々に荒れゆく趣ありければ、去ぬる明治廿四五年頃、この保勝会といふもの、かしこき人々の発起もてつくり出で、そを支ふるのみか、いよゝ盛にせむとするなりとぞ。かくて又、その果実は悉梅干として陸軍各師団に送り、行軍の用に供すといふ。かの征清の役など為に利すること夥しかりしならむ。いとよき思ひつきなりけり。次に月の瀬橋を渡る。切り石もていと高く築きなどして鉄橋の様をよそひたるは、何となく都会めかしう見えて、閑雅をむねとするかゝる地にはふさはしくもあらざりけり。渡りて行くことしばしにして、いたく呼ぶ声の聞ゆるを顧るに、わが一隊を彼方の峰高く登りて呼ぶなりけり。其れとは見ゑねど、前に後れし福舎ぬしらの一群なるべし。憩ひがてら彼等を待ちてむといふに、皆傍なる石に腰をかく。山川ぬし徐に、

月か瀬の　里曲は荒れて　むぐらさへ　枯れし伏庵　花もなく　香も匂はねば　人きはおもひもかけぬに　おもほえず　をとめぞ居たる　物かげに　衣やぬへる　窓ごしに　糸やつむげる　珍らしみ　かいまみすれば　年かさは二八あとさき　山さとの　種とも見えず　色もあり　香も匂ひけり　かくのこと　深くこもるは　やがてこむ　春をまち得て　咲きいでむ　下心かと余所目にも　しるきものから　春ならば　真袖うちふり　花さかばえくぼかたまげ　御茶ひとつ　召せと云ひつゝ　香にゑへる　人をやひがむ　ひくまゝに　いなみもかねて　人も亦　手折やすらむ　われもまためでむと思へど　なつかしき　香をもおくらず　慕はしき　面をも見せず　冬枯は　つれなかりけり　此の頃は　かひなかりけり　梅の霊　をとめとなりて　何かしの　夢に入りけむ　故事の　それかあらぬか　あたらしと　さゝやきすれば

わが友も　かへりみすれど　賤の女は　よそ目だにせで　むくらさへ　かれにし軒の　南なる　はし居の窓に　手わざいとなむ

といひ出づるに、何処にかと注目すれは、前に平閉ぢたりし家の端近う、日かげわづかに照すを頼みてをと女の衣たち縫ふありけり。かゝるに又ある人、

冬ながら衣たちぬふをと女子に　春をもよほす月か瀬の里

若き書生の一行、かゝる妄想も亦無理ならじと師の君は見ゆるし玉ひけむかし。程経て彼の人々は来りぬ。共に登りしは前に劣らぬ山坂道なり。やゝ登りて顧れば、前に見つゝ過ぎこし幾株の梅、さては山水のけしきまで一望眼中にあり。芭蕉翁の、

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

といふ句をきざみたる碑あり。荒れはてたれど、茶席の如き所もあれば、故ある処にやと問ふに、こゝぞ一目千本といふ処なるといふ。一とせ已来りしことありしに、恰春のまなかなりしかば、このあたりいと賑しかりき。この茶店を始めかなたこなたの茶店、いかめしく飾りつくして、あまた行きかふ人をいざなひつゝ、何めせかめせとうるさき程なりき。さるを今はかく悉に戸を閉ぢて、行きかふ人だになければ、見たがへたるなりけり。安藤ぬし、

立ちつゞく梅の林に百舌鳥なきて　秋がせ寒し月の瀬の里

安元ぬし、

梅の花さきのさかりの春ならば　旅の衣に匂はさまじを

とぞ詠み出でたる。げにさびしきけはひなりけり。しばしありて又登るに、いかめしき料理店、軒を並べてあり。こも戸は皆とぢたり。されどこなたの家に名物梅花酒の看板などかゝげたれば、いでしるしにとて立ちよる。年の頃六十余なる翁、火鉢かゝへながら気の毒けなる面もちして、此頃は往きあふ人なければ得貯へ侍らずといふ。力なく出て行く。已この冬枯のけしきを故郷に報ぜむとて、肩なる皮盤より兼て携へたりし端かき取り出でゝ手早に認むる程、いつしか一行は

見えずなりぬ。かゝる山中にてと急げど跡だになし、さては道たがへたるかといぶかしくて稲かる女に尋ぬれば、やゝ先に名張道を取り給ひぬといふ。胸おさまりて行くに、やがて追ひ着きぬ。さて行く道は坂又登りつ下りつ幾度となく越ゆるなれば、又「ヨーイコリヤ」など拍子つくれど、今は効なくまさに倒れむばかりなり。獺ヶ瀬といふ里にて茶店にいこふ。空のけしき忽あやしくなりて、まゝ雨を漏せり。一行は外套かつぎつゝ出で立つ。雨はやゝありてやみぬ。上野町を出しより山又山、坂打つゞきて、慰むるものとては染めつくしたる紅葉だになければ、嗜いたく倦み疲れたるに、今又坂道前に見ゆ。ねたしともねたし。されどこゝ越えずては、目ざす名張には行きえねば、いかにせむ。あへぎ〳〵登りはてゝ、降り坂にかゝりぬ。歩一歩を近むる毎に、足のいたみいやましぬ。かくて十町許も降れば大和国山辺郡葛生の里なりけり。茶店に憩ふ。左右前後山をもて囲みたれど、前に水清き名張川をひかへたればやゝ眺よし。

八日午後　大屋戸古墳を訪ふ

本科四年生　中村　亀次郎

一杯の茶、二・三本の菓子を得て、体はあう〳〵本に復す。休息する事暫時、茶店を立ち出づ。これより名張迄凡一里半ときく。何のものかはとはいへ、足のすゝまざるを如何にせん。十町余も来りたらんか。足はいよ〳〵進まず。からくして半里は確に来れり。余が同行者は、かねては皇學舘にその者ありと聞えたる骨皮道人、痩せたれど中々余輩の及ぶべくもあらぬ健足家の一人なり。徒然なるまゝの真面目的滑稽談面白けれど、此の人にしてかくあらんとは、実に予想外なり。余等の先駆は局山・淡齋の両氏、何れも勝れたる矮小の人々なり。カバンは紐長く肩より尻のあたりにあり。さながらカバンの歩むが如しと口さがなき人の評するもをかし。三々五々、隊をなして行く。我劣らじとあせるも、如何せん足は将に×を画かんとす。道は名張川の激流に添ひたる阻悪の径路なり。若一歩をあやまたんか身は川底の藻屑となりはてんのみ。あやうしともあやうし。道いよ〳〵阻悪なれば、足いよ〳〵つかる。行けど〳〵名張は遠し。一里半とはたばかりたるならんと怒るも、時にとりての興なりき。漸にして一の村落に入る。下三谷なりといふ。名張町迄も半里弱と答ふ。先安心と思ふに、足は一層疲労を覚えたり。大屋戸に達せし時は五時に垂んとす。名張は手にとる如く見ゆれば、勇を鼓してすゝむ。名張川を飛ぶが如くに打渡りて町に入る。余等は確に先鋒ならむと意気豪宕たれど、此のいたき足を如何せん。行く事二町余。何処よりか逆もどりの声、余等の不意を襲ひたり。何人の影もなし。影なきに非ず。余の近視三分の二の肉眼にみること能はざるなり。局山子曰はく。藤堂先生及び安元氏外某々なりと。思はざりき先登者のあらんとは。ここは確に町の入口、旅宿はいまだかなたときゝつるに何事ぞ。いかゞせしぞ。逆もどりとは。これをいぶかしむこと多時、路頭に茫然たり。嗚呼失錯々々、大屋戸の古墳を訪はざりしがための逆もどりなり。日は将にくれなんとす。塒に帰る村鳥四つ三つ一つ。空腹と疲労と一時に襲ひ来れり。而して逆もどりのため一層に感じたり。道を本来し方にとる。暫して皆遇へり。隊を合して古墳を訪ふ。

貞元親王古墳

大屋戸村にあり。大屋戸村は名張の西北にあたれり。古、王宿荘といひき。又大宿荘に作る。西北の山麓に椙谷神社あり。宇椙谷なるを以て此の称あり。清和天皇第三の皇子貞元親王を祭るといふ。社背に当りて一の古墳あり。老樹鬱叢として昼尚暗し。古老の口碑によれば、古墳の傍に廻り一丈余の巨松あり。これを標村と称せり。安政年間の大風に倒れたりといふ。此の墳の外に尚塚三つあり。然れどもそは皆小なり。この墳即親王を葬れる処なりとぞ。塚口正南に面す。土は高く塚口を覆ひ、僅に肩を容るゝにたるのみ、匍匐して入る。塚内の高さ凡そ一間。大なる二、三の石を以て蓋となし、三面又石を以て囲む。奥行九尺、横五尺。構造小なり。蓋石に碑文あり。灯を掲げてみる。

清和天皇皇子貞元親王、延喜九巳十一月廿六日、

於二当荘一宮薨去、依而于レ此葬源朝臣兼忠拝書

字画不明の箇処少なからず。読得たる所この如し。或は曰はく。四方の石に文字ありしかど、今は磨滅して見ること能はずといふ。今浮田氏の蔵する所の椙谷神社縁起書をこゝに掲げん。

観化沙門貧者、伊洲名張郡三十余郷の惣社椙谷天神宮は清和の皇子貞元親王なり。永延年中に三河守大江の定基といふ人これを草創し、金殿玉樓魏々と厳に、神人社僧蕩々と列りてほしをなす。四時の祭礼おこたらず。夜の皷鼕々とし、暁の鈴れい〳〵たり。爾より后、天正の干戈おこりて夷狄の一炬に焦土となりぬ。上古の余薫には僅に本殿のみ残而、郷中の氏人等ときはかきはのれい典むかしにかはらざりき。これまことに神威の高して霊験のあらたかなるがいたす所なり。然といへども春秋を経ること幾久しく、甍零て雨ごとに毀れ、樓くちて苫みてり。郷里誰かしらさらん。予ことに再営の願渇飲に過ぎたりといへども、功莫大にして貯うすし。氏人また力微なり。その願とげがたし。吾聞絶たるを……

とあり。以下軛失して形跡なし。以上縁起は二百年前の者なりといふ。その筆者誰たるを知ること能はざるなり。而して貞元親王の遺物なりとてこゝに伝ふる者、

古刀一本　大屋戸村松生善太郎といふもの、親王塚内にて拾ひ得たるものなり。

土器二箇　同村森本久太の祖先久三郎といふ者、宇宮城といふ処を茶園となさんとて開墾の際得たるものなり。

親王御宮図画伝記一幅　峽田村森永惣市の蔵なり。その先祖惣源といふ者は椙谷神社の巫たりしなり。

蜀紅の錦二重蔓古金襴　親王御装束の御料なりといふ。浮田氏の所蔵なり。

此の他、大屋戸村蓬花寺に天神宝蔵と称する二間四方の倉庫ありて、此の中に太刀轡冠等ありしかども、安政の震災の為倒れて軛失せりといひ伝ふ。

抑椙谷神社草創の主たる大江定基は、天元年中の人にして、文書を善くせるを以て世に聞ゆ。父祖の業を継ぎ、後蔵人に補せられ三河守となる。永延二年、故ありて剃髪し、寂昭と称す。長保四年宋に行き、長元七年安に卒す。然るに名張郡短野村一尾山に大江定基の墓ありといふ。果して真に定基の墓なりや否や。疑なきにあらず。亦曰はく、椙谷神社は祭神少名彦尊にして、鳥羽天皇の勅によりてこれを立つと。諸説紛々としてその判定にくるしむ。永延は一条天皇の御世にして、鳥羽は数世の後なり。彼の縁起書に「后、天正の干戈おこりて夷狄の一炬に焦土となりぬ」といへる天正は即正親町天皇の御世なれば、鳥羽天皇の勅によりてこれを立つといふも再建にはあらざるか。思ふにその草創は定基にして、鳥羽天皇の勅によりて少名彦尊を合祀し玉ひ、併せてこれが改築をなし玉ひしならんか。永延は定基剃髪の当時なり。伊洲は山水秀麗にして俗塵を避くるに適せる処、為を以ちて後此に居を定めしならん。その末裔今に存す。定基我が氏神を祭祀せんために椙谷神社を草創せりしを、貞元と定基とは異字同訓なるより混し誤りてかくはいひ伝ふるか。又塚より正南に三町許を隔てゝ、神明宮（大将軍宮、又古宮城といふ）といふ所あり。縦二町余、横一町余。平坦にして、四方繞らすに小溝を以てす。親王の宮跡なりと伝へ、往古より、土人、居をその域内に搆ふることをなさず、村中又別に一区域をなせり。

貞元親王は清和天皇の第三皇子なれども、その事歴審ならず。何を以てこの大屋戸村に移住し玉ひしか。明らかならず。定基の領邑なりしを以て貞元親王の封邑と誤伝せしか。世に功績ありし人にして、その事歴埋没して空しく世人に知られざるもの多し。然れどもその遺物のみを以てはその何人たる事をば断じがたし。世には僭越のこともあればなり。聞く。明治十四年の頃、親王宮趾の碑を建設せしかども、故ありてこれを取捨てたりと。また貞元親王の御墓は既に関東に定められたりとぞ。然れどもこれ又その証蹟充分ならずといふ。

こゝにあること三十分余。疲労よりも空腹かへりて旅宿を恋ふる情を強からしめたり。加ふるに黄昏行くに月なし、辛うじてたどり行くこと七、八町。下横町小田屋に投宿す。

九日　紅葉狩（上）

本科三年生　宇仁義一

今日は兼好法師の跡吊はむ予定なりき。さるをゆゑありて鹿落といふ所に紅葉狩する事とはなれるなりけり。朝まだきに藤堂の君が旧家臣なる某、六十あまりの翁を供にて早く宿を音づれ給へり。けふの案内せむとてなりけり。吾等はこれに驚かされて急ぎ宿を出で立つ。紅葉狩ときゝて、外套もカバンも用なければ家に止め置きつ。されど水罎のみは今日こそ殊に用を覚えめ。持てるものは早く色ある水をつめたるなるべし。紅葉の下蔭に又一しほの紅葉をや添ふらむ。名張の町を行く〳〵名所旧跡を尋ねむとする此の修学旅行に、名もなき鹿落の紅葉狩はいかゞあらむ、とつぶやくものあり。おのれさないひそ。絶景必しも世に用なくといふべからず。鹿落果して絶景の所とせむか。加ふるに木々の梢、二月の花よりも紅なりとせば、詩歌の材料を得べし。昨日の月瀬にほこらむも又快からずやといへば、其の人又うちかへして、あはれ山坂を越えし昨日のつかれには紅葉狩の風流も亦甲斐なかむめりなどいふ。げにや足は皆進まぬがちなりけり。

名張の町の尽くる所、名張川を渡りて行けば、やがて人参峠といふにかゝりぬ。例のよいとまけのかけ声は起れど、詩歌の風流思ひ出づべくもあらず。しばらく此の峠をのぼりくだりして、やがて五、六軒の家居ある所に至る。こゝは青蓮寺といふ所なりけり。おくれたるものをまたむとて、傍の芝生に休らふ。ひろ〳〵として命ものびむ心地せられぬ。案内の人の此のわたりの事ども語れる中に、遙なる山の巓をさしてかしこに五、六軒の家居あり。この山奥にも住めば都の思やすらんと驚かし顔にいふ。げに見るものは山めぐる白雲の姿、聞くものは峯ふく秋風の音のみ。

やがておくれたるものもあへぎ〳〵のぼり来つ。いざやとて、又同じ山路を登り下りす。

おくれつきたるものは又おくれゆくめり。あはれや昨日も今日も山又山の眺、をかしくもあらねばよいとまけのかけ声にいよ〳〵殺風景を極めむとす。

鹿落なる紅葉もいまはかひなけむ　山又山にあきはてにけり

なぐさめつべき言の葉もなくて、只例のよいとまけ〳〵にまきあげゆく。このゆく手に、これもをかしことにはあらねどまろらかなる山の一きは高く見ゆるあり。これを根太山といふとぞ。この麓をめぐれば又二、三軒の家居あり。暗淵とぞきく。こゝに案内の人、此処より奥には家居といふものあらず。外套の如き用なきものもてる方々はこの処に預け玉へといふ。重げにもてこし人々はよろこびてあづけゆくめり。こゝを過ぎて案内の人は路を左の細みちにとれり。従ひゆくに、こゝは又おそろしともおそろしき下り坂なりけり。誤りて一歩をはづさむか、身いまだ千仞の底に至らずして、命は早く絶壁に奪はれなむ。木の根岩の根に足をさゝへ、つるをつたひ木の枝によりて、やうやくこのけはしき所を下れば、ひた走りにもはしりつべき路なり。之もいためる足にはなかなかにくるしかりけり。かくてほと一息つく所は又身の毛もよだゝる、青淵なりけり。底くらきまで深ければにや。これをくら淵といふとぞ。このわたりの名はこの淵より起れるなるべし。

ひるも猶そこひ小くらきくらぶちは　いかなる龍の住かなるらむ

とこそのぞまれたれ。あはれ身には既に山又山を越え、又このけはしき路を下り終へつ。さても鹿落はいづこなるらむ。

案内の人に尋ねれば、この処は既に鹿落なり。この流をさかのぼりゆけば、総て岩山のをかしきながめにて、木々の梢はいままさかりの紅ならむといふ。このくら淵の次を中川といひ、其の奥を奥川といふ。総て之を鹿落とはいふなりけり。

いざゝらばとて、流れに添ひつゝ逆上りゆく。上り下りの苦はまぬかれたり。

山水の眺はいよ〳〵をかしからむとす。をり〳〵見ゆる紅に、奥の紅葉も思ひやらる。

鹿落てふ名さへをかしき山川に　紅葉の秋は盛なりけり

見もてゆくに、水は総て紺瑠璃の如く、波は恰白玉に似たり。岩又岩の間を流れて、去ればまた来り送ればまた迎へしむ。或はかけりて岩をかみ、或はよどみて鏡をなく、さてはしづかに流れてものゝ音をかなづるが如し。其の両岸は又すべてそぎ立つ岩山にて、あふぎ見れば両峯の間、僅に青天を望むべし。こゝに於きて白日為にさへぎられて時ならぬに雨を催し（底本、八字空白）異鳥をり〳〵さへづりて、忽仙境にいれる思あり。其の岩山の眺は、或は削りなしたらむごとく、或はうがちたらむがごとく、さては大なる岩の落ちむとして落ちざるもの、其の岩ほに根をあらはして青雲の上よりのぞめる松の趣、其の間を色どれる木々の紅葉、言ひもてゆけば言葉も及びがたく、筆もうつしがたし。総べてこれ活画の屏風を以て鹿落の両岸を囲へりとやいひてまし。

鹿落川岩の細路わけゆけば　たゞ画の中にわれもありけり

かくて或時は岩かむ流れをとび越ゆるにためらひ、或時はあやふき掛橋に魂を消し、さては又平たき岩をゆく事もあるに、僅に足跡をきざみたるそぎ立てる岩をゆくをりもありけり。絶景は嶮岨の異名とは、かゝる所よりやいひそめけむ。このみち〳〵、常に大北淡齋ぬしが後の方より顧み〳〵来るを見て、よし先なる人には後るともとて、岩の上に尻うちかけつ。折しも颯と吹く秋風、心ありげに峯の紅葉を吹きちらしたれば、

鹿落川峯の紅葉のちりかひて　ながるゝ水もにしきなりけり

と口ずさめる程に、淡斎ぬし追ひ来りぬ。あはれをかしき所にもあるかな。したがひて紅葉とにほふ言の葉も多かむめり。きかせよといへば、先なる人の足早きにこの眺もかひなくてとひ〳〵

そびえ立つ高峯を風やわたるらむ　紅葉たゞよふ谷川の底

水あかしさすがに秋は山川の　ちひろの底も紅葉すらしも

と二首までも打ちつゞけらる。さて君にはといふにせむ方なくて、前の路にてよみたる。

とびこゆる岩間の水のくれなゐに　あふげば峯は紅葉なりけり

いかに淡齋ぬしといへば、げにおもしろの紅葉狩なりやといひて岩を下らむとす、あたりには人のけはひもなかりけり。先なる人やまつらむとて急ぎに急げば、左の方にまがりたる所に岩ほの床ひろらかにしきつめたるに、眺めも一しほをかしき処ありけり。こゝに師の君二人、案内の人、かの供なる翁の人、其外三人四人にて円居のむしろをひらきゐしこそうれしかりしか。枯木をあつめて火をたけるは、あたゝむるものやあるらむ。はや割籠を開けるものありけり。藤堂の君が用意の物どもすゝめ給ふに、案内の人も又ひさごを傾けて盃をさし給ふ。あはれ鹿落の紅葉もこなくばとぞおもはれし。この眺ありてこそとは心つかで。こゝに案内の人の千しほにそめし紅葉を手打れるを見て、

旅なれば紅葉はみちにちりはてむ　何をかけふの家づとにせむ

よし。あはれもふかき言の葉の二枚三枚手折らばやとて、いかに坂倉ぬし、この鹿落の絶景に紅葉がりしながら紅葉にあへたる言の葉なくては口をしからましといへば、したり顔に、

岩根ふみ木の根つたひにわけくれば　滝も紅葉も世に似ざりけり

としづかにうちするもさすがなりけり。さて又福舎ぬしが、

しかすらもおつる岩間にわけいりて　世にまだしらぬ紅葉をぞ見し

とうたふに、平野ぬしも、

鹿落川峯の紅葉のかげ見えて　色ある淵にやまめをどれり

猶おかしきも多かむめれど、先なる人の心にかゝればいざやとて追ひゆく。

九日　紅葉狩（下）

本科三年生　安藤正次

水と石との跌宕たる大景を観、紅葉緑樹の参差たる好致を賞しつゝ、潭水藍の如きほとり、巖牀に坐して昼餐を終へ、猶奥深く其の勝をさぐらむとす。

行く手を見やれば石径既に尽きて、又いかにともすべきやうなし。即背後の小径を攀ちのぼるに、樵夫もまたさかならでは通はざる所なめれば、道と名つくべき程の面影もあらず。蔦葛道を鎖して人のゆくをとゞめ、荊棘衣を捉へてわれを進ましめず。此をはらひ彼を披きて行歩頗かたし。

見あぐれば幾仞の岩石累々としてかさなりあひたるさま物凄く、そを装ひたる紅葉は霜に飽きて千汐の色ふかし。されどようせずば踏みはづしぬべき足元のあやふさによくも見やれず。げにや道の幅はたゞ僅に片脚をふみとめうべき程なるに、折々は流れいづる水の為に滑らかに苔むしたる石上をおそる〳〵たゞ一条の藤蔓をよすがにてかよふ所もあるを、さて眺めおろす方は竜もひそみぬべき深淵うづまき流れて、おちなば呑まむとかまふるに似たり。かく戦々兢々として、或は半くづれ、或は傾きかゝれる道をゆきつゝも、猶対岸の風景の見捨て難し。

くづれ落つる山の細道たどりつゝ　猶もそかひの紅葉をぞみる

路やう〳〵降りて、また河にいでぬ。暫時こゝにやすらひて徐に両岸をながむるに、幾その年月をか経けむとおもはるゝ古巖相列り、或は削り成せるが如く、或はたゝみあげたるが如く、天に朝して峙ち、水に臨みて蟠り、或は出で、或は入り、千態万状、実にその奇をきはめたり。而してこの奇を彩れる紅葉の美亦いひしらず。満山皆紅といふにはあらねど、濃き淡き相交り、巖低き岩陰こゝかしこに紅を点じ、さては緑樹の間に秋の色を示して山姫のゆはたの絹とみするなどいひつゞけむにも詞なし。而して両岸の間を奔馳する水流亦凡ならず。虎の如く蹲れる石にくだけては竜の如く躍り、断崖にかゝりては響雷の如く迸ること電の如し。岩にせかれて漲り落つる水は霧となりて五彩をあらはし、流れ来る川波は変して泡たつ事雪を吹くに異らず。たぎつ早瀬を流るゝ浪は岩をも嚙まむ勢あれど、深淵に入りては隠に沈みて動かざる、将物凄し。右に走り左にめぐり、前にわかり後に合し、千々にやうかはりさま〳〵に趣異りて、所謂その変化の妙を究むる所、これを描くべき筆なきを如何にかせむ。ここは遠く人寰をはなれたる所なれば、濁れる世の塵のかゝる事なく、神代ながらの天地の心地して、耳乏は只鏨々たる水流の音と、時に山の峡に叫ぶ猿のおとをきゝ、目にはたゞ水石の奇と紅葉の美とをみるのみ。心神恍惚として終に我なく人なき境地に至りぬ。

此の山水一帯の勝景地、僻にして人の住きかふことなく、たゞ旧藩の頃藩庁の米穀輸出を禁じたる時に際して、人民の夜密に之を負ひて大和曾爾にいて之を売却せし一間道となし居たるのみ。故をもちて詩人騒客の之を訪ふものなく、勝地徒に埋れ果てゝ世上に知られざりしものならむといへり。おのれこゝに遊びて之に酬ゆべき雅思なし。たゞ腰折歌の二つ、三つ、

紅葉せるそかひの山の岩陰に　あそぶ猿のかげも見えけり

山風にましら友よぶ声すなり　峯の紅葉の枝うつりして

そゝりたち凄き深山の岩根をも　ゆかしく染むるもみぢ葉の色

水の音のさやけきかふち岩かねの　奇しき深山に紅葉てるなり

此の景色にまけてよき歌も出で来ずといはゝ、人はまけじ魂と笑はむかし。さて亦山川君はかくぞうたひたまへる。

かゝる山路に人しれず　幾長秋かにほひけむ　もゆるおもひをいく年か

かゝる山路になぐさめし　浮世の塵にけがれしと　思ふはわれもかはらねど

あかき心を山姫に　かけし契のえにしにか　一枝はゆるせわれにもと　いひつゝよればしかすかに　人にしられしうれしさを　から紅の薄衣に　つゝみかねてぞ　もみぢ葉の袖のわたりに一葉ちる

なほ人々のもありけれど、えしるとゞめず。いつまでもかくてあるべきにあらねば、いざとてうちたつ。幾度か石を踏み水をわたる。彼方の岸、此方の渚、かゆきかくゆきやゝ広らかなる所にいでたり。亦こゝに憩ふ程に、遙の高峯より呼

ぶ声す。ましらにもあらず。松風にもあらず。紛ふ方なき人の声なりけり。その方を見あぐれば、よづべき方もなく聳えたる山の岨道に幽に人の蠢く影見ゆ。さてはわが友垣の道ふみ迷ひたるなむめり。いで呼び下さむと声を限に叫べば、彼の人々もまた声たてゝ容易に下らむとはせず。意の通ぜざるにかとさま〴〵に手段をつくす程に、やう〳〵下り来るけはひなり。然も猶ためらふが如し。いかにしたるにかと見れば、ためらふも理なり。下らむとするわたりは嶮崖聳えて、足ふみとゞめむもかたげなる所なればなりけり。やがて木の根岩角にすがりて真先に下り来れるは大塚氏なり。次に山川・近藤・三浦の三氏と藤堂・中西の両君及藤堂君の老僕となりき。いかなる故ぞと聞けば、あな笑止や。老爺の案内によりて捷径をとり、抜駆の功名して我等に一泡ふかせてくれむとの心なりしかど、路を過てるが為、はからずも此の運命には陥れるなりとぞ。人々皆うち笑ひて之を鹿落（カオチ）の七騎落となづけぬ。蓋鹿落とは此の山の字にて、七騎落とは嶮崖を落ち下れるを意味するなり。打もらされて密に落ちゆける落武者の義とはゆめなおもひとり給ひそ□。

茲処にて藤堂ぬしよりの煎豆の馳走をうけ、やがて亦例の道を泝りて、大和の曾爾より流れ来る二水の落合に到りぬ。両岸の紅葉こゝに至りてやうやく尽く。指顧に暇なかりし紅葉もその跡をかくし、山勢亦嶮峻ならずして巌石の奇見むに由なし。余等亦行をこゝに止め、道を右にとりて山上にいづれば、たゞ薄のみ茫々と生ひしげりて、人の肩をも没するを見る。土俗、之を八幡長者の屋敷跡といひ、対岸の平地を戸田屋敷と称へ、長者の臣下の住居せし所と伝ふ。而して三国地誌等の記す所によれば、この長者を道観長者とせり、道観とはいかなる人ならむ。詳ならねど、兎に角この近隣九郷を領せる長者にて、南都東大寺の二月堂の再興は、実に此の長者と若狭の南無観長者と相計りて所而して、その材はこの八幡山にとりたるなりといふ。その所由によりて毎年二月堂修法の時、若狭より護摩木、一之井村よりは乗炬木十二荷（百五十束）をいたす例となれりなどいひ伝へらる。そは強俗説のみにあらず。徳川氏の世にも猶ひきつゞき行はれ来れるものにて、現に二月堂の内には一の井坐とて此の里人の籠居する所さへあり。かくの如く事実は存すれども、道観の為人は明にせられざるなり。増鏡おりゐる雲の条に道観上人といへる人みえたれど、果して同人にかいぶかし。又三国地誌には宝治三年東大寺古文書に、

御領伊賀国名張郡新庄水田云々。二月堂二七箇夜行法続。松千二百把、料田六段、浄土堂六段。此田者法眼聖玄之伝領也。

とある文中聖玄といへるは、若しくは道観の別名かとうたがへり。されどもいかゞあらむ。

此の所を過ぎ、小径を攀ちて或は登り或は降りて、何の興趣もなく何の変化もあらぬ山また山を前後左右にながめて、羊腸たる坂路を歩むこと凡二里余。路やうやく降りて、始めて坦々たる大道にいでぬ。是実に大和曾爾に通ずる本街道にして、右すれば名張に到ること易々たるべし。顧みれば踏破し来れる山嶺、秋風高し。

九日　紅葉がりの帰るさ

本科三年生　沢田米吉

逶迤として帯のごとくめぐれる細道をたどり〳〵て、面白かりし幽境に足のはこびも思はずはかどりけむ。早くも山の麓にいでたり。こゝは何処と案内の者をかへり見て問へば、曾爾街道といふ。伊賀国名張町より大和国曾爾谷に通ずる本道なるべし。路は経が峰、高天原が峯の麓を縫ひて、蜿々として長く屈曲したる道なり。こゝを左に上れば曾爾谷に至り、右に降れば名張に行くべし。近来の天災に路甚あれ、地くづれ、岩おちて、甚難渋なり。村の人々こゝに集りて所々に小屋をしつらへ、持場々々の路普請に忙はしげなり。村長か将助役か、山高帽子戴きたる男、自指揮して山々谷々より石土を荷はせはこばせなどしてあり。かけ声鼻歌中々面白し。五、六町行けば、巾広からざれども一条の道路山腹に沿へり。

山高ければ路従ひて登る。風景甚佳なり。松の緑をつゞる柞の紅葉色濃にて、その天然色の配合は実に丹青以外の妙ありとやいはむ。

松がえのみどりのきぬに山ひめは　紅葉のにしきたちかさねたり

殊に土橋のほとり、岩益奇に□樹その上に繁茂して溪流に倒映せり。返り見れば山又山のその中に、経が峯は突兀として聳え、岩又岩のたち重れる状筆にも及びがたし。眷恋去るに忍びず。若一々佇立して之を賞愛せむか。一歩に一憩。二里の途いたづらに日を暮すなるべし。

今朝名張をいでゝより一歩も平坦なる路を踏まず。只おそろしき難所のみにて、棧橋かけたる路に当りては岩に取りつき、渦巻く淵にのぞみては木の根を力草とし、一歩を過つときはたちまち身を粉砕せらるゝ思ひありき。かく人々の辛き思ひをなして気をはり汗ながして歩みゆく時には、いかでか足の傷をも覚ゆ可き。然るを今は既に数十の峯、数百の谷越え去り、渉り尽して心漸くおちゐたれば、脚はとみに疲れを覚えぬ。徐歩して行くに従ひ、山はひきく谷ひらけ、溪流左折せる処、翠松亭々として岩上に茂り、下には水滚々として湍る。水車のトウ〳〵ゴトンと米をつく、真個にこれ好画題なり。

くたびれて石に躓く山路かな

しばらくして青蓮寺村に至る。石に刈田を見おろし、後に山畑を負へり。村人は昨日今日麦まきに忙はしげなり。一笠一鍬、晨は星をいたゞきて田畝を耕し、夕は月にあこがれむとにしもあらねと、思はぬ田毎の月にいぶせき己が姿をてらさる。あはれ見るかげもなき襤褸を身に纏ひ、一生涯をかゝる片ゐなかに送る彼等が身の上は。

長承三年及び嘉暦二年の東大寺古文書に青蓮寺云々と云ふは、こゝのことなり。民家七、八十戸はあり。路ばたに鎮守の杜あり。玉垣朽ち倒れて藪枯縦横に這ひ纏はり、礎のほとり瓶子くだけて散り転べり。何神を祭れるにか。かくても神の祟はなきものか。稽首してこゝをすぐ。溪をへだてゝ流にちかく掌大の土地をひらきて、桑茶さま〴〵の草木をうゑ、しきりに草取りをる一人の農夫あり。背広の破れ洋服の表裏よりツキ当てたるを着て、金沢ネルの股引之もツキ当りて色変りたるを穿つ。腰には染めさして黄色になりたる兵児帯しめたり。鋤鍬執りてのはたらきぶり、之を薄給官吏の御鉢はらひが俄百姓とす。かく薄給官吏と見下し御鉢はらひと詈れど、彼等の抱負は中々見上げたるものなるべし。時期によりては口角泡を飛ばして天下の大勢を論じ、村長位は取りてのくべき彼が面魂。世に碌々として長安名利の境をはなるゝこと能はざる者とは大なる差あらむ。かゝる幽静閑雅の田舎に住み、孜々として桑田に耕し、粗衣粗食して世外伯をきどる者、之を高楼に置酒して美人の膝を枕とする者に比すれば、胸懐の酒脱いかばかりぞや。

行人甚稀に路数条に岐れ、幾度かふみ迷はむとす。右に曲り左にをれてゆく。辻合に茶店めきたる家あれば、茶すゝらむとて走り入るに、五、六歳の娘一人。守る主なき空家なりけり。

年寄も家にゐがたき田刈時

足の労れたるをも覚えず扶□朗吟し、田かきの牛を驚して大に閉口したることあり。田畝の細道ゆくとて、彼と咫尺の間に遭遇す。大将、我々が異状のいでたち傍若無人の諧謔にいかに胆を冷しけむ。目をすゑ頭を下げて逃げむとあせる。その有様実に噴飯の極なり。我々も亦意外の珍事に恐として懼れ、冷汗ながして只彼に路を譲るのみ。

進みて中村に至る。民家六十ばかり。延久・応徳・宝治・養和・長承の年間、東大寺旧記中村の条に中村荘と云へるは此処なり。路のほとり、名張八郎が住みける宅趾あり。方十間ばかり。竹藪につゝまる。中央に小祠を建て、その霊を祀る。枯れたる尾花の袖のさびしげに人さし招きてそゞろに古を忍ばしむ。磨き上げたりけむ石垣も今は全く破れて、つたかづらは網の如く這ひ広がり、荒涼として昔の影だになし。朽果てたる切株は昔の人にめでられし桜の末路ならむ。僅に

名残を止めし喬松、娑婆として翠色濃に、皆古英雄を忍ぶ媒介たらざるはなし。帳然として佇立するをりから、耳うち破られたるは柿の梢に囀りいでし百舌鳥の一声。

村を出でむとするに、中村寺と云ふ寺あり。古き塔ありときけば見て行かむとて、二人、三人と主人の法師を訪ふ。柱かたむき軒朽ちて、僅に雨露をしのぐべく住みあらしたる古寺なりけり。木魚の声かすかにして、打磬のひゞき扉より洩れ、念珠爪繰る音読誦の声に和せり。はらはぬ庭には草茂く生ひ、萩の幾株霜かれたるに、梅の二本三本、若木ながら趣あり。香にさそはれて鶯の来鳴かむ春もありぬべし。寺僧来りて具に寺の縁起由来をかたる。記すべき程のことにもあらず。塔は延長八年の遺物なり。石にて作り七、八重になれり。文字あるやうなれど苔むしてよむべからず。

寺を辞し去りて路傍の一茶店にいこふ。饑ゑし時には味なき物なし。常ならば一つだにのむべくもあらぬに、喉かわきはら空しくなりたることとて、一抔の番茶を甘露と味ひ、二箇の蒸甘藷を何の苦もなく平げて、胸元なで下しやうやく腹を肥したり。

血のやうな御茶を甘露と舌打て

又、

蒸甘藷にはら肥したり誰もかも

いざ本隊におひつかむとて、疲れし脚を焦立つこゝろに鞭ち、中気者などの歩むが如く痛々しきさまにてポツリ〳〵と足はこばす。誰が忘形見にか。路傍にすてたる竹杖ひろひ取り、之を力草に程なく本隊には加れり。

右に世古口の村を望み、左には凡そ二、三町が処、名張川流下し暮色曖々たる中に名張の町を認む。この間稲田穣々として豊熟す。名張近傍は初秋の天災に禍苗を蒙りたる土地少しとて、農夫の喜云ふべからず。蕎麦の花白く幹赤きか大根蕪の青葉の中に包まれたるも豊けく見ゆるに、畝打つ女、牛追ふ男、河雑魚捉へて帰る里の児ども、いさましげなり。

秋のくれ賤の男の子か畦路を　小歌まじりに牛追ひてゆく

案内の者、路ばたの鬱蒼たる森を指して云ふ、これ市守の森なりと。倭姫世記に曰はく、

崇神天皇六十四年丁亥迂二幸伊賀国隠市守宮一六年奉レ斉矣

と、按ずるに、昔、皇大神、和洲宇陀郡篠幡宮より迂幸せさせ給ふ途上、暫この地に鎮坐まし〳〵て、更に是より穴穂の宮に迂らせ玉ひし遺趾なり。然るに社殿敗壊し僅に石鳥居を存するのみ。村民専造営を計画し、近きころ宮を名張町に遷し建てつ。俗、呼びて恵比須堂と云ひ、其の地を夷町と称く。中世まで毎月六日、市をこの地にひらきたりと。現今なほ七月八日・十二月廿三日、名張市とて隣国より幅湊して互市す。蓋その遺風ならむ。市守の名空しらずと云ふべし。

こゝより一町ばかり西北に、幹は三か、へもあらむと思はるゝ二俣の老松あり。丈たかく枝四方に茂生す。二、三百年以前のものと見ゆ。旧街道は今の丈六村よりこゝをすぎ、たゞちに世古口村に通したり。されば今に至りて坂下・丈六・瀬古口の村々の民居市廛に類し何々茶屋などの古名を存せりとぞ。さて当国を漢にたとへて云はゞ蜀の地とやいはむ。四方は山河を以てかこみ内に沃野を有す。その形勢実に天嶮なり。何の国と対すとも俯して之を制すべし。往昔天武の帝事をあけむと思し立たして当国の名張の横河を渡りてこゝをすぎさせ玉ひぬ。時期に由りてはこの天嶮によりて都の軍を専この国に防がむと思召し玉ひしにはあらざりしか。

日は既に山のはにかくれて名張川きりたちのぼる。ネギ豆腐買ひて家路へいそぐ老爺がかすかの河岸に幻に見やらるゝ頃、名張町に達し再小田屋に泊す。窮屈なる八畳三間におしこめられ疲れて結ぶ手枕には秋夜も長からず。一日の清興夜半の夢に入り睡思甚たのし。

十日その一　名張出発より比奈知昼食まで

本科二年生　岡田隆吉

此の日は天気快晴にして一点の浮雲もなし。我が親愛なる学友等は七時半を過ぐる頃旅装を整へ中西先生に随ひて藤堂先生の屋敷に赴きぬ。先生の居地は名張陜間にありて一段小高き所なり。余等先生の勧めによりて居間に通りて種々の旅行談をしつゝありし程茶菓子を与られぬ。しばらくにして藤堂先生の先祖の朝鮮征伐に出でられし時の武具類及び当時諸侯と往復出し書翰などを示されき。時に八時四十分頃なれば一仝藤堂家の厚遇を謝して帰途に就きぬ。道に高等小学校に立ち寄りたり。此の校、校則整粛にして学生には制帽の設ありて登校するものは必ず皆着袴せり。是より皆足を転じて兼好塚を差して行きぬ。しばらくにして宇流富志禰神社に達しぬ。倭名抄に粳米和名宇流之祢と見え、大殿祭祝詞に屋船豊船宇気姫命、是稲霊也、俗詞宇賀能実多麻とあり、即ち土人の此の神を祭れる所にて村社あり。謹みて参拝す。是より名張町字平尾を通行する際に右手に不許葷酒入山門と記したる石標をたてたる寺あり。即藤堂家の菩提所なりとぞ。この所を過ぐれば連綿たる山岳、鬱々たる樹林と水清き名張の横川点綴せる茅屋の相集まる所、井に水たむ(ママ)小女、田に耕作する農夫、都会の地に住むもの、知ること能はざる境遇一として目を楽しめ心を娯ましむる者ならざるはなし。行く事しばらくにして比奈智村大字下比奈智村に達したれば昼飯を喫す。時に十一時四十八分なりき。当村に鎮座ます無格社蛭子神社は字柳原にあり。境内拾坪、社殿取壊、今纔に石鳥居を存す。村民専造営を計画す。蛭子神を祭る。祭日一月八日陰暦一に市守宮と称す。崇神天皇六十四年丁亥十一月十八日倭姫の命、天照大神を奉じて此の地に至り供斉する事二年倭姫世記本社即其の旧地なりとぞ云ふ。毎歳祭日土人市場を此に設く。至る物群をなすといへり。村社なる式内名居神社は宇宮の谷に在り。境内七百十三坪、末社七宇、氏子百十戸ありとぞ。この二社を此の地に土人まつりて国津大明神と尊崇せり。

十日その二　国見山に登る

本科三年生　山川鵜一

比奈地村を後になして一行の足は国見山の裾にかゝれり。田井庄と呼ばるゝ寒村は点々として其の麓に碁布せり。一行は何の求むる所ありてかゝる所には踏み入りし。こゝには脱世出俗の出世問漢ならびに岡の法師といひしが静に道念を凝し浮雲の如き人世の苦を夢と観して青苔色鮮なるほとりに安臥しつゝあればなり。

一行は村役場より差添へられたる一田夫を先立たせて屈曲せる山道を登る。嶮難ならぬ国見山は遂に登り尽して頂に到りぬ。あさましき世のためしにもれぬ廃寺の軒は松柏枝まばらなる隙間を通して顕れたり。言朴にして結へる髪の形さへ噴飯せられぬべき田夫は吾が一行が左右より問ひかけむとする雑問をば払はむともせで一心に唯吾が記臆せる暗誦を繰返さむと務むるに似たり。

兼好一度無常の風に浮世のさがの頼みがたきを果敢なみて茲を常住の座臥と定めたる草蒿寺は何時しか桑田と化し去りけむ。こゝに蔵したりと伝へたる彼の遺愛の什物すら今は大かた散逸せりとぞ。案内者は指示能く尽せども万事空なる哀みをば如何ともするによしなし。田夫は足早に一行を導きて廃寺の軒を廻りて背後の丘上に出でぬ。風はまばらなる秋葉を落しさびしげなる日光は暗憺として四辺をさまよへり。兼好の墳墓は一畝あまりの所に二歩ばかり高く盛上げたる塚なりけり。一切是空の末の世は片砕せられたる石像の転々として小竹の間に狼藉たるを残すのみ。

満目の蕭殺は是のみには止まらず。頑然として横る巨大の石あり。田夫は口を極めて其の由緒を説けり。曰はくこの石は嘉永二年に兼好の五百回忌を執行せし時、其の紀念にとて名張河の底より引出しゝものなり。幾百人の人夫を要せしこの無用の長物は殆一郷のものを泣せたり。さりとておもひたちし事なれば中途に捨てもおき難しとて、やう〳〵こゝに引上げたり。引上げはしたるものゝ哀しきは一郷の力の之を建つべき資に乏しく、既に碑面は刻むばかりにしつらへたれど尚其の運にも至らで斯くは春秋の久しきを風雨のまゝに任せたるなりといふ。花

は盛に月は隈なきをのみ観るものかはと喝破したる彼の解脱の心には身後の墳を新にせられむなどはおもひもかけぬ事なるべけれど、現世をたのむ凡夫の思ひよりは又あさましき限ならずや。

武を以て鳴りし時の兼好吾之を言はず。法の師としての兼好吾之を知らず。世が世とて干戈頻りに動き人は唯武に狂せる時に際して、能く一枝の筆と一基の硯とを引き寄せて潜心文筆をあやつり、脈々絶えなむとしたる文学を支へて吾が文学史上に少からぬ一異彩を添へたる。予は此の一事に於きて最兼好を多とするものなり。この一世の伝灯者、文学史上の一勇将は五百載の今日果して如何なる報酬をか受取れる。墳上の碧苔長く露にぬれてかことかましき蟲声の無限の情をかたるのみ。

由来詩人の末路に好運なるはなきぞかし。詩人に薄運おほきは薄運おほきにあらずして薄運を以て之を遇するもの、おほきなり。詩人も同じく人の子なり。何とて親の腹より薄運のみをいだきて生るべき。しかも其の末路の惨憺たるは古今其の軌を同じくせるがごとし。月下にみなぎらせし紫女一掬の愁波は今何所の岸にか漾へる。渇ける人間に慰安の水を与へたる巣林子の声魂今何所の空にかさまよへる。詩人は常に人に甘き泉をさゝげむとするに人は却りて常に詩人に毒汁をそゝがむと務むるに似たり。詩人偶世に遇せらるゝ事なきにあらずと雖ども、天下多数の人心は常に渠を遇することを忘れ果てゝ、渠をして常に悲哀の音にむせばしむ。いにしへ既に斯のごとし。今も尚斯の如し。未来又将に然るべし。詩人の生涯真に哀むべきかな。詩人の末路真に弔すべきかな。しかも秋日は煌々として古今其の観を改めず。流水は潺々として千載その色をかへざるなり。詩人は其の間に放浪し其の間に座臥し、以て人間以外の境に悠々歓楽す。人生の酷薄何かあらむ。人間の残忍何かあらむ。詩人の知己は天然なり。詩人の伴侶は造化なり。思ひてこゝに至れば吾が兼好の墳墓にそゝぎたる一滴は空しく兼好の嗤笑を招きしに過ぎざるべし。噫。

翻然として沈思より醒めたる吾は、墳墓を辞して再一行中の喧囂に没し去られ、終に個中の人となり了りて嬉に談笑の内に山を下りぬ。

兼好の遺品

田畝を一上一下して種生村の寺院に到る。区長為に寺僧を呼びて其の蔵せる遺物を運ばしむ。寺僧円顱を撫し且謝して曰はく。往昔頻年の兵火は殆幾多の遺品を焼燼して今は其の幾何をもとゞめずなりぬと。彼は兼好死後の遺物として世に名高き其の一品をだに伝へざるを悔めるに似たり。三五朽敗せる函には兼好自筆のものとて短冊一枚と伊勢物語八橋の一節をかきつけたる一片紙とあるのみ。其の短冊には能く人口に膾炙せる。

みさびえの底の玉藻はみだるとも知らるな人に深き心を

歌からさへ渠をしのぶにこよなきたつきなるに知らるなのな文字を脱したるは放逸なる渠が面貌彷彿として躍動するを覚ゆるなり。其の他は土佐光成の筆になれる兼好の画像と兼好家集の写本と他に二、三点あるのみ。万円満を望まぬ兼好にはこよなき身のかたみなるべけれども、懊悩を脱し得ぬ身には中々に物足らぬ心地のせらるゝなり。

予等は猶兼好より思ひ起して彼の伊賀守成忠が息女小弁のことを問へり。寺僧は彼が墓所の慥ならぬよしをいひて国司は上野に居たるべければこの地にはあるまじといへり。其はともあれ。兼好が家を捨て身を捨て行末頼もしき武辺の望をもうち捨て円項緇衣の見るめはかなき行脚の僧となりはふれて行雲流水の外によるべと頼むものもなしとあきらめさするまでには、言ふべからざる悲惨と忍ぶべからざる苦患とが伴ひたること疑ひなし。兼好をして斯く浮世の無常を観せしめしは彼の小弁も其の原因の一部たらずはあらず。蒲口とありし時は世に鳥烏をさへ射落して武辺には並ぶものなき剛のものなりしかども、あたらかよわき女性の魔気に魅せられては世にもあさましき円顱の姿と化し去られたり。化し去られた る兼好は更に貴き法の師と生れかはれり。兼好の身に喰ひいりし女性の魔は却り

て兼好を凡夫より脱せしめて貴き境に誘ひ行けり。女性の魔は兼好にとりては実に真如の影にてありけるよ。

言思はず他岐に渡りて日記の本意を忘れたり。いでや日は稍傾きて前途は尚二里を余せるに、兼好の為人のいはまほしきはおほけども、其は道すがらの語草に譲りてむとて、寺には心ばかりの代を手向けておぼつかなくも阿保をさして道を急げり。

十日その三　我が国の瑞西

本科二年生　大北正吉

素より山国と聞いて居た伊賀。来て見ますと嘗て理想に画いたよりも遙に勝て居ます。実に我が国の瑞西といふも過言ではありませぬ。それは月瀬があるからではありませぬ。赤目があるからでもありませぬ。山が壮厳に立て居る処、水が静粛に流れて居る間に絶美の神女が宿て居ますそうです。実に伊賀は美の山国です。

山道

種生から阿保まで二里許の間は人家は一もない山道です。時は秋。而も夕暮。此の淋しい山道を越さねばならぬのです。道は国見の山腹を穿つて通して居ます。名張川の上水は千尋の下に沈黙して岩間をくぐつています。木枯は峯の紅葉を払ふて薄墨の空に紅の浪をたゞよはして居ます。猿の叫びが山彦に響いて鼓膜を急撃します。もし西行が此の間に身を置いたならば……心なき身にもあはれはしられけり猿なく山の秋の夕暮……と云ふたでしよう。いつの間にか星は天の一方にきらめき出しました。里は見えませぬ。山はいよ〳〵静です。労苦と快楽とが此の間に潜んで居るのです。谷は山を抱き□は峯に連つて自然に水墨山水の一幅を画いた。此の模糊とした画中に吾々は徘徊したのです。吾々は痛い足をはげましつゝ此の画中に彷徨したのです。忽谷の一隅に灯火を発見した時吾々はどんなにうれしかつたでしよう。丁度難破船が滄海の一方に灯台を見付けたよりも嬉しかつたでしようよう。

宿屋

惟使主人能酔客。不知何処是他郷……旅をして宿屋で丁嚀にせらるる程嬉しい事はない。よし粗食でも破茶碗でも心切に饗応せられた程嬉しい事はない。

午前六時頃、二里の山道を越えて神戸屋といふ阿保の宿屋につきました。例に依つて茶菓子は難なく征伐せられました。風呂もすみました。配膳はできました。例によつて飯はこはい（ママ）。将軍箸を揮つて決戦を初めた。惜いかな兵士が奮はないので遂に討死しました。此の将軍は誰でありましたか実に我党の砲兵大佐某であつた。私はどうしてか耳があつく面熱し大にねむくなつたので其の後は何も知りませぬでした。

十一日　躊む山中

本科二年生　安元久雄

故郷にかへると見てし嬉しさも　さむれば阿保の旅路なりけり

ふと驚けば旅舘の灯火かすかにして鶏鳴暁を促しおきよ〳〵の声さわがし。さても聞えぬ方々よ。今朝のいとさむきに今暫ししづかにし給へや。さばかりいそぐべきことかは。まいて昨日の疲もあるものを。あなねむたや。いま一時もまどろまほしなどつぶやきつゝかたへの人を制すれども詮なし。早一人二人づゝねむたげなる眼すりて起き出づ。己も後れは取らじと心の駒に鞭うちて急ぎ床をも収めさせつ。ほどなく朝餉もをはりぬればいざとて出で立つ。時に六時なりけり。

今日は昨日にまさりて天気もよし。山国なればにや。早霜おきそめて手足のさむさも一しほなれば、

刈りとりし山田のあせにおく霜の　白きを見れば冬は来にけむ

など口ずさむ。阿保の町より田畠の細路を辿りて右に入ること三町許。折からむくつけき一婦人のかたへの家よりかけ出でゝ吾等の旅装を何とか見けむ。若し蟲喰の鐘を問ひ給ふにはおはさずやといふ。的をさゝれし吾等は一同口をそろへて

さなりと答ふ。いざ此方におはせ。案内申さむとて先に立つ。石畳をよぢて岡に登る。一小祠あり。境域やゝ広し。額面に郷社大村神社とあり。社宇またうるはし。本社の東に鐘堂あり。「へ、御一同様に申しあげます。この鐘は厚サ三寸五分、直径二尺八寸、廻リ一丈五寸足らず、たけ四尺五寸許もあり申さむ。明徳二年に鑄て文禄三年の頃より蟲喰ひ初めねとか。（明徳二年より文禄三年までは年を経ること二百〇一年なり。）伊賀郡依那具村藤原勘左衛門といふもの云ひいだしてより蟲喰鐘として名高くはべり」とうち具したる案内の口早に物がたる。思ふに此の鐘は必昔時神社仏混淆の時寺院に附属せしことうたがふべからず。今はその寺院まびらかならざれども、大村神社記に曰はく、

本社は、永正中火災に罹り社殿灰燼に帰し、天正中再び兵燹に罹り、十五年丁亥十二月之を再建し、元和七年辛酉九月更に之を改修す、云々。

と見ゆれば、蓋しこの時にあたりて寺院は更に再興せざりしものなるべし。残鐘は今日に至るまで彼岸より彼岸の間に於てその蟲糞を落すとか。果して土俗の口碑の如くならば世には不思議の蟲もあるものなり。鐘の音はいかにとつきて見れども更に常に変らず。ねもまたいとよければ、

常ならむ御法の鐘をなりとかて　蟲喰めりとはいひはじめけむ

あはれそのかみ仏の為とていけるこの鐘朝夕に響かぬくまなくなり渡りて憂世の夢もまさしきつらんを。今はその寺院もたえはてたり。かつて聞く西洋諸国に於きても「レール」を喰する蟲もありとかや。さればこもまたあやしむに足らざるべし。

大村神社は阿保村字上川原に在り。神護景雲元年丁未之を創建せり。伊水温故曰はく、

一大　村　神　社

本　社　三　座　武甕槌命　天児屋根命　相殿也。神護景雲二年観請云々。

武甕槌命、神護景雲元年六月二十一日、常陸国鹿島を出でゝ尾州吾陽村又勢州桑名に暫く宮居してより、伊賀の中山を踰え、壬生の郷に止まり、爾より馬野坂下御厨屋北山上津の社に居て、夫より当宮大村の社に留る、又夏見村に遷る。

亦一説に、簗瀬留其次至夏見。

延喜式伊賀二十五座の随一、由気忌寸を祭りて大村の社と称す。此宮地は忌寸の官称なるを、鹿島来現より武甕槌の本社と也、忌寸は摂社となる。猶謬りて忌寸をば八幡と号す。大村を今大森といふ、云々。

とあるを見ればその由緒また浅からず。今は郷社に列し神さび立る老松古杉葱々として枝を交へ、近村中の大社として地方衆人の崇敬する所なり。

上川原より再阿保に帰る。阿保は市場の殷賑たる本州の第三に数へらる。初瀬街道にありて西は大和、東は伊勢の神宮に達する駅次なればなるべし。されど繁華に目馴れたる吾等には阿保の町もさばかり賑しともおもはれず。この村のはづれにあたりて阿保親王の御墓ありと聞けば、三浦の君と余とははじめてなればいでや詣でましとて行く、田の細路をたどること一町ばかりにて御墓前に達す。御墓は稍々小高く盛りあげて岡をなす。樹木鬱蒼として周囲は玉垣もてめぐらされたり。制札には垂仁天皇の皇子息速別命の御墓云々とあり。今姓氏録を按ずるに、阿保親王の御墓なりとは地名より附会したるものなるべし。先しづかにをろがみまつり、たち帰れば先発隊ははや後影さへ見えず。例の跣足もて羽根より長田川の堤に出で、比土村に到りて後の一隊に追ひしきぬ。こゝより一行は参々伍々、或は右手に取り或は左に取る。己は左の一隊に加はる。道は例の上り下りの小山路にて記すべきほどのこともなし。美濃波多村に到り御厨屋の旧地を問へども知られず。遺憾なれども詮なければ直に新田に到る。新田はやゝ町をなし戸数二百戸許、初瀬街道にあたり阿山郡上野町を趾ること四里二十町余にてその繁昌阿保に次げり。児塚・馬塚はこの町より西凡三町、上薦塚は東北凡五町許の所にあり。今は松の木立のみ生ひ茂りて道踏み分けて問ふ人もなし。もとの道に立

ちかへり、とあるなかはてに到りて後の一隊をまてども来らず。稍々小高き所に立ちよりて憩ふ。人々たき火して温まらむなどいひつゝ小柴など取り〳〵に持ちよりたればうづたかきまでになれり。火を附くれば身を温むるにあまりあり。わりごなど取り出し夕のこは飯あたゝめてムシヤ〳〵と打ち食ふもあり。そのさまはいとおかしともをかし。されば乞児の食を求め得たらんが如しなど評しあへり。時に九時なり。後の一隊は未影だに見えざれば、今は詮方なしとてそこより友生村に向きていでたつ。こゝらあたりはやゝ道路も開けて平地なれば歩行にもいたく苦痛を覚えず。まもなく神戸の里につきぬ。

今此の所を分ちて上神戸・下神戸と云ふ。思ふに我が国神代より伝はれる三種の神宝は、崇神の御門に至りて八咫鏡と叢雲の剣とをうつしつらせ給ひてこれを宮中にのこさせたまひ、昔よりつたはらせ給ふ神宝をば大和の国笠縫の邑にうつしたまひぬ。そのゝち垂仁天皇の御世に倭姫命御杖代となり給ひて諸国に宮所をたづね給ふこと十六ヶ所とかや。さればそのしばしの程居給ひし所々に神地神戸あり。伊賀にも名張の市守宮また穴穂宮にまし〳〵て次に阿閉の柘植の宮にましましゝことあり。

太神宮本記に曰はく、

伊賀国隠ノ市守二年奉レ齋、次ニ同穴穂ノ宮ニ四年奉レ齋、爾時伊賀国造進二篦山一葛一山ノ戸並ニ地ノ口ノ御一田年一魚取一測渠一作一瀬等一朝一御一気夕一御一汽供進、次ニ同国敢ノ都美恵ノ宮ニ二年奉レ齋、

伊賀国風土記に曰はく、

神戸里出杉一松御間城入彦五十瓊殖天皇六十六年天照太神垂跡也云々

とあり。この所も或はこれらのことより神戸と申しゝにはあらざるか。わきて近村由緒の地多きを見ても知るべきなり。

この村はづれの一茶店に憩ふこと三十分許。こゝより依那具をすぎて再長田川の堤つたひに下ること十町許、細きかり橋を渡りて市部に至る。こゝよりはまた山路にかゝりぬ。松の嵐もはげしく吹きしきりていとものすごし。たづきも知らぬ山中なるに道は二すぢに分かれたり。右手は稍々広けれども不知案内なる片山里なれば、これをたどらむも覚束なし。さりとて問ふべき人も無ければせむすべなし。おのづからそま人などもや居ると呼べとさけべど山彦ならでは答ふるものもなし。時に評議は右手に決したれば、各勇気をおこし霜かれはてし野草を踏み分けて松原つたひに辿り行くこと十町許なるに、道は谷間に尽きはてたり。如何成神の導き給ひしにか。あはれ八咫烏の飛きて道知るべすべきにもあらず。嗚呼進退こゝにたにまれりなど笑ひのゝしれども心のそこはいかにありけむ。

行きくれて問ふ人もなき山かげに　たゝずむ身こそ哀なりけれ

など口ずさむ。今は進むに道なく、さらばとて引きかへさむもいとつらけれど、かゝる山中に時刻を移さむもまた益なし。日も暮れぬべしとてやむことなくもとこし道を立ち返り左の方を辿りて行く。こゝに後の一隊も追ひしきたれば共に力を得て足を空に急く。間もなくある所に出でぬ。あたりの人に問へば友生の入口なりと答ふ。得たりやとて足はいよ〳〵速し。辛じて今は友生村につきたれば、暫し足をもやすめんとてそこらの茶店に憩ふ。此の時早午后二時過ぎなりき。

十一日　古塚及丸山城を吊ふ

本科三年生　宗村信喜

むかし蒿蹊謠ひて曰はく、

夜な〳〵にかはる旅ねの枕にも　むすぶはおなじ故さとの夢

舘を辞し伊賀の秀山明水の間を跋渉する事是に六日とはなりぬ。鞋痕印し去るもの今まさに五十里程に及ばむとす。故郷をおもふ情転切なり。況や肅殺たる秋空征鴻の横たはるあり。夕は阿保山嵐わが衣手をおそふにおきてをや。嗚呼知るべし。真個この歌意を解せむものは余等同行の士にあらずば万里遠征に従はむ益荒夫なる事を。

名賀郡新田村はもと美濃原と称しき。広漠たる原野たりしを今より二百年前新

に開拓せし処なりとぞ。新田の名は是よりや起りけむ。一望平田たゝなはる青垣山其の周りを走るが如し。疎林狐村其の麓を点綴す。人若浩然の気を養はむとならば何ぞ来りて寓をこゝにトせざる。

新田の塚

当地の有力者川口耕平翁を訪ひて馬塚及女郎塚等の古墳に関して所論を叩く。氏の談する所いまだ満足せず。氏が示せる明治十五年地誌取調書を按するに、

馬塚は本村の元標より未の八度字馬塚田圃の中にあり。塚は宮車形にして全体石を以てたゝみ築き南面せり。宮車形の高き処五間、幅広き処四十七間。頂上に六、七の松あり。塚の地皆本村に属す。此の塚垂仁天皇殉死を禁ぜし後の制にして、所謂埴輪の欠片所在に散見し、頂上年処をふる久しきを以て少し凹状を為す、繞すに堀即溝を以てし、溝幅概七間、今田と為すと雖も水つねにあり。近傍に玉塚及小塚と称するものあり。これ勾玉管玉の類を埋めしものなるべし。当時の現状依然として存し、其の陵墓たる毫を疑を容れざるなり。而して此辺承応の初年初めて開墾して本村を創始す。本村馬頭山真性寺の記録に、濃洲土岐氏、馬の為に害せられ、其の馬を□めし塚なりと伝ふるは、全く馬頭観音を衒るの詐術に出づるも、曾て其の誤謬を正すものなし。昔貴人をうまひと又美をうましなど訓み、総て崇敬の意なり。依て字馬塚及馬塚は全く訛誤せしものなり。且いかに武将又は富豪のものと雖も如是壮大式様を□（模カ）擬すべき者に非るは識者を待ちて后知るべき者にあらず。新撰姓氏録に、垂仁天皇々子息速別の為に伊賀国阿保村に宮室を築きて之を賜ひ、以て封邑となし、子孫因家となす云々、是によりて之を見れば其の宮室は阿保村にあり。陵墓の地、此の美濃原を捨きて他にトすべき地あらざるなり。

翁に伴はれて塚に上る。形式外装に至りては往年大和漫遊の途拝観せし垂仁天皇の御陵と異る所なし。御巫老翁が考証、豈吾人を欺かんや。さても一堆の土は事実と共に草莽に埋れて空しく荒蕪に帰せり。今しも秋たけて満木みな紅葉し、錦羅錦を為せり。命の香骨化して是に至るか。吊悼稍久うして丘を下れば暗雲漠々天地また寂たり。知らず魂魄何れの処にかさまよふ。転じて女郎塚に至り、息速別の妃をとぶらひ、殿塚によぢて息速別命の王子の霊を拝す。跪くべき一基の卒塔婆なく、漫々たる尾花の波は徒に風に激するのみ。誰か腸を絞らざらむ。又引かれて毘沙門塚に上る。件の地誌取調書に徴するに、是須珍都斗王の胤子意富賀斯王の陵墓なるべし。毘沙門と称するはこの王武芸超倫後代に示すに足る。依りて建都の君をさへ賜へりき。其の武勇彼の毘沙門の如し。故に僧侶の徒毘沙門と崇め祭りしもの尚五、六十年前まで口碑に存せしといふ。其の他小塚・鎌塚・貴人塚等あれど、さのみはうるさくて。

つら〳〵思ふ、古墳研究の事、何の用かある、曰はく、上世に於ける日本人種の伸張、美術工芸の程度、人心文野の状態、或は人事嗜好の如何を知るにおきて、欠くべからざるものなり。書契の伝へたる所誤れるところ、之に照さば又瞭然たらむ。然れ共、不幸にして此らの塚いまだ発掘せし古器少く、且之が鑑定の眼光なきを如何にせむ。たま〳〵塚上土器の片々散布するものあるを見る。相顧みて曰はく、何やらんと。答ふるものは曰はく、埴輪の破片ぞ。

丸山城をたどる

一行は川口氏が余等のために特に尽力の労を取られたるを謝し、別を告げて新田村を出づ。北方遙に高き御殿山を望みて当年天武天皇の企図を仰ぎ行くこと里余にして下神戸村に至り、昼飯を終ふ。一隊は既に先発して雲霧のうちに没し去りぬ。虎を野に放つとは抑諸子が為に設けし句か。さるにても健脚には呆るゝぞかし。前十一時こゝを去りて又同行五、六に別れ、藤堂・中西両助教授と共に同村なる扇田奈良蔵を訪ふ、先人伝、兵衛已に没して丸山城に関する伝説を聞くをえず。よりて藤岡定平□（翁カ）を一草庵にたづぬ。氏は同村の区長なりとぞ。容貌風采の質粗なる、言語の渋滞なる、燻らす莨の烟も次第に細りゆく老が身の哀れさ。今しも火鉢によりて盆大の餅をあぶれり。城に就きてこの古伝を問へば、「城は

御覧の通りにて、東天主・西天主といふ名がある斗りでゴワス」、其の形状構造の如何に及びては、手に餅をかへしつゝ「どんな事か知りませんさ」。要領を得ずと雖も人生のナチユラルはかゝる田舎の野叟に就きて見るを得たり。若彼をして学識あらしめば、村夫子の語余は之を与ふるに躊躇せざりし。翁がいほりをいで、丸山城下を過ぐ。故墟残塁当年の遺趾僅に指点するに足る。伊乱記は此の創造を伝へて余蘊なし。其の文にいはく

北畠中納言源朝臣具教卿は勢州南方並に和州宇田郡を領知して多気の里に居住し、九代相続し、大凡軍兵一万余騎の大将にして、其の威光遠近にとゞろき、世人多気の御所と称す。然るに天正乙亥の頃、具教卿常行心にそみて思慮し玉ひけるは、伊陽の諸民数百年王化に服せず貢を献せずして、恣におごりを為し、天理に背くの罪を正し、且は長くわが有国となすべしと、内々合戦の方便をなすと雖、具教卿底意に覚束なく恐れけるは、伊陽の諸士文学に疎く、愚盲の徒なりといへども無道においては其の切先するどにして容易に敵しがたく、其の上間諜に奥儀を極めて如何なる嶮難の城郭といへども窃に忍びいらずといふ事なし。たとへば鉄網をはりたる寝殿といへどもたやすくかくれ入り、堀川門塀を越ゆる事は飛鳥の如く、実に神変奇妙の術をなし、殊に火攻に巧にしていかなる城郭をもやきくづさずといふ事なし。国司もかねてあやしく思ひ玉へば好事なきにはしかじ。只天理を以て切取るべしとしばらく遠慮を廻らし只何となく伊陽の諸民に憐愍を加へ、交をあつくし、一向心をゆるさせければ、是を伊陽の士民は行末は知らず無二の懇意をとり結びける。国司今は心安しと諸事の運送の為にとて下神戸村丸山に城を築き討入のたよりとし、時節をうかゞひ伊州を併呑せんと要害堅固にこしらへたり。

後信雄が再興にかゝるものなりとぞ。彼の城この原げにや英雄が硝烟弾雨の悲劇を演ぜし一の舞台かと思へば、端なく無量の感起る。億土のうち夫に幾千の額幾万の弓矢や横はれる。仰げは無言の城趾は千万丈の紀念碑の如く、茫々たる原野は旧時の活歴史に似たり。天主を削る一陣の秋風にむかひて豈懐旧の情無からんや。

ざんざと音なふ松が下根をよぎ、田圃に添ふ事十余町にして比自岐村に入る。途次路傍に一小丘あり。よしあるもの哉と稲つむ□(嵯カ)にとへば、塚は尾塚といふ。かつて丘上黄金の鳥啼きたりと伝ふと答ふ。其の嫗、年には似気なき艶麗の声、亦黄金の鳥の啼くに似たり。直に役場に入りて村長某氏に面せり。当地の古墳旧跡に名ある者をきかんとてなり。先尾塚の由来を問ふ。氏曰はく、黄金の鳥啼きたりなどいふは必竟附会の説なり。思ふにこれは土地開拓の際、剰余の土をもりし処ならむ。当村附近に将軍塚といふあり。由来伊賀には貴人の落ち来しもの多し。蓋其等を葬りけむ。村民尊崇して疎にせずなどいはる。氏が所論、概かくの如し。例によりて地誌上申書を乞ひ、石神墳を得たり。惜むらくは日誌の材料たる要素に乏し。同役場を辞し摺見坂をよづ。坂嶮なるに非ず、森暗きにあらねど、仏法僧となく、鳥の声近く谿にこたふ。黄昏のほどならんには遠寺の晩鐘一しほ秋の哀やそへたりけむ。只日たけて万籟寂寛乾坤死せるが如し。山径に添ひ畔路を横ぎりて小山に登れば、身は伊賀の中位にあり。東鳳凰堂の霊山を仰ぎて弘文天皇の御魂を拝し、英王千古の往事を追慕し、西大和を望みて月が瀬の奇勝を懐び、奥藻の名張を顧みて、天武天皇の趾跡を窺ふ。伊賀の山川已に倦厭の情なきにあらねど、是を見納めとおもへば豈名残惜からざらむ。おくれ走せに両師に従ひ下友生村に出で先発の諸士と合す。互に長途の労を慰め、かたへの一茶亭に憩へば、秋風しきりに征衣にまとひ、汀の残柳招きてやまず。

十一日午后　下友生より平松に至る　　**本科一年生　小串重威**

下友生(シモトモノ)といふ所の茶屋にてしばし憩ひていでたつ。行方の山々の薄く濃く染めなしたるはえも云はぬ様なり。

花よりもげにそめてたきもみぢ葉の　こくもうすくも染むる山やま

蓮池（ハスイケ）の村も過きて喰代（ハウシロ）といふ村にいでつ。此処なる式部塚にいたりて見る。小高き丘の麓は小柴生ひ繁り、頂にはいと太くもあらぬ松檜の一本二本高く立てるが、下少し平かなるに小祠をすゑたり。此塚一名を櫁塚ともいへり。しきぶ　しきび通音より附会せしなるべし。俚俗相伝へて曰はく。昔里此に百地といふ者有けり。京官にて有ける時、相語ひし女ありき。百地本国に帰りし后、その女愛慕して已まず。追ひて此の里に来れるが百地の妻これを妬み、夫の不在に乗じて家人に命じて之を災はしむ。百地ものより帰り来て妾はいかにしつると問ふに、妻秘して曰はず、彼の妾が常に愛したりし犬百地のもとに走り寄り来て、その裾をくはへてある地に導けり。百地怪みてその地を鑿ちて骨を得たり。大に慟哭して之れを改葬し、墓前に櫁華を供せり。その櫁根を生じて後次等に繁茂したり。故に此の称ありといふ。又曰はく、是れ白河院の頃、此の地の大領たりし式部丞朝行といふものゝ墳なりといふ。未孰れか真いづれか否なるをしらず。蓋しるものはこの記を見てもしらむのみ。此村をも過ぎて出後の村にいたる。道の左に松杉の緑も深きに紅葉を処々にこきまぜたるいと能く籠りたる森あり。是膳子内親王の

いのりてもかひこそなけれひとりねの　いつもうさかの神垣の内

とよみたまひし烏坂の神社なりといふ。はるかなる所より拝みて行く。足疾く行きし人々は既に四、五町もかなたにあり。たゞ後影見ゆるのみ。藤堂先生を初め其の他遅れたる余ら五、六人の一群、今一息に彼等を追ひ越えて先登せん。たとひ道はなくとも田にもあれ。畠にもあれ。近きかたをこそと云ひつゝ先生真先に立ちて急ぎ給ふ。余等も及ぶ限りの大股に田の畔畠の小路を右に折れ左に廻りて本道にいでつ。されど先にありし一行は競争する勢もなかりけん、一町程も遅れざまに来れり。そこなる板橋を渡る。この橋を出後橋といふ。服部川に架せり。この橋を渡り中村の村を過ぎて、河北といふ所の茶屋に暫時休憩す。そこにて一抔の饂飩に腹ふくらかして、大塚ぬしとふたり、人より先に出でたつ。此の村より旅泊地平松といふ所までは二里に余れり。大塚ぬしいふやう、此処より平松迄二里の道なりといふ、一時間に行きつかんとていそぎぬ。おのれも遅れたらんには足の痛みもおぼえてかへりて苦しからんと、四百余州の軍歌をくりかへしくりかへし唱へ、一ッチ二ー一ッチ二ーの呼び声いさましく、勢込んで進みぬ。田の面すきかへす男、稲穂刈りほす女共、あまたふりかへり見て、兵隊さん〳〵とさゝやきあへり。胸に輝く勲章はなけれど、頭にいたゞく白筋の士官帽の徽章と、からだにまとふ小倉の洋服の金ぼたんと、きらめきわたり脚絆草鞋の装束は、予備の将校とや誤り見つらんかし。古今集の歌に、

流れいづる泪ばかりをさきたてゝ　ゐせきの山をけふこゆるかな

と道命法師が詩めりし井樫の山、井関判官の築きたりし小柳の城墟もこのわたりにありと聞きしが、見ずして広瀬の村も過ぎぬ。

南に布引笠取の山、北に間遠山、雲を凌ぎて高く空に聳えたり。麓を流るゝ川水涸れ、石いでゝ水岩に激する音なくて静なり。川に沿ひ道を行くこと十町余、かしこに五軒、こゝに六軒、或は萱ふきあるは瓦ふきの家どもの村、樹葉疎なる間に棟をあらしたる所あり。是下阿波の村なり。

神功皇后紀に、

幡萩穂出吾也、於二尾田吾田節之淡郡一所居之神（ママ）也

とある神の社こゝに座せり。そは此の道より一、二町もかなたの田の中に見ゆる森なりといへば、詣りて拝まんと思ひしが、如何にせん暮れかゝりたればはたさず。日影既に布引の山に隠れて帰鴉の巣を争ふ声かしこの枝こゝの梢にきこえてもの淋しく、人家の炊烟は軽くあがり、遠寺の鐘は遠く響きて、蒼然たる暮色村落に満ちみち、秋のあはれもかこたるゝばかり也。此の半日の道の記、我が学兄諸子にかゝせたらんには、其の勁筆をはしらせて写し出さるべきことゞも定めて多かりなむ。余は遺憾ながら其の手をもたず。よりて是を足にかへてひたはしりに走らすを所詮とせり。さるは此の記の短からんことを欲してなり。此の村はづれの家にて平松迄幾里ぞと問ふに、男、内より、かなたに見ゆるが平松の駅なり。

道の程八町もあらんといふ。先時計を出して見れば、途すがらはや五分経三分経ぬと云ひつゝ急ぎに急ぎしかひありて、定めの時までは未五分程を余せり。八町の道ならば急かずとも着くことを得べしとて悦ふ。一、二町も歩みて一人の老翁の車をおして来るに又問ふ。老翁、十町もあらんといふ。先には八町といひ又この老翁の十町と答ふるは如何。かゝる老翁のにぶき足もてありかんにはこの道も遠くこそは思ふらめとこの老翁を口の中に嘲りつゝ、わが手のにぶきをかくさん為に又急ぎに急ぐ。かくて定めの時をも過すことなくて平松なる伊勢屋に入る。主人まめ〳〵しく下女よびて、御すゝきの水まゐらせる。草鞋ときたまひて奥になど何くれとあつかふ。此の駅路も昔は旅人の往来しげくして賑なりしに、汽車の便ひらけてよりは旅人を見ることも稀になれりとか。二階の間も裏の室も何れもあきて侍れば御気にかなはんかたをとて案内す。室の作りざま美しく、田舎にはめづらしき宿なり。二階の三間と定めつ。遅ればせに来る人々もこゝに着きぬ。此の日行程大凡九里余。けふ途中処々に立ちよりなどしていたく足もつかれたれば、早く枕をうながしてふしどにつけば、いつしかこゝをいでたちけむ。身は華胥の国に入りぬ。

十二日　長野越

本科二年生　坂倉広胖

午前八時、平松の宿を出発す。老媼のいふ様、是処より五十町程も行き玉はゞ険しき山坂あらむ。それ長野峠なり。頂上に墜道あり。暴風の為に破壊せられて今は通行しがたしと、いとむつかしげに語る。きゝさしてゆく。此の日は秋天朗にて朝日の影いとうらゝかなれど、道のべの小草は皆霜に枯れふしてさながら冬の朝のごとし。

道のべの小草も今は霜かれて　うべ山風のさくむもあるかな

行手に見ゆるはそれか。あらぬか。羊腸たる嶮坂斜にをれて、遙に森林のあなたに見ゆ。果して老媼のいひしが如きか。長野越我に於きて何かあらむ。たゝなはる伊賀山を跋渉して身を月か瀬の秋風にさらし、足を鹿落の険路にきたひしをや。

さかしとは此の山坂を誰かいふ　唯ひた越にとひもこえなむ

よぢつ登りつ行くほどに、頂上と覚しき処に出てぬ。二町余の墜道あり。入口の石畳少し破壊したるのみなれば、容易に通行するを得たり。

近藤ぬしとりあへず、

音にきく長野の山もたやすくて　ふみ越ゆるあしのいたしともなし

こは明治廿年頃設置したるものとかや。高二間半、巾二間もあらむか。皆錬瓦石をもて堅固にしつらひたり。東方の出口に「補造化」といふ額面をかゝげたり。嗚呼造化の功を補ふこと亦大なりといふべし。されど補文字は足らぬ所へものをうづめ、又つぎたしなどしたるをこそいへ。山をくづし峯をうがちて掘抜したる所などは補とはいひがたかるべきか。此の事既く支那人馮雪卿が此処を過ぐとてこの文字つかひを難してこの筆者内海知事を文盲なりとあざけりたることありきとか。其の論を聞くに、此の一文字にていひしにはあらず。彼いへらく。ふと思ひいりたることなどは自其の非をかへり見がたき事は碩学鴻儒の聞えある人にてもあるならひなり。さるからに石に彫り万世に伝へむとする文字などは、必ず人にも見せ友にもとひて、さて後ものするを世の常とせり。内海知事はこの広くとひ厚くはかるといふ事をせざりしゆえに、此の過を万代にのこせり。人にとふといふ美徳をかきたる所、即ち文盲なりとていたくあざけりたるものなりとか。彼豚尾漢区々たる一文字の論何かあらん。あまりに暴言に過ぎたることありと伝へきゝたる我らも、一度はいきどほりたることありしが、道理はさることにや。今此の実物を見れば何となくあかぬ心地せり。文字もわれにかり用ゐてあらむからにはなるべく正しく使用したきものなりしか。それはともあれかくもあれ。土地開けず人智発達せざる時に当りては、道路狭隘、行人をしてまよはしめ、白昼盗賊徘徊して衆人をなやましたる事もありしならむ。

岩がねにふみまよひつゝ山坂を　たどりかねたる人もありけむ

さても開け行く御世の光よといへば、安元ぬし、

たゞならぬ峯の岩まをつらぬきて　通ふにやすき道もありけり

おくれじといそぐ折りしもあれ。先の細道にあらはれたる一行あり。監督教師藤堂・中西の二君をはじめ二、三の人なりけり。如何に健足なりとて遠迴をなしたまひぞよ。十町も近きをとてわらふ。登りては降り降りては登る。凡数十町にて長野峠を遠くあとべに見すてつ。

白雲のわけこし峯にたなびきて　別れぞをしき伊賀の山越

おなじ心にやありけむ、安元ぬし、

きのふまでなれてわけこし山路にも　けふをかぎりと別れぬるかな

流も清き細谷川をつたひてゆく。たゝなはる峯の紅葉はうすくこくおのがじゝ染めわけたり。さだめなき時雨の雨やいかに。高峯の錦たが為におるなど語り行けば、宗村ぬし、

谷川の岩せく水に　色見えぬ峯は紅葉のにしきなるらむ

見すてがたくやありけむ、山川ぬし、

錦きて帰らむことはかたからむ　行く手の紅葉をりかざゝばや

我も、

面白き旅路なるなか　紅葉にほふ言葉もさま〴〵にして

折りしも、後より薪を車にのせたるが来れり。中村ぬし、外套・鞄等のせ玉へ。其の車いと重げに見ゆればしばし助けてむと真面目にいふ。樵人もをかしとや聞きけむ。御心はいとありがたし。さる処までは行かぬをいかにせんといふ。中村ぬしの妙按、此処にやぶれぬ。

荷車の重き山路にひきかへて　君が言葉のかるくもあるかな

とてわらふ。かくて北長野なる伊勢屋につきしは十時半頃なりけり。余等より先着したるもの数人ありき。是処にて昼飯を終へて一休す。十一時半宿を発す。津までは四里十六町ありといふ。藤堂・中西の二君は腕車をかりて先発せられたり。三々五々後れては先たち先たちては後る。一室にありて朝夕古人と談するもさることながら、三尺の洋杖（ステツキ）、七寸のわらじ、たゞ一鞄を腰にして山河を跋渉し、名所古跡をたづぬるは又別なりけりと思はる。やがて高宮・片田の諸村をすぎて津市に入る。北町なる魚為に着きしは三時すぐる頃なりけり。嗚呼我が一行、嶮坂嶮岳を跋みこえて、数日の行程をわたり一人の疲労するものなくて、今将に故山にかへらんとす。加ふるに此の数日の間一日の雨天もなかりしは、げにいみじき幸とやいふべき。はや明日一日なりと思ふに、山の端に立ちのぼる一むら雲を見ても雨雲かとうたがひ、庭のせゝらぎかそけき音をきゝても雨かと思はるゝは、げにことわりなりかし。山川ぬし、

それなりとかつはしれとも忘れては　雨かとぞ思ふ庭のせり水

此の夜、福舎・中村の二人と囲碁に夜をふかしけり。寝につきしは十一時頃なりけむ。しらず今よひの夢何処にかさまよふらむ。

十三日　　本科二年生　三浦千畝

午前七時同理行装発旅舘是日天気晴朗肌膚稍覚暖顧視同行装貌快活歩脚軽斉似不覚疲労者蓋伊賀之為地四山奔騰万峰邐迤気候寒冷森々逼人今者到此人馬絡繹市街如緒寒暖頓異使人有遷喬之想然而幽清閑雅天然風景別於彼存今茲四月予詣山室山途次一遊市街依稀今猶生面乃尾諸友而歩右折行五六町到旧城趾環以深塹老松数百株蟠屈其上又右折沿塹行有裁判衙左折望見師範学校白壺皚々日光輝映頗眩人目雖結搆不甚大一見知造築堅牢藤堂中西二監督先入通刺乞参観良久教諭小倉氏出引接一行饗茶菓備極慇懃聞本校生徒亦以昨日上修学旅行途以故校長以下皆不在

先覧教室々分以学科不以学級次自修室各室容二十員組長一人什長二人以整理室内次寝室毎室臥榻五脚接壁有架置日用器具体裁整齊時已午前十時三十分於是一行辞去藤堂監督別行偏視市下学校聞吾寄宿舎近日図革新蓋欲集而大成也行四五町有橋曰岩田橋即投橋畔一亭喫午飯閲汽車発刻表猶饒時間乃与二三友任足漫歩閲時計

已乗下午一時乃急歩抵安濃津停車場諸友悉在已而列車轟々作長蛇勢噴黒烟而来衆
争乗一行殆塡車一二輛柘開車窓眺望待発吹笛相応転一転起動稍速衆皆放心色余亦
惰眠初余患脚疾廃止運動者亘数十余日此行頗自危之今也幸無事笛声一覚既抵松坂
駅客上下者頗極雑沓吾一行有凭車窓睡者覚而楷眼者起而次伸者如不知他喧囂者已
車再起転快馳加速経相可田丸諸駅抵宮川時方午後三時一行下車歩到牛谷坂上夕陽
西低暮色蒼然而来神路之山五鈴之水煙靄糢糊中指点吾皇學館屹焉可弁此行経日一
週行数十里未曾有一遺漏一失態信藤堂中西両監督之賜也多謝多謝
　吾皇學館挙修学旅行三次于茲一于大和一于山城摂津泉播洲前後皆有紀行余掲籍
本館実在今年四月是以皆不与焉未知此行此諸前二回得益孰多少受楽孰浅深或曰伊
賀之為地山岳四周人烟稀薄道路不通文物未開古社旧寺之可観者大概罹兵燹今存者
僅其十一耳比諸前二回之所歴何啻霄壤雖然寸有長尺有短取捨有時而変近来諸科学
進歩日加一日研究之詳考証之該爬羅剔抉闡幽顕微特於史学為然余読国史毎至壬申
之乱未嘗不然怒致憾於史事之闕然当時国史之体尚諱而闕者必有竢於後世学者焉初
天武之出吉野取道於伊賀乱平後亦還致伊賀且両軍交戈之地多不出于此間而地名事
蹟之未顕於今日者往々而存夫弘文帝係伊賀采女宅子之出則土俗伝称弘文帝陵者亦
決非無由之言蓋此行之所以不獲已也已

（奥付）

明治三十年八月一日印刷
仝　年仝月三日出版

編輯兼発行人　三重県度会郡宇治山田町大字浦田町
神宮皇學館寄宿舎
安藤正次
同県同郡同町大字中之町三十四番屋敷
印刷人　久土目周蔵
同県同郡同町大字浦田町
発行所　神宮皇學館
同県同郡同町大字岡本町九十七番屋敷
印刷所　山田活版所大成舎